

石川県埋蔵文化財情報

第 49 号

巻頭図版（一針C遺跡 観法寺墳墓群 大場遺跡）

令和4年度の発掘調査から 所長 川畑 誠 … (1)

発掘調査略報

一針C遺跡（小松市） (5)

観法寺墳墓群（金沢市） (11)

矢田遺跡（七尾市） (15)

大場遺跡（金沢市） (19)

令和4年度下半期の出土品整理作業 (22)

令和4年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 (25)

新潟県内における古墳時代の水のマツリ 鹿取 渉 … (28)

富山県内における水のマツリ 青山 晃 … (34)

古墳時代の水マツリ～石川県をケーススタディとして～ 新美祥人夢 … (38)

福井県（越前・若狹） 魚津知克 … (42)

京都府北部・兵庫県北部（丹後・但馬） 魚津知克 … (44)

山陰地域における古墳時代の水のマツリ 松尾充品 … (48)

東海古墳時代「水のマツリ」遺跡について 穂積裕昌 … (52)

近畿地方中枢部における古墳時代の水のマツリ 青柳泰介 … (60)

調査研究報告

石川県七尾市矢田遺跡出土の木製刀剣装具について 新美祥人夢 … (66)

新崎式と船元式について 久田正弘 … (80)

弥生時代中期前半の北陸と長野の関係 久田正弘 … (88)

2023年11月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター



写真解説

一針 C 遺跡

秋調査区全景（東から）日本海を望む

一針 C 遺跡の秋調査は、手前の P3 区下層と奥の R・S 区下層を調査した。平成 25 年度から両調査区周辺の空閑地及び現堤体部分について延 34,010 m²の発掘調査を行い、今次調査をもって 9 年にわたる発掘調査を終了した。

秋調査区全景（西から）白山を望む

弥生時代中期から古墳時代前期にあたる下層の遺構は、蛇行する自然流路に分断されるように建物群が展開する。今次調査では 2 本の自然流路 (NR05・NR06) を確認したことにより、南東からの流れが分流してそのうちの 1 本 (NR05) が一針 C 遺跡内を蛇行して流れていたことが分かった。



秋調査区全景（東から）日本海を望む



秋調査区全景（西から）白山を望む

写真解説

一針C遺跡P3区

環濠完掘状況（北東から）

平成 29 年度調査（本誌 40 号）と令和 4 年秋調査（本誌 48 号）で確認された環濠の両調査区に挟まれた未調査部分を調査したことになる。環濠の埋没した時期が弥生時代後期後半であることや開削時期についても既往調査の成果と矛盾しない。

掘立柱建物（南から）

環濠の南東岸にあたかも接するように梁行 4 間、桁行 3 間以上の掘立柱建物。柱掘り形は円形に近く、桁行柱間は 1.2 ～ 1.5m、梁行柱間は 1.2 ～ 1.8m と狭いうえ、中間柱の間が狭い。遺物の出土はないが、周辺から 7 世紀ごろの土器が散見されることから、建物時期を示唆するものと考えている。



環濠完掘状況（北東から）



掘立柱建物（南から）

写真解説

一針C遺跡R・S区

自然流路 (NR05) 完掘 (南西から)

幅約 20 m、検出面からの深さ約 1.5m の自然流路である。南西の調査区外から NR06 に分流し、北東に蛇行しながら流れる。川の最下層は弥生時代中期前葉の遺物が出土し、古墳時代前期にはほとんど埋まった状態となって平安時代に完全に埋没した。途中二つの厚い腐植土層（ピート層）があり、それぞれ弥生時代中期中葉と後葉の時期に対応する。

碧玉等焼成土坑 (東から)

SK116 とした不定形に横長の土坑で、長さ 2.36m、幅 1.55 m、深さ 0.6m の規模である。2 段階掘りになった形状で、埋土には焼土や炭・灰が厚くみられる。これらは幾重にも面をなすようで、複数回の焼成を示す。これらに混ざった状態で碧玉の剥片やチップ、あるいは安山岩の小片を 400 点弱確認した。通常の碧玉よりも粒状感のある碧玉が多く、施溝分割による剥片も少なくない。管玉製作の一工程を示す遺構と考えられる。



自然流路 (NR05) 完掘 (南西から)



碧玉等焼成土坑 (東から)

写真解説

観法寺墳墓群

調査地遠景（西から）

遺跡は河北潟や森下川を望む舌状に張り出した丘陵尾根上に立地する。道路と観法寺パーキングエリア建設前は、尾根が丘陵へと続いていたことがわかる。

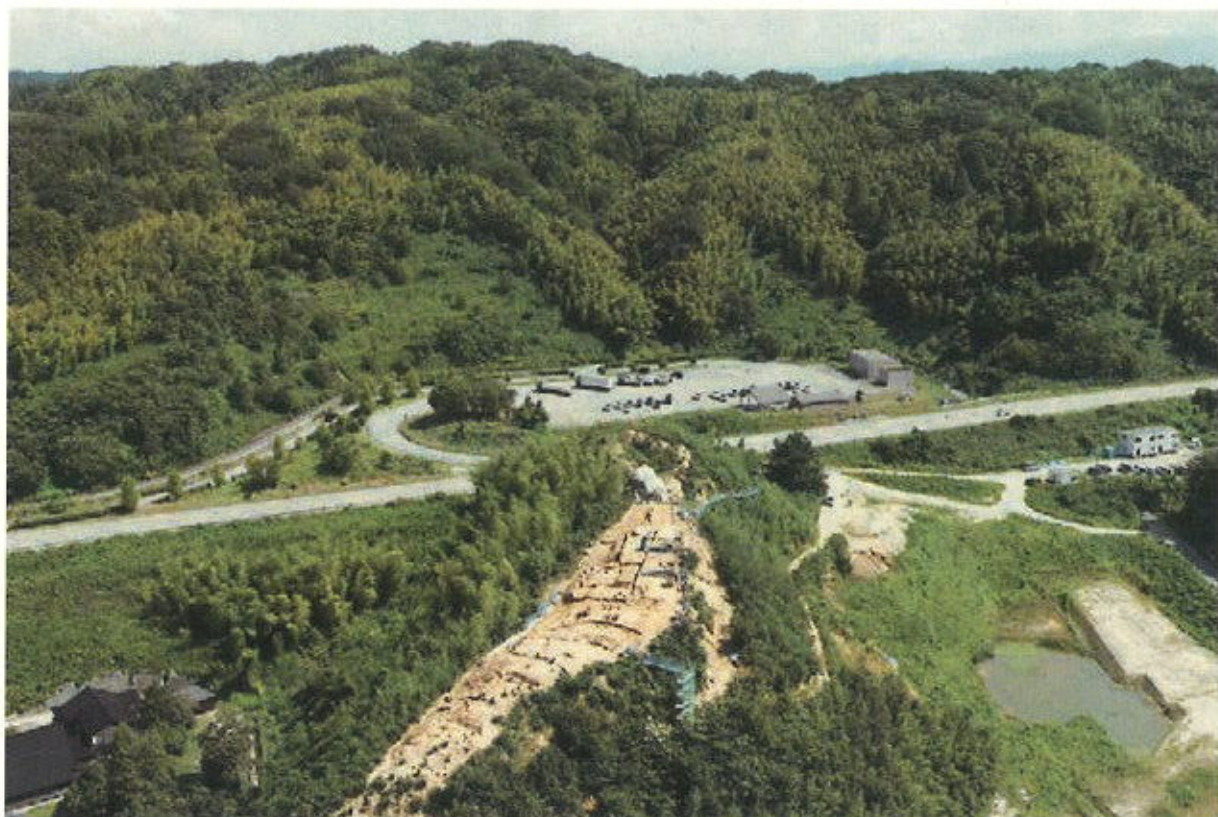
2年間に及ぶ調査により、尾根上に溝で区画された弥生時代後期後半～終末期頃とみられる墳丘墓が計8基築造されていたことがわかった。

また、墳丘墓群だけでなく、環濠や竪穴建物、複数の大型土坑等の発見から、県内でも数少ない高地性環濠集落の存在を金沢市北部で初めて確認した。

丘陵尾根上の墳丘墓群と竪穴建物（南東から）

尾根を溝で区画する墳丘墓を昨年度と合わせ、計8基確認した。南北斜面の崩落が著しく全形は不明なものが多いが、全長約5～12mで方形や長方形を呈するとみられる墳丘墓が多くみつけた。

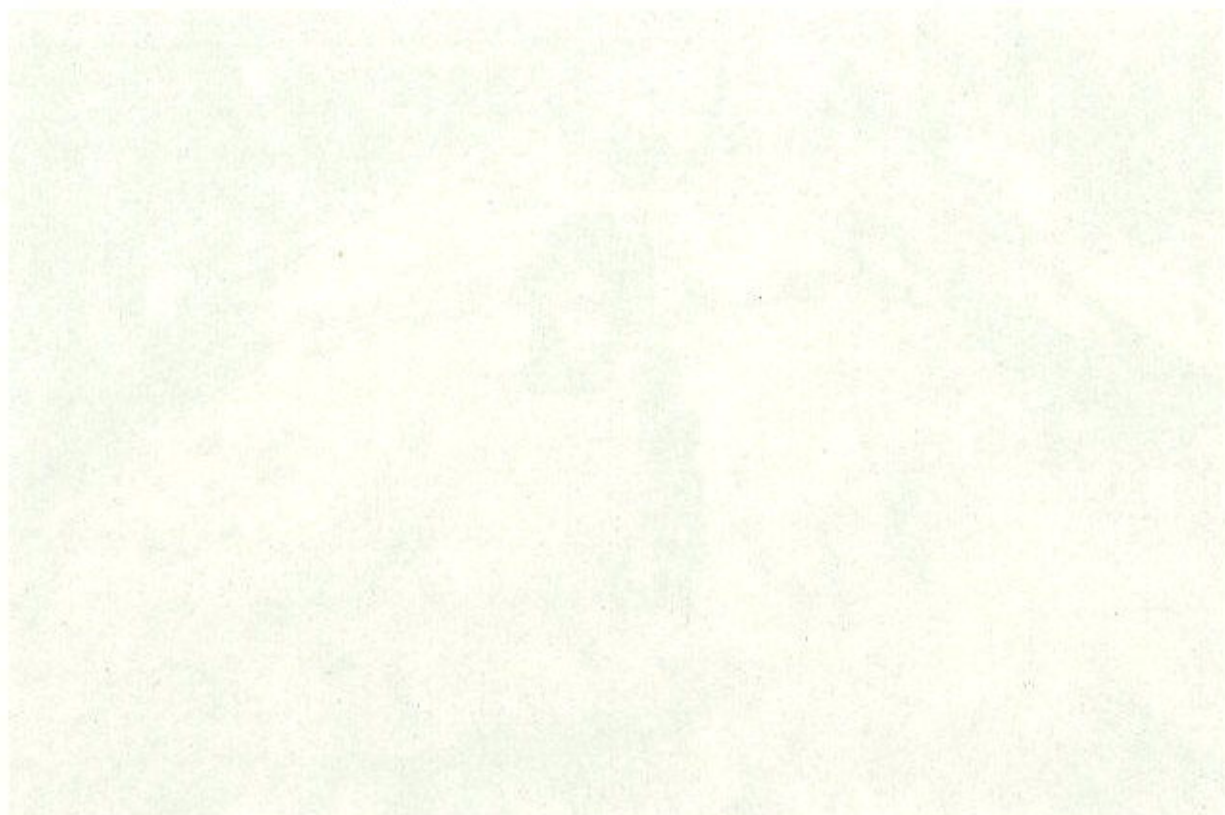
竪穴建物は、約6.9m×6.7mの隅丸方形で、4本の支柱穴や建物中央やや西寄りの床面からは焼土や灰が残る炉跡を検出した。建物内や柱穴、壁際を巡る溝からは、弥生時代後期後半頃の土器と共に鉄鏝や砥石、碧玉の剥片が出土した。また、一部で二重に巡る壁溝を確認し、ほぼ同じ場所で建て替えられていたことも判明した。



調査地遠景（西から）



丘陵尾根上の墳丘墓群と竪穴建物（南東から）



写真解説

観法寺墳墓群

四隅が突出した1号墳丘墓と埋葬施設（北西から）

1号墓は、方形の墳丘の四隅が飛び出した平面形を呈し、周溝も他と違い直線状ではなく、弧を描くように掘られていた。全長約12.5mの四隅突出型墳丘墓になる可能性があり、石川県内では類例の少ない墳形である。墳丘には複数の埋葬施設が重複してつくられており、中心となる第1埋葬施設bは全長約6.5m、上幅約2.6m、深さ約50cmの長大な墓壇内に、全長約5m、幅約80cmの箱形木棺の痕を検出し、ガラス製小玉や碧玉製の管玉などが出土した。外側には木槨状の痕跡もみつき、弥生時代後期後半～終末期頃の築造と考えている。

鉄製短刀が出土した1号墓の埋葬施設（南東から）

1号墓第1埋葬施設aの全長約2.1m、上幅約70cmの箱形木棺部分からは、切っ先を北西方向に向けた全長31cm、幅2.7cmの鉄製の短刀が出土した。茎に切断痕があり、素環頭部分が切断された素環頭鉄刀であった可能性がある。



四隅が突出した1号墳丘墓と埋葬施設（北西から）



鉄製短刀が出土した1号墓の埋葬施設（南東から）

写真解説

観法寺墳墓群

丘陵斜面に掘られた環濠（北西から）

7号墓北側斜面で断面V字形の環濠（壕）を延長約20mに渡り確認した。斜面崩落の影響などにより、一部でのみ確認できたが、尾根周囲を巡っていたとみられる。後世に上部が削平を受けているが、推定上幅約6m、深さ約3.5mであったとみられる。溝の下層からは弥生時代後期後半頃の土器が出土した。

尾根上部に掘られた大型土坑（東から）

尾根上部と斜面に竪穴状に深く掘られた弥生時代後期～終末期頃の大型土坑を前年度調査と合わせ計11基確認した。規模は径約2～5m、深さ約1～2.5m、平面形態も円形・隅丸方形・方形と様々だが、底に壁溝と小穴（梯子穴か）を持つ傾向がみられる。南斜面の大型土坑からは、弥生時代後期後半頃の土器がまとまって出土した。土坑の機能は不明だが、貯蔵穴の可能性を考えている。

写真は上幅約5.5m、深さ約2.5mを測る最大の大型土坑で、上部は埋没過程の壁面崩落により広がっており平面は多角形だったが、下部は隅丸方形を呈し、元々の上幅は約3mと推定される。土坑壁面下部には、掘削痕とみられる筋状の凹みを多く検出し、形状から鋤による掘削痕と考えている。土坑底には、壁際に壁溝が巡り、中央に深さ約70cmのピットが掘られていた。柱や屋根の有無については今後の検討課題である。



丘陵斜面に掘られた環濠（北西から）



尾根上部に掘られた大型土坑（東から）

写真解説

大場遺跡

調査地遠景（南東から）

大場遺跡の周辺は田んぼが広がり、東側には森下川、北側には河北潟が位置している。森下川下流の沖積平野であるこの場所は、森下川や河北潟の度重なる氾濫を受けてきており、調査でも氾濫・湿地堆積層が確認されている。

なお、この写真は丘陵上に立地する観法寺墳墓群から遺跡周辺の地形を俯瞰したものである。

流路に沿う総柱建物（南東から）

3区第1面において、流路と総柱建物がみつかった。流路からは平安～鎌倉時代(11～13世紀)の遺物が出土しており、総柱建物は流路に沿って建てられていることから、同じ時期の遺構と考えられる。

河北潟周辺の低湿地に位置する遺跡では、11世紀以降に集落の開発が行われた様子が多く見られ、これらの流路や建物も、地域一帯で行われた開発に伴うものと推測される。



調査地遠景（南東から）



流路に沿う総柱建物（南東から）

令和4年度 発掘調査位置図



令和4年度の発掘調査から

所長 川畑 誠

はじめに

令和4年度に県内では、開発に伴う緊急発掘調査22件42,175㎡と、学術調査、保存目的の発掘調査10件2,743㎡が、それぞれ実施された（令和5年2月26日現在）。令和3年度と比較すれば、緊急発掘調査が件数の増減なし（面積3,226㎡減）、学術調査、保存目的の調査が4件の減（同671㎡減）となる。緊急発掘調査を地域別でみれば、北加賀地域、特に区画整理事業が多い金沢市、野々市市に集中する状況が継続しており、調査件数で12件と半数以上を占める。一方、能登地域が5件、南加賀地域が小松市で2件と、北加賀地域以外の調査は低調に推移している。学術調査、保存目的の調査は、5市町で実施されている。令和3年度まで調査を継続していた能登町旧松波城庭園、羽咋市柳田シャコデ廃寺跡、同市寺家遺跡等は、現地での調査を完了している。その成果を十分に整理・検討し、今後の保存活用を生かされることを期待したい。なお、現地説明会は、県民が発掘現場で調査担当者の説明を聞きながら、調査成果に直接触れる大切な機会である。令和4年度は、各主催者が新型コロナウイルス感染症対策を工夫しつつ、No1・8・17・22・C・D・G・Hなどで実施されている。

1. 石川県埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査

県教委から当財団に委託された発掘調査は6件15,930㎡と、昨年度と同様に調査面積は低水準である。地域別でみると、能登地域での調査件数が増加する一方、金沢・加賀地域では国土交通省事業であるNo8・21の現地調査が最終年度を迎える等、相対的に低調となった。本誌では、七尾市矢田遺跡（No3）、金沢市大場遺跡（No7）、観法寺墳墓群（No8）、小松市一針C遺跡（No21）秋期調査の概要を掲載している。詳細は、各報告に詳しいが、現地調査が完了した観法寺墳墓群、一針C遺跡に若干触れたい。

観法寺墳墓群は、令和3年度に着手、尾根西側調査区で弥生時代後期～終末期の墳丘墓5基、弥生時代後期後半の大型土坑2基、中・近世の墓地を確認している。令和4年度に実施した尾根中央部の調査では、新たに墳丘墓3基が見つかり、うち1号墓第1主体部bは長大な墓坑（全長約6.5m、上幅約2.6m）を穿ち、全長約5mの箱形木棺を納めたと考えられる。また、方形の竪穴建物1棟、大型土坑9基、北側斜面で環濠を検出し、弥生時代後期後半の高地性環濠集落が存在することが明らかとなった。改めて、発掘調査の怖さと醍醐味を強く痛感させられた現場となった。

令和4年度発掘調査一覧表

No	掲載号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	内 容	調査面積 (㎡)	事 業 者	事 業 名
8	本号	観法寺墳墓群	金沢市観法寺町	弥生～中世	墳墓、集落跡	1,770	国土交通省	一般国道159号改築（金沢東部環状道路）
21	48号・本号	一針C遺跡	小松市一針町	弥生～中世	集落跡	3,370		梯川河川改修
1	48号	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	縄文～近世	集落跡	2,800		国道改築一般国道249号（輪島バイパス）
4	48号	倉田遺跡	羽咋郡志賀町倉田	弥生～古代	集落跡	480	土木部	一般県道羽咋田鶴浜線
3	本号	矢田遺跡	七尾市矢田町	弥生～中世	集落跡	2,370		七尾外環状線 街路整備
7	本号	大場遺跡	金沢市大場町東	古墳～中世	集落跡	4,940	教育委員会	いしかわ特別支援学校整備
6件						15,930		

一針C遺跡は、河川法により調査可能期間に大きな制約をもつ調査であり、平成25（2013）年の着手以降、平成28年度以外の各年度に調査を継続、延べ調査面積は34,010㎡を数える。弥生時代中期～中世におよぶ3回の生活面の重複に加えて、調査区の細分化や遺構判別が難しい土質等のため、難しい調査を継続してきた。今後は、得られた膨大な遺物、図面・写真を整理・統合し、本遺跡の様相を明らかにする作業を計画的に進めていきたい。なお、令和4年度春期調査については、第48号で概要を報告している。

2. 市町等が実施した緊急発掘調査

市町等が調査主体となった緊急発掘調査は、16件26,245㎡を数える。市町別では、金沢市が6件12,341㎡、野々市市が4件10,302㎡、その他5市町が6件3,602㎡となり、区画整理事業等に起因して金沢市、野々市市における調査が突出した状況である。

主な調査成果として、金沢市南新保遺跡群（Na9～11）、野々市市田尻ジツタ遺跡（Na17）、小松市八日市地方遺跡（Na22）を紹介する。令和2年度から始まった区画整理事業に伴う南新保遺跡群（南新保C遺跡、南新保D遺跡、南新保三枚田遺跡等）の調査では、弥生～中世の良好な集落域、墓域、自然流路等を検出している。令和4年度の調査では、方形周溝墓数タイプ10基が確認されている。近接する南新保C遺跡、西念・南新保遺跡等の墓域との比較・検討により、弥生時代中期～古墳時代前期における墓制を考えるうえで重要な資料といえる。3度目の調査となる田尻ジツタ遺跡では、中世後半の集落域を検出した。集落域は、区画溝（一辺約50×35m）に囲まれた大型の掘立柱建物群エリアと、多数の竪穴状遺構・土坑と小規模な掘立柱建物群で構成されたエリアに大別され、県内での当該期の集落構造を知りえる数少ない資料となる。八日市地方遺跡は、北陸を代表する弥生時代中期の大規模環濠集落であり、今回の調査は集落南西側にあたる。並走する環濠、玉作り関連遺物が集中する居住域、方形周溝墓を中心とした墓域等を確認、埋積浅谷左岸居住域1を半円形に取りまく多重環濠の全体像がほぼ明らかとなった。県内2例目・最古となる小型環状石製品（指輪）等の出土品も注目できる。

3. 学術調査、保存目的の発掘調査

学術調査または保存目的の発掘調査は、前述の理由により件数は10件と減少している。

石川県金沢城調査研究所は、令和2年度から国史跡金沢城跡二ノ丸跡の確認調査（C）を実施している。二ノ丸に所在した御殿は、その機能から「表向」「御居間廻り」「奥向」に分けられる。調査は、「表向」の広縁を西側に範囲を拡張し、式台北、実検ノ間、虎ノ間、竹ノ間等を対象に実施された。調査の結果、江戸後期の礎石基礎列等を確認、御殿北東部の建物位置を特定した。また、竹ノ間下層の火災片付け土坑から前期御殿の飾金具が出土している。数寄屋敷西堀縁の石垣保全（E）に伴う石垣の解体調査は、継続して進めている。

金沢市涌波遺跡（土清水煙硝蔵跡）（G）は、江戸期に加賀藩が黒色火薬を製造した施設で、国史跡に指定されている。平成19（2007）年度の第1次調査以降、断続的に確認調査を実施している。令和4年度（第6次調査）は、前年度から引き続く搗蔵跡の調査であり、辰巳用水の水流を利用する水路跡や水車設備と考えられる石敷遺構等を検出している。

野々市市の国史跡末松廃寺跡（H）は、昭和45（1970）年度に整備、現在は史跡公園として公開・活用されている。平成26（2014）年度から再整備の基礎資料を得る目的で確認調査を継続、重要な成果を得ている。令和4年度は、金堂南西隅の調査を実施し、全国でも類例が少ない人頭大の玉石を用いた地盤改良（掘込地業）の詳細な状況を確認している。その歴史的意義を含めて、今後注目したい。

令和4年度県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	○			○		○	2,800	県
	台地上に立地する。調査区中央の谷部で縄文時代後期の貯蔵穴や竈群、谷部両岸で掘立柱建物や焼成土坑等からなる古代の集落。また谷部東岸で加賀藩「輪島在任」との関係が窺われる近世の掘立柱建物を検出した。									
2	総持寺遺跡	輪島市門前町門前	○	○	○	○	○	○	42	市
	土坑、井戸を検出し、縄文土器、須恵器、陶磁器、瓦、木製品が出土した。									
3	矢田遺跡	七尾市矢田町		○	○	○	○		2,370	県
	古墳時代中後期～後期の河跡2条と、同時期とみられる掘立柱建物2棟を確認した他、河底のクワ貯蔵穴(弥生時代)、河岸に沿った水田跡(古代)等、時代によって変遷する水場利用の変遷が窺われた。									
4	倉場遺跡	羽咋郡志賀町倉垣		○	○	○			480	県
	古墳時代の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物、柱穴、河跡を確認した。河跡からは、古墳時代後期の多量の土師器、須恵器の他、弥生時代後期の土器、奈良・平安時代の須恵器などが出土した。									
5	羽咋古墳群	羽咋市川原町		○	○				200	市
	神社移転にかかる発掘調査。土坑、ピット、溝状遺構を検出し、弥生時代末期から古墳時代初期の土器が出土した。									
6	細瀬神社遺跡	かほく市二ツ屋		○					35	市
	柱穴、竪穴建物の一部を検出し、主に弥生後期～末期の土器片が出土した。									
7	大場遺跡	金沢市大場町東			○	○	○		4,940	県
	上層面で平安～鎌倉時代の掘立柱建物と井戸、室町時代の屋敷地の区画溝などを検出した。また祖産・湿地堆積層を挟んで、下層面で古墳時代や古代の溝、土坑などを確認した。									
8	観法寺墳墓群	金沢市観法寺町		○	○	○	○		1,770	県
	周溝で区画された弥生時代後期～終末期頃の墳丘墓、弥生時代後期の環濠に囲まれた竪穴建物や大型土坑、中世の配石墓などを確認した。墳丘墓1基の主体部から鉄刀が出土した。									
9	南新保C遺跡	金沢市南新保町		○	○	○			5,400	市
	方形周溝墓、掘立柱建物、平地式建物、溝などを検出した。									
10	南新保D遺跡	金沢市南新保町		○	○				900	市
	弥生～古墳時代の溝と井戸を検出した。									
11	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保町		○	○	○	○		5,900	市
	方形周溝墓、掘立柱建物、溝などを検出し、古代の溝から墨書土器が出土した。									
12	金沢城下町遺跡(尾張町1丁目9番地点)	金沢市尾張町						○	94	市
	近世北国街道沿いの町家跡の発掘調査。土坑、柱礎石、石列などを検出し、近世陶磁器、土器、木製品などが出土した。									
13	金沢城下町遺跡(主計町3番地点)	金沢市主計町						○	37	市
	発掘調査で西内惣構跡の堀及び道路を検出した。									
14	金沢城下町遺跡(西外惣構跡宮内橋西地点)	金沢市広坂						○	10	市
	西外惣構跡の堀土居側石積の修理に伴い、裏込部分の調査を実施した。									
15	御経塚オツツ遺跡	野々市市長池	○	○			○		1,676	市
	弥生時代後期の集落跡の発掘調査。竪穴建物や平地式建物から多数の弥生土器が出土した。また、管玉など玉製品やその未成品の出土から、集落で玉作りを行っていたと考えられる。									
16	三日市A遺跡	野々市市二日市	○	○		○	○	○	425	市
	中世の掘立柱建物2棟と方位を合わせた溝を検出した。今回確認した建物は、これまで周辺の発掘調査で確認した掘立柱建物と方位がほぼ同じである。									
17	田尻ジツタ遺跡	野々市市田尻町	○				○	○	4,756	市
	中世後半の集落を確認した。多数の掘立柱建物と竪穴状遺構、大型の溝で区画された方形の宅地を検出し、青磁や瀬戸焼天目茶碗などの陶磁器や鎌刃、鉄鏝などが出土した。									

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
18	末松遺跡	野々市市中林	○	○	○	○	○		3,445	市
	古代、中世の集落を確認した。古代では竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、中世では掘立柱建物複数棟と多数の竪穴状遺構を検出した。									
19	宮永遺跡	白山市旭丘		○	○	○			715	市
	掘立柱建物と竪穴建物、土坑を確認し、弥生土器や須恵器、土師器等が出土した。									
20	下吉谷遺跡	白山市下吉谷町	○	○					410	市
	遺物包含層を確認し、縄文土器や近世の碗が出土した。									
21	一針C遺跡	小松市一針町		○	○	○	○		3,570	県
	弥生～古墳時代の河耕、土坑、溝、竪穴建物や、中世の井戸、水路等を確認した。弥生中葉の上から玉作関連遺物が出土した。									
22	八日市地方遺跡	小松市日の出町	○	○				○	2,200	市
	大規模環濠集落の調査。過去の調査と合わせ、埋積浅谷(旧河道)の左岸居住域を半円に取りまく多重環濠のほぼ全体像が明らかとなった。また環濠内には墓域が展開し、環濠から弥生時代最古の石製指輪が出土した。									

調査担当 市:市教育委員会 県:県埋蔵文化財センター

◎学術研究、保存目的の発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	三室まどがけ1号墳	七尾市三室町			○				235	市
	令和3年度に石室の調査、令和4年度に墳丘の3次元測量調査を実施した。									
B	荒山城跡	金沢市荒山町						○	77	市
	加賀・越中国境に築かれた山城。主郭、大堀切、曲輪などでトレンチ調査を実施し、各遺構の規模を確認した。									
C	金沢城跡(二ノ丸)	金沢市丸の内						○	2,000	城
	二ノ丸御殿復元整備に伴う発掘調査。二ノ丸御殿の北東部(表式台、虎ノ間、吏檢ノ間、広縁)に対応する礎石根柢列等を確認した。									
D	金沢城跡(御膳間先)	金沢市丸の内						○	30	城
	二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間について遺構を確認するための調査。白色粘土を貼った池の一部や池以前の遺構を確認した。									
E	金沢城跡(数寄屋敷西)	金沢市丸の内						○	200	城
	数寄屋敷西堀縁石垣の保全に伴う解体調査で、1～3段目の解体調査を実施した。近世後堀及び近代の修理痕跡と、石垣構築当初の可能性のある裏込め層を確認した。									
F	涌波遺跡	金沢市涌波町						○	25	市
	既に用水管理通路法面の石積整備に伴う発掘及び測量調査。									
G	涌波遺跡(土清水塩硝蔵)	金沢市涌波町						○	80	市
	土清水塩硝蔵跡の史跡整備に伴う遺構確認調査。既に用水の水流を引き込むための水路跡などを確認した。									
H	末松廣寺跡	野々市市末松二丁目	○	○	○	○	○	○	45	市
	金堂南西隅の確認調査で、金堂の建物の地盤改良(掘込地盤)を確認した。また、改良の手段として、面的に多量の玉石を敷き並べるという類型の少ない工法が採用されていることを確認した。									
I	西山古墳群	能美市徳久町			○				24	市
	古墳の周溝・埋設施設を確認調査。鉄製品等が出土した。									
J	南野台遺跡	小松市古府町	○	○	○	○	○		27	市
	加賀国総社推定地の確認調査。古代の礎石遺構、中世の礎石掘立柱建物を確認した。									

調査担当 市:市教育委員会 城:県金沢調査研究所

※本データは「令和4年度発掘報告会」(令和5年2月26日)の当日資料を転載(一部改変)。

一 針 C 遺 跡

所 在 地 小松市一針町地内

調査期間 3,570㎡（秋期報告分1,780㎡）

調査面積 令和4年4月13日～6月10日

10月11日～令和5年1月27日

調査担当 伊藤雅文 松山和彦 安中哲徳

西田昌弘 新美祥人夢 水田 勝

小森康弘 岩城栄淳 齋藤綾乃

上村顕太郎 舟澤朱音

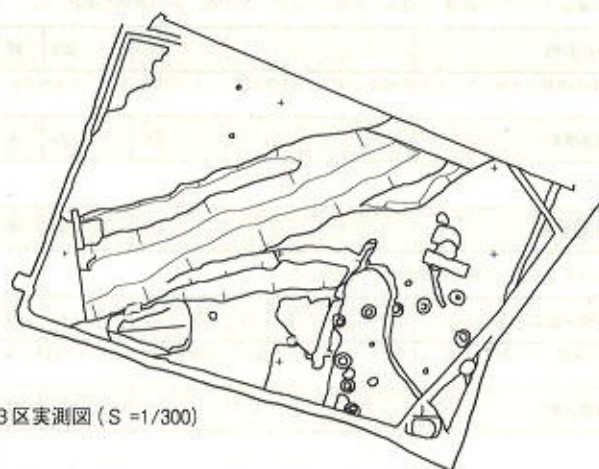


遺跡位置図 (S=25,000)

調査成果の要点

- ・P3区下層では、P2区の延長となる弥生時代後期～平安時代までの旧自然流路を検出し、弥生時代集落を囲む環濠の一部を調査した。
- ・R・S区下層では、古墳時代～弥生時代の集落跡と平安時代に埋没した旧自然流路を検出した。
- ・古墳時代の遺構には竪穴建物などを調査した。
- ・弥生時代の遺構には多数の土坑があり、焼土とともに多数の碧玉が出土した。

一針C遺跡は、梯川の中流域右岸に位置する弥生時代から中世にかかる集落遺跡である。平成25年度から河川改修事業に伴い発掘調査を行っている。河川からの堆積・浸食の影響を受けやすく複数の時代の生活面の重複が確認されている。令和4年度は、昨年度に引き続き堤防の内側で調査を行い、増水期を避けた春（4月～6月）と秋（10月～1月）に分けて実施した。春期の調査については本誌48号で紹介している。今号では、秋期の調査成果を紹介する。調査は上流側に位置するP3区と下流側にあるR・S区を対象に行い、今次の現地調査をもって梯川河川改修にかかる一針C遺跡の発掘調査をすべて完了したことになる。



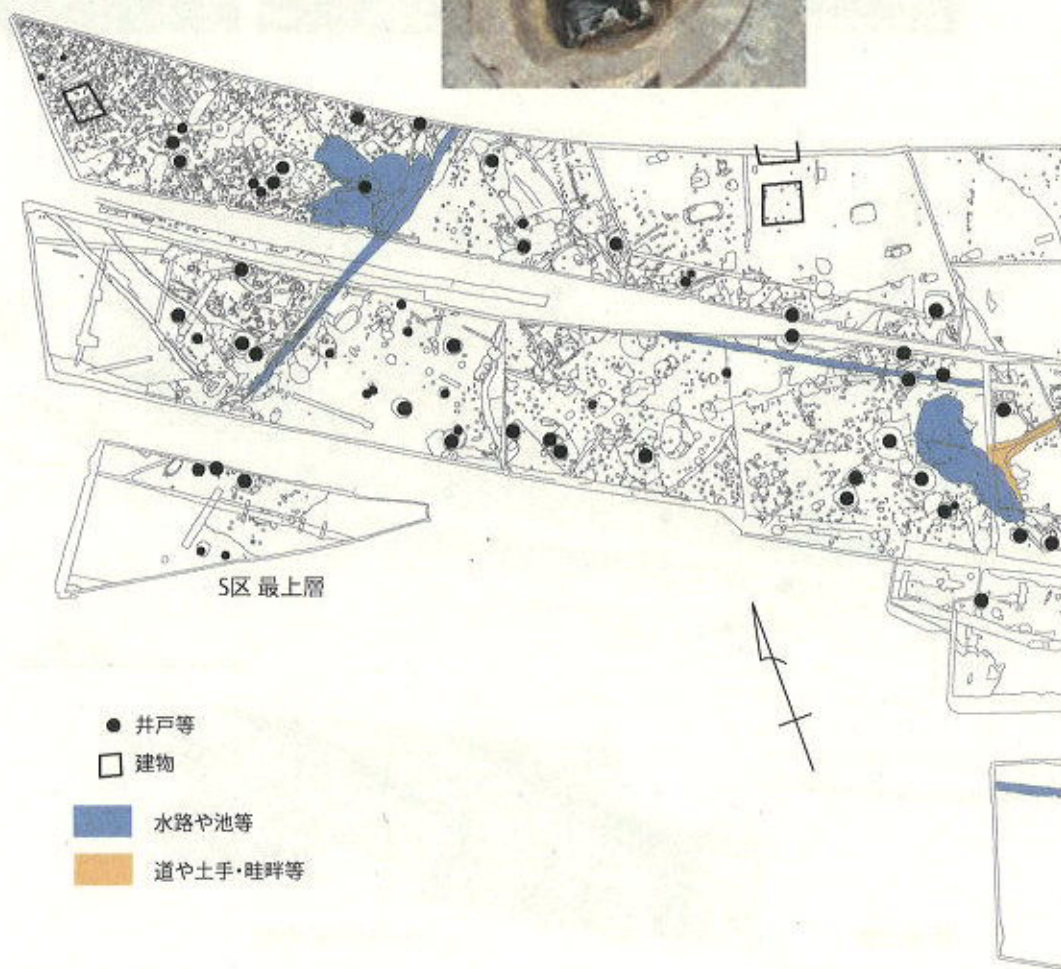
P3区実測図 (S=1/300)

P3区は、春期調査(P2区)に南接する。確認されたSD34の延長を調査し、土層状態や土器出土状況に違いはない。令和3年度調査で確認された自然流路であるNR04が調査区北西隅でかすめるように検出された。またSD34南東に3間×3間以上の掘立柱建物を確認した。柱間は狭く1.2～1.8mとばらつきがある。時期を明確にできないが、7世紀の土器が周辺から出土していることが参考になる。

R・S区は下層面の調査で、2つの調査区を一体のものとして調査を行った。調査区東にはG区から続く自然流路(NR05)があり、西端にも北流する自然流路(NR06)を検出した。いずれも弥生時代中期の流路で、古墳時代前期には河岸に厚い遺物包含層が形成され、9世紀ごろには完全に埋没している。NR05は幅11m、深さ1.5mを測る。最下層に灰色から黄灰色の砂土があり、部分的に縄文晩期の土器が出土する。厚さ1m以上にわたっ



各種の井戸



一針C遺跡上層遺構図(S=1/1000)



三具足



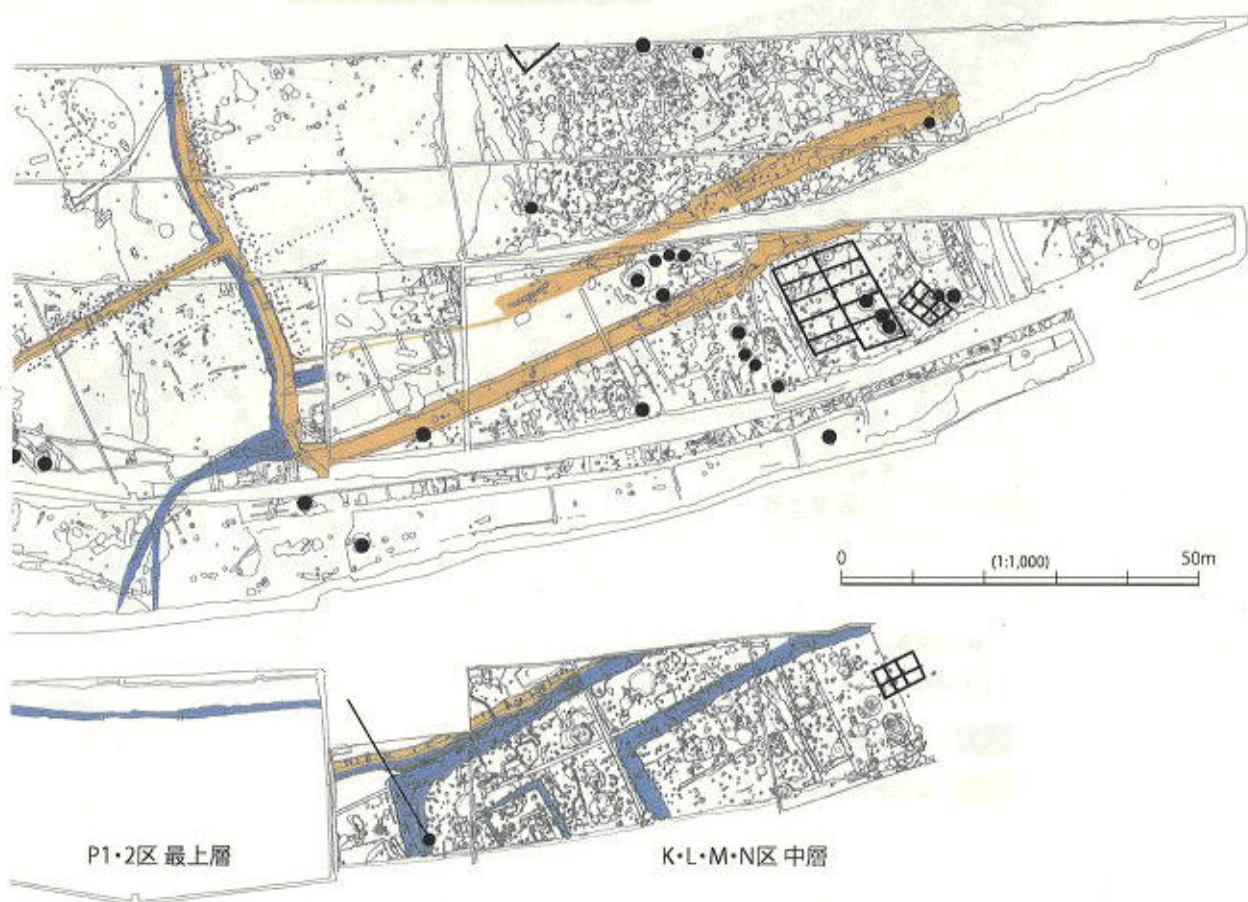
P区水田



M・L区空中写真



畦畔





C区土坑



A区平地建物



B区環濠



L区平地建物



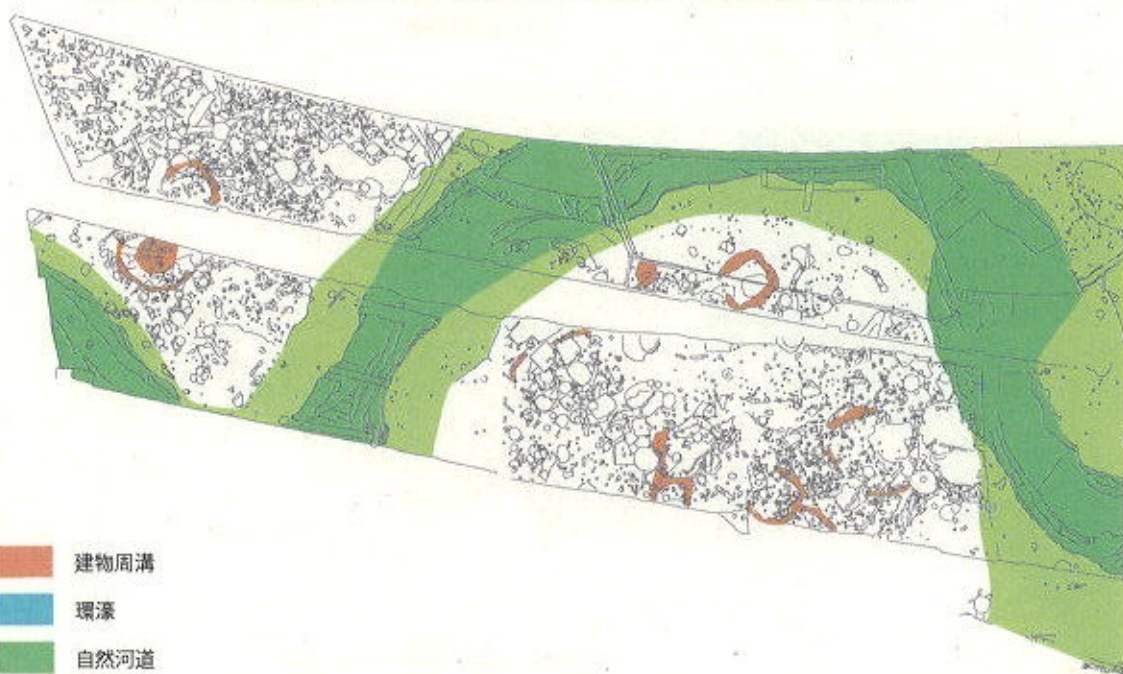
平地建物



D区環濠



J区建物

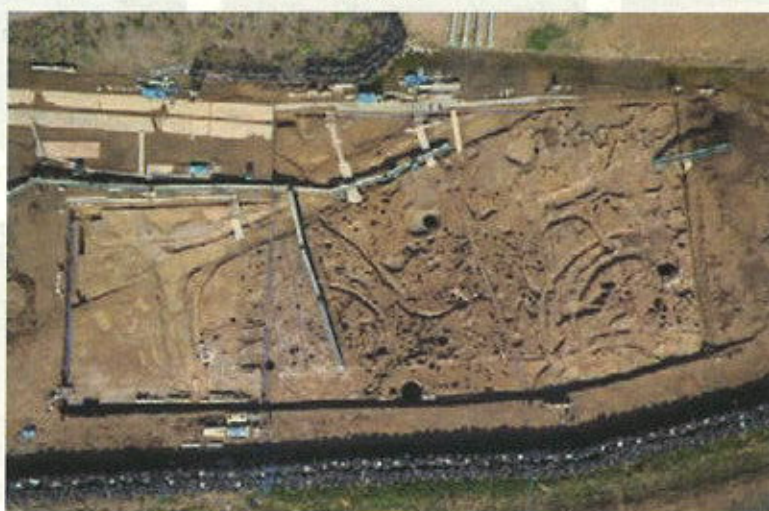


- 建物周溝
- 環濠
- 自然河道
- 川の湿地

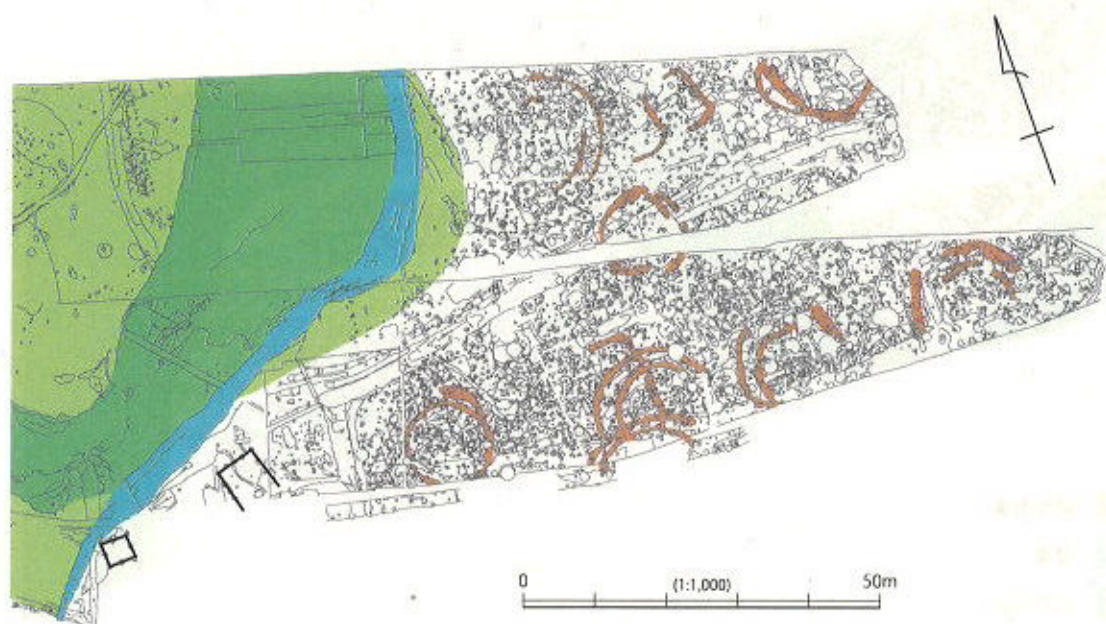
—針C遺跡下層遺構図(S=1/1000)



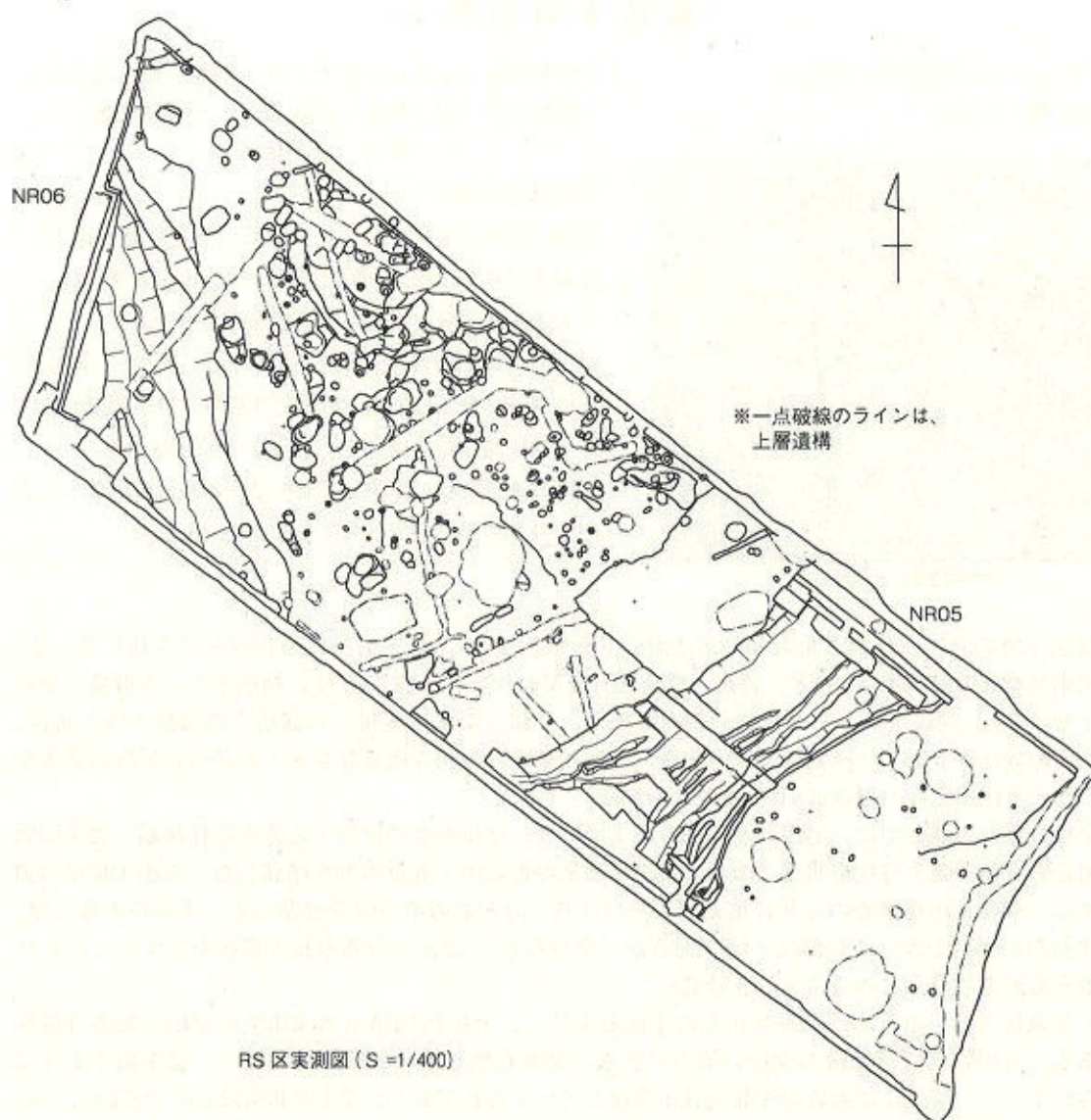
弥生土器



K・L区空中写真



一針C遺跡下層遺構図(S=1/1000)



RS 区実測図 (S = 1/400)

てシルトや粘質土が堆積し、その間2層にわたってピート層が形成されていた。下層のピートは弥生中期前葉から中葉の土器が出土しており、上層のピートには弥生中期中葉～後葉の遺物が出土している。

遺構はこれら二つの自然流路に挟まれた部分に展開する。それぞれの流路に向かって下がり地形となっているため、このような斜面ではそれほど密な遺構分布でない。検出した遺構は、弥生時代中期後葉と古墳時代前期前葉のおおむね二時期が認められる。弥生時代中期後葉の主要な遺構として土坑がある。長方形を呈するものや略円形や不定形なものなど約30基を検出した。不定形なもの(SX109など)は底部も凹凸があり、粘土採掘によるものかもしれない。SK116は焼土や炭灰とともに碧玉小片が数百片出土し、玉作りにかかわる遺構として注目できる。NR05川底に湧水部まで掘りぬいた円形の土坑がある。トチ実が底に残っており、水さらし場である。

古墳時代前期の遺構として、竪穴建物(SI101)と土坑がある。竪穴建物には幅約40～80cmの狭い外周溝がめぐり、そこから1m内側に掘り込みがある。また、NR06北東斜面に直径約0.7m、深さ約0.7mをはかる井戸があり、水くみ上げ用の甕が1個体底から出土した。(伊藤雅文)

観法寺墳墓群

所在地 金沢市観法寺町地内
調査面積 1,770㎡

調査期間 令和4年6月1日～令和5年2月22日
調査担当 安中哲徳、岩城栄淳、新美祥人夢、
十二将人、舟澤朱音



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・丘陵上に弥生時代後期～終末期頃の墳丘墓を令和3年度調査の6基に加え、新たに2基の計8基確認した。うち1基は四隅突出型墳丘墓の可能性が高い。
- ・弥生時代後期～終末期頃とみられる大型土坑を令和3年度調査の2基に加え、新たに9基の計11基確認した。
- ・弥生時代後期後半頃の竪穴建物を1棟確認した。
- ・斜面に弥生時代の断面V字形を呈する環濠を確認した。
- ・中世の土師器皿が溝からまとまって出土した。

観法寺墳墓群は、金沢市北東部の河北潟から南東約4km、森下川右岸の丘陵上に立地している。金沢東部環状道路（国道159号・通称山側環状）改築に伴い、平成30年度に観法寺ヤッタ遺跡（令和2年度実施）、観法寺ジンヤマ竪穴の調査に続き、令和3年度は尾根上の観法寺墳墓群Ⅰ区とⅢ区、北斜面の観法寺ジンヤマ横穴の調査を実施、令和4年度に観法寺墳墓群Ⅱ区と南斜面のⅣ区の調査を行った。Ⅱ区検出面の標高は41～43m代を測る。

令和3年度の調査では、尾根の西側部分（Ⅰ区）で、尾根を溝で区画する弥生時代後期～終末期頃の墳丘墓6基と弥生時代後期後半頃の大型土坑2基の他に中・近世の墓を確認した。令和4年度の調査では、令和3年度調査の6基に加えて新たに2基、計8基の墳丘墓を確認した。その中の多くは、南北斜面の崩落が著しく全形は不明であるが、全長約5～12mで方形や長形状を呈するとみられる墳丘墓が大部分を占める（2～6号墓）。

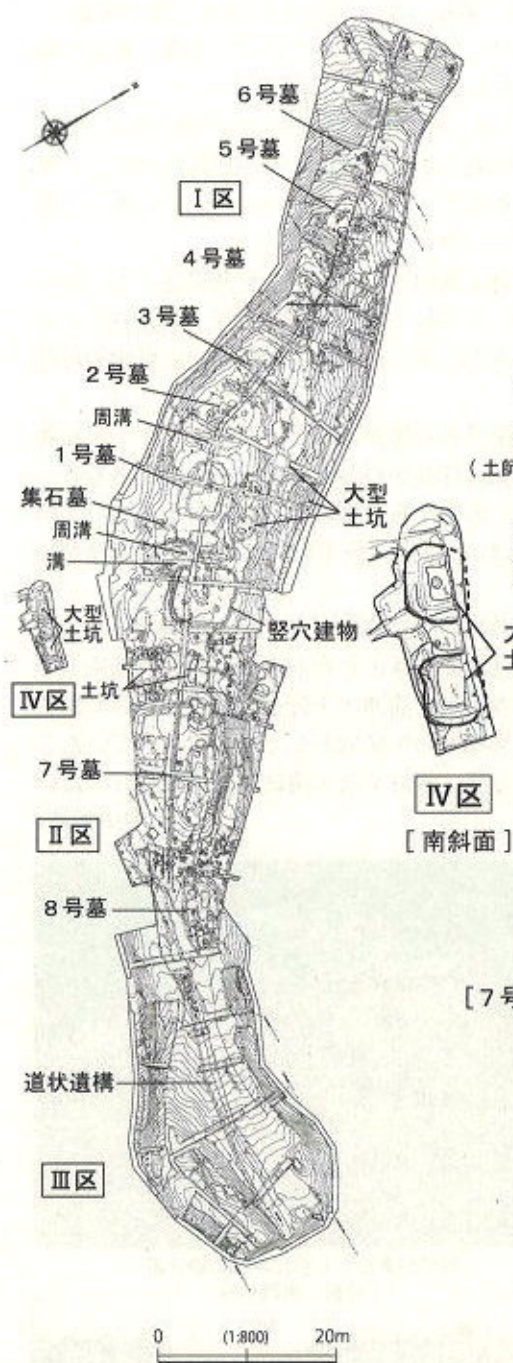
1号墓は方形の墳丘の四隅が突出した平面形を呈し、全長約12.5mの四隅突出型墳丘墓の可能性がある。石川県内では類例の少ない墳形である。周溝も他と違い直線状ではなく、弧を描くように掘られていた。墳丘には複数の埋葬施設が重複してつくられており、第1埋葬施設aの全長約2.1m、上幅約70cmの箱形木棺部分からは、切っ先を北西方向に向けた全長31cm、幅2.7cmの鉄製の短刀が出土した。茎に切断痕があることから素環頭部分が切断された鉄刀の可能性もある。中心となる第1埋葬施設bは全長約6.5m、上幅約2.6m、深さ約50cmの長大な墓室内に、全長約5m、幅約80cmの箱形木棺の痕を検出し、ガラス小玉や碧玉製の管玉が出土した。外側には木槨の可能性のある痕跡も残っていた。弥生時代後期後半～終末期頃の築造と考えられる。

7号墓は推定全長約20mと最大であるが、後世に上部が削平され、埋葬施設は遺存していなかった。海側の平坦面も含め、古墳時代初頭頃に構造された全長約30mの前方後方墳であった可能性もある。

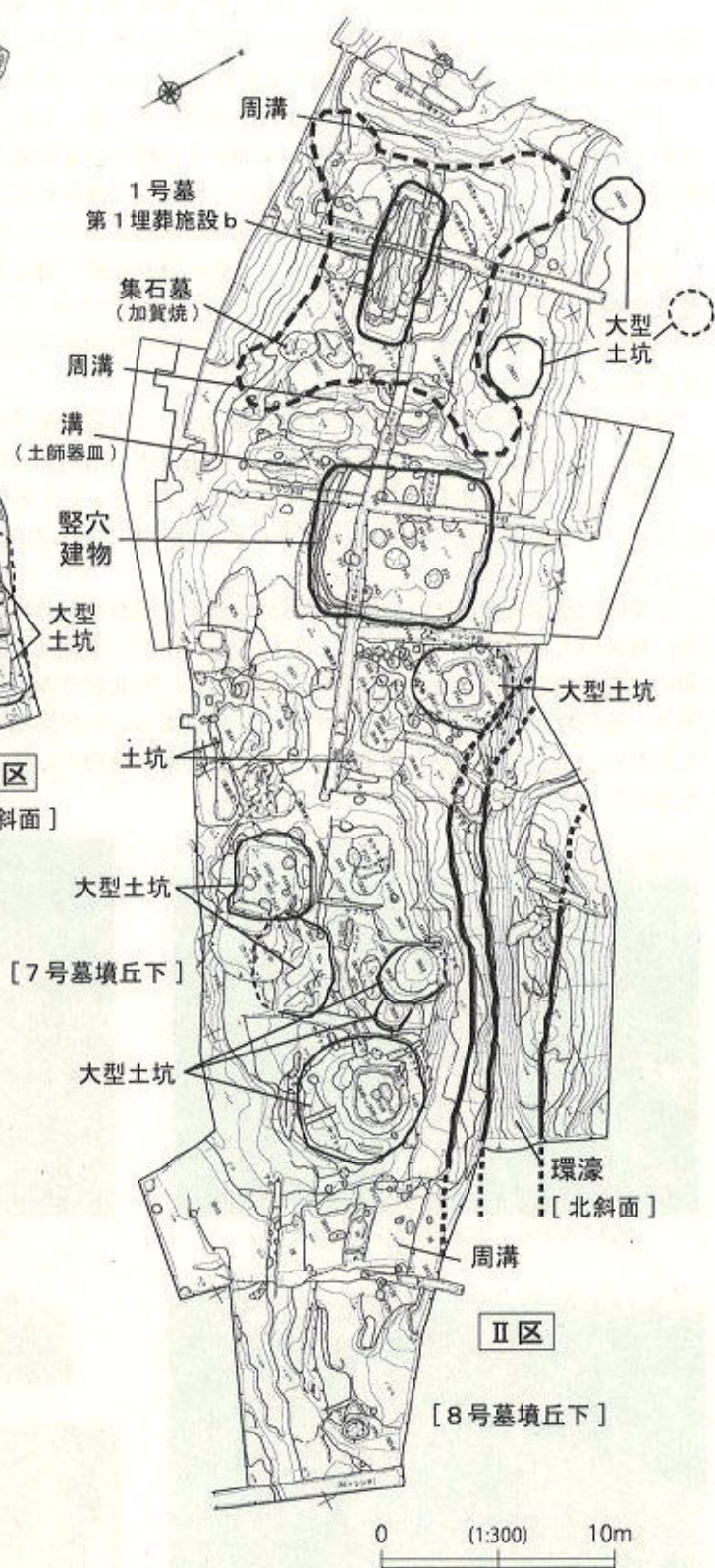
墳丘盛土の下からは、弥生時代後期後半～終末期頃とみられる大型土坑群を確認した。（新美祥人夢）



調査区位置図 (S=1/4000)



令和3・4年度調査区(上層)
平面図 (S=1/800)



令和4年度調査区(下層) 平面図 (S=1/300)

7号墓北側斜面で尾根周囲を巡るとみられる断面V字形の環濠（壕）を延長約20mに渡り確認し、溝の下層からは弥生時代後期後半頃の土器が出土した。後世に上部が削平を受けているが、推定上幅約6m、深さ約3.5mで、弥生時代の集落を囲んでいたとみられる。

1号墓東側の尾根上部に竪穴建物1棟を確認した。約6.9m×6.7mの隅丸方形の建物と考えられ、4本の主柱穴や建物中央やや西寄りの床面からは焼土や灰が残る炉跡を検出した。建物内や柱穴、壁際を巡る溝からは、弥生時代後期後半頃の土器と共に鉄鍬や砥石・碧玉の剥片が出土している。一部で二重に巡る壁溝を確認し、ほぼ同じ場所で建て替えられていたことも判明した。

尾根上部と斜面に竪穴状に深く掘られた弥生時代後期～終末期頃的大型土坑を9基確認した。昨年度と合わせ計11基となる。規模は径約2～5m、深さ約1～2.5m、平面形態も円形・隅丸方形・方形と様々だが、底に壁溝と小穴（梯子穴か）を持つ傾向がみられる。機能は不明だが、貯蔵穴の可能性を考えている。

古代には、北側斜面から、鉄滓や鑪の羽口といった鍛冶関係の遺物が出土しており、焼土や炭化物が堆積した土坑もみつかったことから、遺跡内で鍛冶関連作業が行われていた可能性がある。

中世には、竪穴建物の上部に平坦面を造成しており、近くの溝から中世の土師器皿がまともって出土した。1号墓墳丘上の土坑から、集石墓の蔵骨器とみられる13世紀後半頃の加賀焼甕や播鉢が出土した。

2年間に及ぶ調査により、四隅突出型墳丘墓を含む弥生時代の墳丘墓群だけでなく、環濠や竪穴建物、複数の大型土坑等の発見から、県内でも数少ない高地性環濠集落の存在が金沢市北部の丘陵上で初めて確認できた。また、本遺跡のある尾根は、河北潟や森下川、周囲の平野を見下ろせる好立地にあり、弥生時代～近世の墓域だけでなく、集落あるいは窯跡などの生産域としても利用されていたことがわかった。今後の整理作業により詳細な遺構・遺物の分析・検討や周辺遺跡との比較を行いたいと考えている。

（安中哲徳）



遺跡上空から河北潟方向を望む（南東から）



四隅が突出した弥生時代の墳丘墓
（1号墓、南西から）



1号墓第1埋葬施設bの全景（南東から）



1号墓第1埋葬施設a出土の鉄製短刀



尾根上の大型土坑群と環濠集落（東から）



斜面に掘られた環濠の掘削作業風景（南東から）



弥生時代後期の竪穴建物（北東から）



尾根上部に掘られた弥生時代の大型土坑（東から）



凹状に堆積した大型土坑の土層断面（東から）



斜面に掘られた長方形の大型土坑（南東から）



底に壁溝とピットが掘られた大型土坑（南西から）

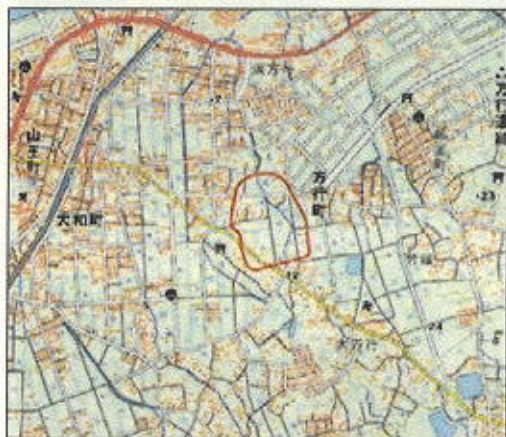


大型土坑から出土した弥生時代後期の土器

矢 田 遺 跡

所 在 地 七尾市矢田町地内
調査面積 2,370㎡

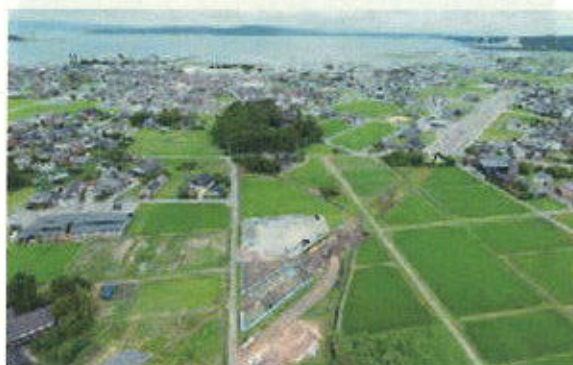
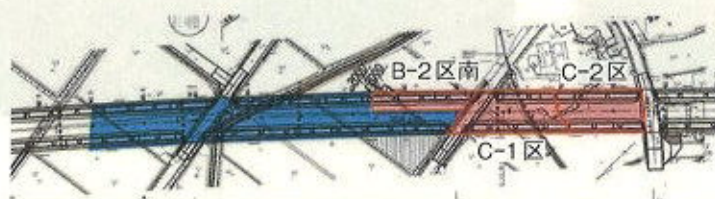
調査期間 令和4年6月14日～令和4年12月13日
調査担当 金山哲哉 斎藤綾乃 上村顕太郎



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ B・Cの2地区で、弥生時代後期後半～古墳時代中期の川跡を、同川跡に挟まれた微高地上に古墳時代の掘立柱建物2棟を確認した。
- ・ 川跡からは大量の土器や木製品が出土した。木製品には刀形や鳥形、舟形等の祭祀具が含まれており、付近での祭祀活動が想起される。
- ・ C区の川跡底面に分布する、弥生時代後期のクリ貯蔵穴4基を確認した。
- ・ C区の川跡東岸沿いに、古代の水田跡を確認した。



調査区遠景 (南から)



B-2区南川跡遺物出土状況 (古墳時代中期・南から)

矢田遺跡は、七尾市万行町～矢田町の沖積平野上に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。調査地の約300m北側には七尾市最大の前方後円墳である矢田高木森古墳（古墳時代後期）が、約1km北東には古墳時代的大型建物群で知られる国指定史跡の万行遺跡が所在する。都市計画道路 七尾外環状線の整備工事を調査原因として令和3年度から発掘調査を行っており、今回はその第2次調査となる。今年度調査は矢田町地内の、第1次調査で路線幅の南側約半分が調査未了となっていたB-2区の南半部と、その西側に位置するC-1・2区の部分を対象に行った。

B-2区南の調査は、平安時代後期の上層面と、弥生時代後期～古墳時代中期の下層面の2面に分けられる。上層面では大小土坑や溝を検出し、中には柱穴と思しき土坑もみられたが、建物は確認できなかった。下層面は、弥生時代後



C-2区上層 水田跡 (古代・南から)



C-2区下層 川跡遺物出土状況
(古墳時代中期・北から)



C-2区下層 掘立柱建物 (古墳時代・北西から)



C-2区下層 川跡遺物出土状況 (弥生時代後期・北から)

期～古墳時代中期の、上幅約20m、深さ約1.6mを測る南北方向の川跡が調査区の大部分を占める。同川跡からは古墳時代中期の土器や木製品が、西岸付近を中心に大量に出土した。木製品の主体は板材や棒状具等の用途不明材であるが、鋤鍬や櫂などの農・漁労具に混ざり、一辺が約70cmを測る類をみない大きさの方形合子蓋や、僅かではあるが刀形や鳥形、舟形の祭祀具も出土した。このほか同川跡底面では、弥生時代後期後半の土器や大血小板材等が多数流れ込んだ状況もみられた。

C区の調査も、古代～中世の上層面と、弥生時代後期～古墳時代中期の下層面の2面に分けられる。C-2区上層では、同溝東岸部沿いに不定形の小区画が連なる古代の水田跡を確認した。最も低所に位置する田の、水落口から延びる溝が川跡内を流れる溝と直交しており、同溝が水田排水路となっている状況も窺われた。

下層の調査では、C-2区の西端で南北方向の、弥生時代後期後半～古墳時代中期の川跡1条を、同川跡の東岸部からC-1区にかけての範囲に、古墳時代の掘立柱建物2棟を確認した。東側の1棟は3間×4間の東西棟、西側の1棟は柱間5m以上を測る1間×1間以上の建物で、東側に底を持つ可能性が考えられる。川跡は幅約9m、検出面からの深さ約1.3mを測り、古墳時代中期の土器や木製品が大量に出土した。木製品には、B-2区南の川跡同様に鳥形ほかの祭祀具がみられた。その他、祭祀遺物との共伴事例が知られる蟻溝の短い脚をもつ槽や、廃棄時の状態を保つかのように入れ子の状態で壊が出土するなど、近接地での祭祀活動を想起させる遺物や状況もみられた。なお、川跡斜面～底面にかけて、弥生時代後期後半の土器が出土したほか、同時期とみられるクリの貯蔵穴4基も確認している。

次年度は、同川跡西側の区域の調査を進めていく予定である。同調査により、本遺跡の詳細がさらに明らかになると期待される。

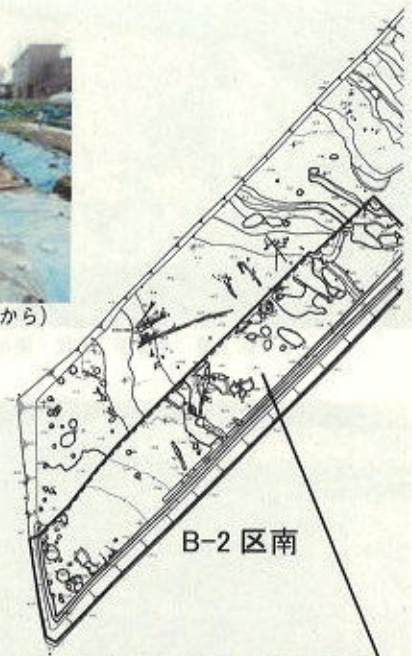
(金山 哲哉)



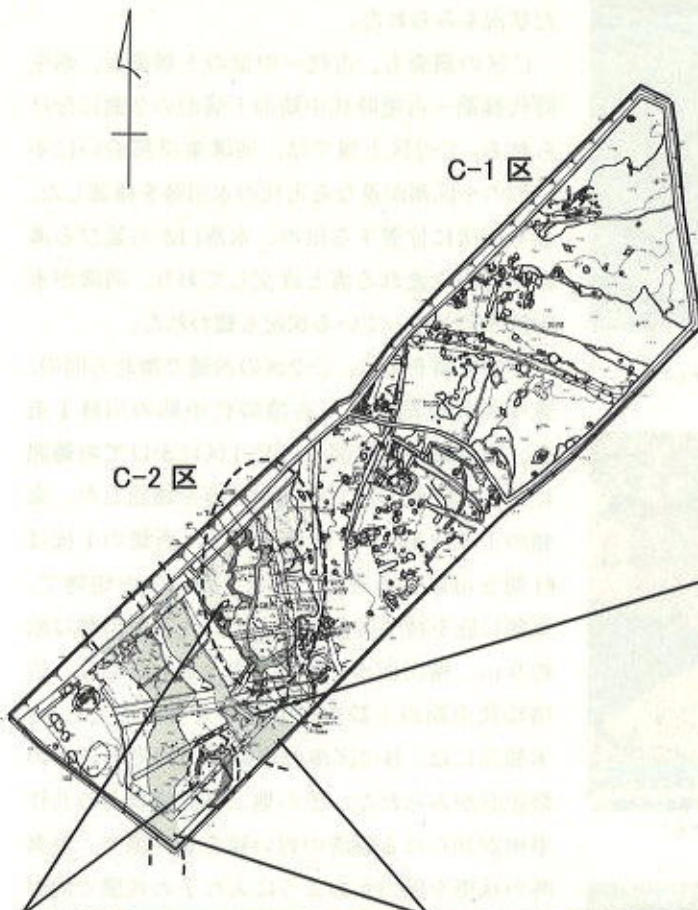
C-1 区上層 (古代～中世・北東から)



C-2 区上層 (古代～中世・北東から)



B-2 区南



上層遺構 (平安時代後期・北東から)



排水遺構 (古代か・北西から)



水田跡 (古代か・南から)



溝跡 (古代か・北から)

0 (1:500) 20m

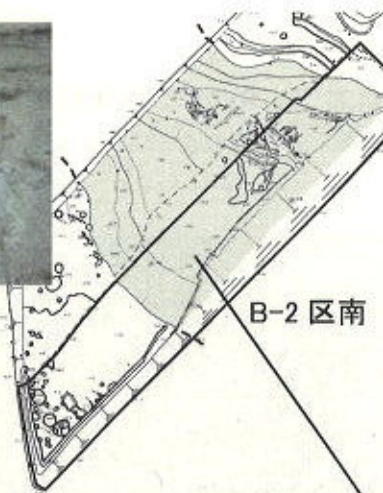
令和4年度矢田遺跡上層遺構図 (S=1/500)



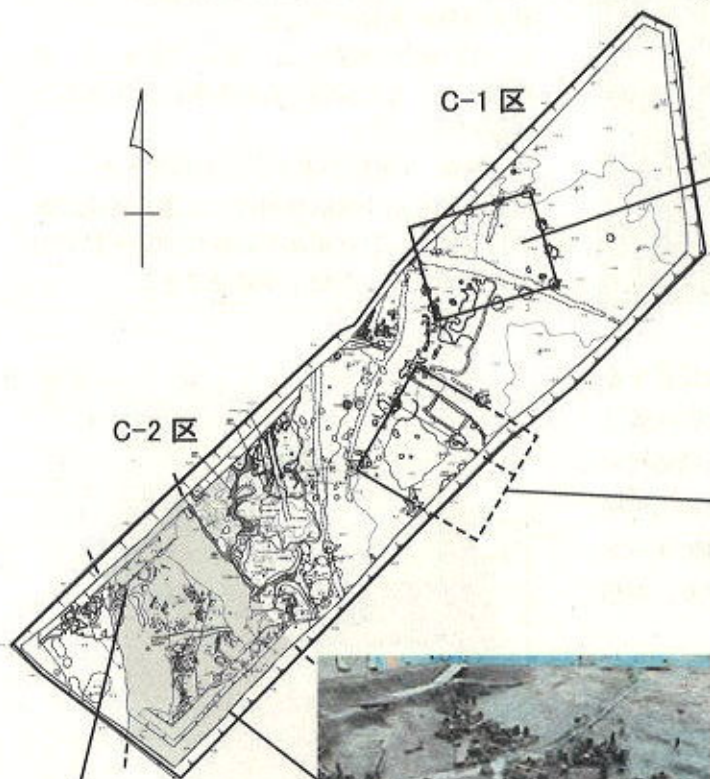
B-2 区南 川跡遺物出土状況
(古墳時代中期・南東から)



B-2 区南 川跡遺物出土状況
(弥生時代後期・北西から)



B-2 区南



C-1 区

C-2 区



掘立柱建物 1 (古墳時代・東から)



掘立柱建物 2 (古墳時代・北東から)



川跡遺物出土状況
(弥生後期～古墳時代中期・南から)



クリ貯蔵穴 (弥生時代後期・南東から)



クリ出土状況

0 (1:500) 20m

令和4年度矢田遺跡下層遺構図 (S=1/500)

おお ば 大 場 遺 跡

所 在 地 金沢市大場町東地内

調査面積 4,940㎡ (2,470㎡×2面)

調査期間 令和4年5月19日～令和5年1月12日

調査担当 金山哲哉 西田昌弘 石田文一 小森康弘
町田賢一 歌代若菜 水田 勝



遺跡位置図 (S=25,000)

調査成果の要点

- ・ 15～16世紀頃の屋敷地の区画溝 (SD1・SD28) を検出し、当時の生活の様子を思わせる遺物が多数出土した。
- ・ 11～13世紀の流路に沿う建物 (SB1・2) を検出した。またSB3から八角形に加工された柱根が出土した。
- ・ 8～9世紀、6世紀の溝や土坑を検出した。
- ・ 氾濫を繰り返す軟弱地盤だった遺跡周辺は次第に安定し、11世紀後半以降に沖積平野の開発を進めていった様子が確認できた。

大場遺跡は、森下川下流の沖積平野に位置する集落遺跡である。昭和45年には県立金沢向陽高校校舎建設に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の甕や高坏、中世の土師器皿が出土し、祭祀的性格が指摘された。現在大場遺跡から西に300メートルほどの場所に佐那武神社が位置しており、関係が推測される。

今回の調査はいしかわ特別支援学校高等部新校舎整備事業に伴うもので、調査地を1～3区に設定し調査を行った。また森下川や河北潟に起因する氾濫・湿地堆積層を挟んで上下二面の遺構面を確認し、上面を第1面、下面を第2面とした。

第1面では調査地全体を東西に横断する溝 (SD1) と、SD1に交わらないが直行する溝 (SD28) を検出した。SD1からは土師器皿や珠洲焼のすり鉢、越前焼の甕、瓦質土器、中国製の青磁碗、銭貨、漆器碗、木製品など、当時の暮らしを思わせる多彩な出土品がみられたことから、SD1・28は15～16世紀の屋敷地の区画溝と考えられる。なお、昭和に使用された水田用排水路や現在の校舎は、区画溝と同じ方角軸でつくられていることから、当時の地割りが現在まで続いていることがわかる。また3区で11～13世紀の流路と、流路に沿う建物2棟 (SB1・2) を検出した。特にSB2は4×4間に庇が付く総柱建物と考えられる。さらに、2区と3区にまたがる1×2間の掘立柱建物 (SB3) では、北東角の柱穴 (P80) から側面を面取りして八角形にした柱根が出土した。

第2面では、8～9世紀の細砂が多く混じる溝 (SD90・91) を検出し、部分的な氾濫の影響を示していると考えられる。また、1区で検出した溝 (SD9) から6世紀の遺物が出土し、2区の土器溜まり (SD39・SX23) からも同時期の土器がまとまって出土したことから、6世紀には近隣に集落があった様子がうかがえる。



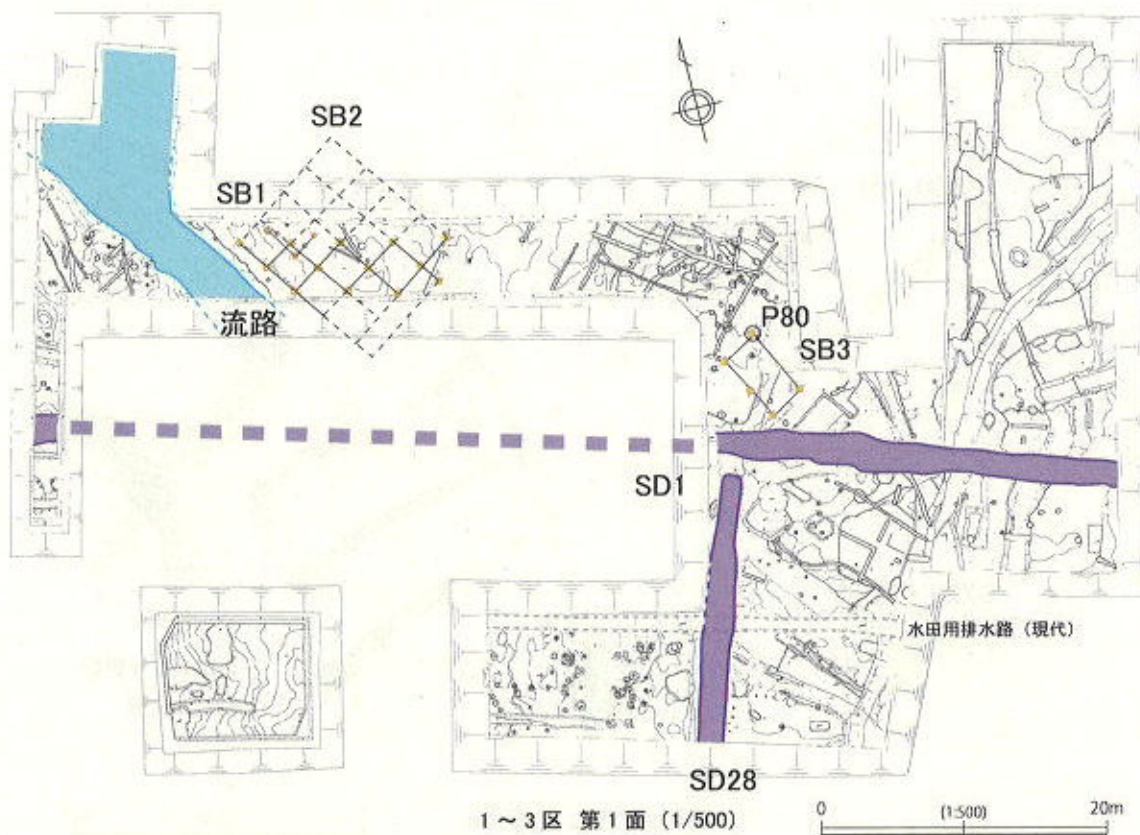
調査区割図



SD1・28 (西から)



SD1 出土遺物



区画溝と用水路・校舎 (南東から)



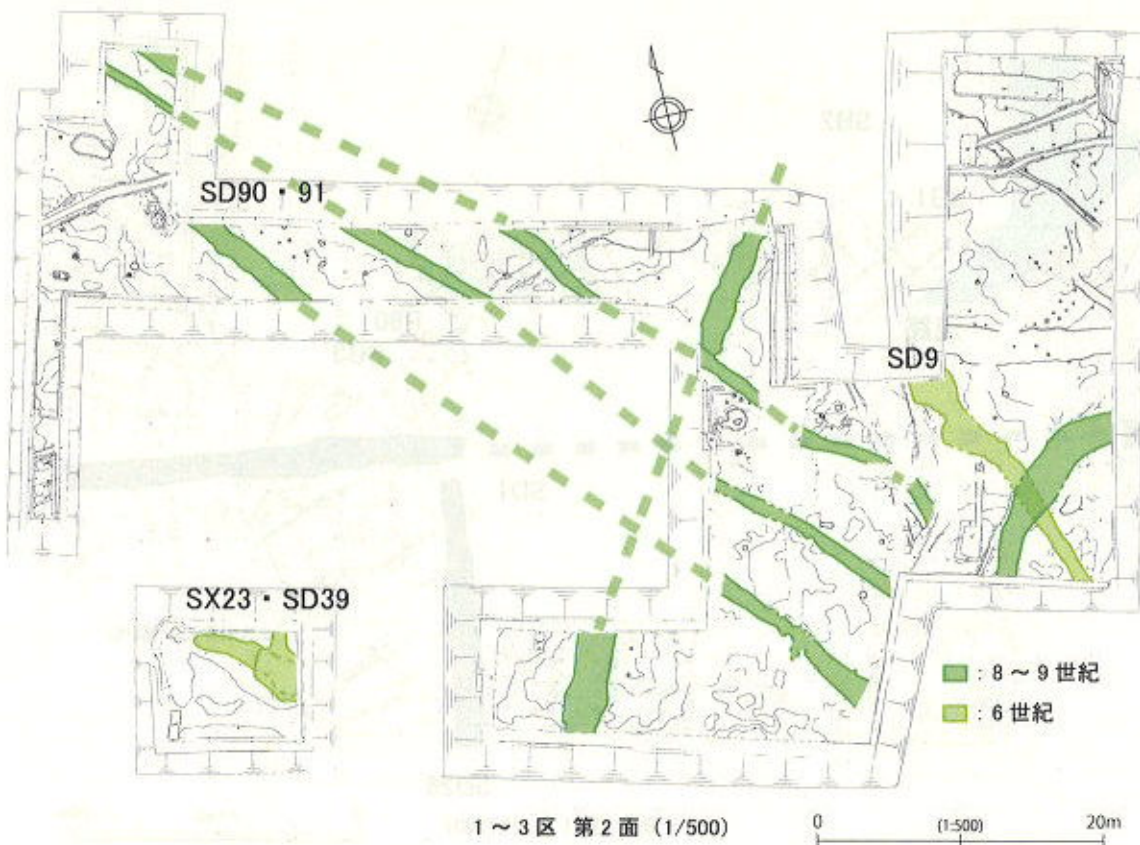
SB3-P80 出土柱根 (南東から)



SD90・91（北から）



SD9 出土遺物（北から）



大場遺跡の周辺は、河北潟水位の上下変化や森下川の氾濫などの影響で度重なる水害を受け、湿地や沼地になりやすい軟弱地盤の地であった。しかし、氾濫の影響は第2面に比べ第1面では小規模になり、11世紀後半以降地盤が安定しはじめ、潟湖の恵みや水運の利便性を生かして沖積平野を開発していった集落の様子が明らかとなった。この傾向は大場遺跡と同様、河北潟周辺の低湿地に位置する梅田遺跡や木越光琳寺遺跡、南森本遺跡などでもみられ、今回の調査でこの地域一帯での開発を裏付けることができた。

大場遺跡は令和5年度も引き続き調査が行われており、新たな発見が期待される。（歌代若菜）

令和4年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

令和4年度下半期は一針C遺跡(小松市 平成26・27・29・30年度調査)、西任田遺跡、中ノ庄遺跡(能美市 令和元・2年度調査)、庄・西島遺跡(加賀市 平成27・28年度調査)の整理作業を行った。

一針C遺跡は平成26・27年度分の土器、木器、金属器の実測・トレースを行った。土器は平安時代から中世にかけての須恵器、土師器、陶磁器が主である。木器には杭、柱根、井戸枠部材、弓等があり、金属器は鉄滓があった。

西任田遺跡、中ノ庄遺跡では柱根、礎板、杭等の木製品や勾玉、磨石といった石製品、弥生時代から平安、鎌倉時代の土器を実測・トレースした。

庄・西島遺跡は土器、石器、木製品、金属器の実測・トレースを行った。古代を中心とした遺跡ではあるが、縄文、弥生、古墳時代の土器や中世の陶磁器等も出土している。他に小片ではあるが古代の瓦や、砥石、石皿、石匙等の石製品、銅銭や鉄鎌、炉底の滓、鏡といった金属器、船の転用材とみられる井戸枠、杭を整理している。
(横山そのみ)



木製品実測 (一針C遺跡)



土器接合 (一針C遺跡)



鉄滓実測 (一針C遺跡)



鏡 (庄・西島遺跡)

県関係調査グループ

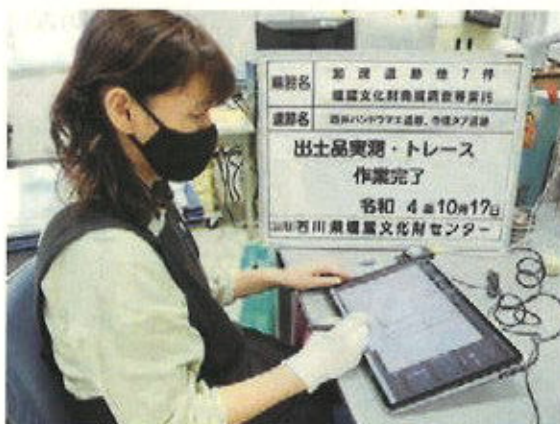
下半期は、酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市 平成27・29年度調査）・寺境タブ遺跡（羽咋市 平成29年度調査）、漆町遺跡（小松市 平成27年度調査）、観法寺ヤッタ遺跡他3遺跡（金沢市 平成30年度調査）の整理作業を行った。

酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡では、上半期に実測を行った土器、木製品、石製品、銅銭のトレースを行った。

漆町遺跡では、木製品、石製品の実測・トレースを行った。木製品は井戸の縦板井戸杵材が多く、他には柱痕、下駄、盤、漆器椀、石製品では、五輪塔、砥石、行火、盤状方形鉢等があった。

観法寺ヤッタ遺跡他3遺跡では、土器の記名・分類・接合と木製品の分類・接合を行った。

土器は甕、高坏、鉢、皿、埴塼、羽釜、墨書土器、白磁の皿、青磁の碗の選別を行った。瓦の出土も多く平瓦、丸瓦、軒丸瓦、軒平瓦（重弧文）もあった。広範囲に出土した破片が接合したため区を超えての同一個体探しに時間を要した。（小島紀子）



出物品トレース
（酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡）



木製品実測（漆町遺跡）



瓦の選別作業（観法寺ヤッタ遺跡）



木製品の分類・接合（観法寺ヤッタ遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、田岸遺跡(七尾市 平成30年・令和元年度調査)、金沢城跡(金沢市 令和3年度調査)、古府シマ遺跡(小松市 平成30年度調査)の整理作業を行った。

田岸遺跡では、上半期から引き続き縄文土器のトレース作業を行った。大型の縄文土器が多かったため、文様の細かな部分のトレースや拓本を合わせる作業に時間がかかった。

金沢城跡では、上半期に引き続き、二ノ丸、数寄屋敷西の瓦・陶磁器等の記名・分類・接合の作業を行った。記名作業は、田岸遺跡と同時進行で行い、分類・接合作業は特定事業調査グループで行った。瓦の接合作業は何回かしているが、見たこともない赤い瓦があり担当者の方も珍しいと言っていた。瓦の破片は大きい物もあり、かなり接合出来た。磁器片は小さく形になる物が少なかった。

古府シマ遺跡では記名・分類・接合、木製品の分類・接合作業を行った。土師皿の破片が多く、完形の物も多く出土していた。瓦器碗や中世須恵器など初めて聞く器種もあった。白磁碗の破片も多く出土していたが形になる物は少なかった。木製品では井戸の側板や部材が多く出土していた。

(土生久美子)



土器のトレース作業(田岸遺跡)



瓦・陶磁器等の接合作業(金沢城跡)



木製品の分類作業(古府シマ遺跡)



土器の接合作業(古府シマ遺跡)

令和4年度の環日本海文化交流史調査研究集会の記録

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、令和4年度で23回目の開催となる。

今回の研究集会は、古墳時代の水に関わる祭祀に焦点を当て、関係する遺構やそれらに関わる遺物について把握し、日本海沿岸各地ならびに関連する諸地域の歴史的理解を深めると同時に、それらとの対比をととして本県の歴史・風土の理解を深化させることを目的とするものである。

平成29年度実施の第18回集会より、調査研究の深化・充実に目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とする形態で行っており、今回はその後者の年に当たる。開催方法の判断にあたっては、前回同様、新型コロナウイルスの動向が課題となったが、本集会の趣旨に賛同される共同研究者の方々の思い、同所属組織の協力・支援を基に、これまでどおりの感染対策を維持しつつ、3年振りに県外各地から共同研究者を招き、対面形式での集会を開催することとなった。

そして迎えた集会1日目、対面での議論は否応なく熱を帯び、参加者一同が熱心に聞き入る、かつてのような活気溢れる集会となった。また2日目についても、コロナ禍以前の開催メニュー同様に資料検討会を実施。当日は、加賀市八日市遺跡や小松市千代・能美遺跡、金沢市畝田遺跡、七尾市矢田遺跡出土の木製品を前に、僅か2時間ほどの会ではあったが、第一線で活躍される共同研究者の方々の遺物を観察する視点、高い見識に触れることができる貴重な時間となった。(金山哲哉)

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内の埋蔵文化財関係者。1日目：90名、2日目：20名。
- 4 内容及び日程

テーマ 「古墳時代の水のマツリ」

日 時

1日目：報告 令和5年2月24日(金) 午前10時00分～午後3時10分

新潟県 鹿取 渉 「新潟県内における古墳時代の水のマツリ」

富山県 青山 晃 「富山県内における水のマツリ」

石川県 新美祥人夢「石川県における水のマツリ」

福井県、京都府・兵庫県北部

魚津知克 「福井県(越前・若狭)」

「京都府北部・兵庫県北部(丹後・但馬)」

山陰地方 松尾充晶 「山陰地域における「古墳時代の水のマツリ」」

東海地方 穂積裕昌 「東海地域における古墳時代の水のマツリ」

近畿地方 青柳泰介 「古墳時代の水のマツリ 近畿地方中枢部」

：討論 令和5年2月24日(金) 午後3時20分～午後4時30分

2日目：資料検討会 令和5年2月25日(土) 午前9時30分～午前11時45分



会場の様子



鹿取講師



青山講師



新美講師



魚津講師



松尾講師



穂積講師



青柳講師



討論の様子



討論の様子



資料検討会の様子



資料検討会の様子

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容(調査研究集会テーマ)	記録の掲載(石川県埋蔵文化財情報)
第1回	H13. 2. 23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14. 2. 22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15. 2. 21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H16. 10. 24	縄文後晩期の低湿地集落 - 生業の視点で考える	第11号
第5回	H17. 10. 29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H18. 10. 28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・摺鉢を中心に -	第15号
第7回	H19. 10. 27	縄文時代の装身具 - 漆製品・石製品を中心に -	第17号
第8回	H20. 10. 26	日本海域における古代の祭祀 - 木製祭祀具を中心として -	第19号
第9回	H21. 10. 24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H22. 10. 23	日本海域の土器製塩 - その系譜と伝播を探る -	第23号
第11回	H23. 10. 29	近世日本海域の陶磁器流通 - 肥前磁器から探る -	第25号
第12回	H24. 10. 28	中世日本海域の墓標 - その出現と展開 -	第27号
第13回	H24. 10. 26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25. 10. 25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26. 10. 24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27. 10. 23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29. 2. 24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30. 2. 23	近世成立期の土器・陶磁器様相 - カワラケを中心に -	第39号
第19回	H31. 2. 23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 - 城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に -	第41号
第20回	R2. 2. 26	古代・中世の木製容器	第43号
第21回	R3. 2. 19	古代の木器(うつわ)-その2	第45号
第22回	R4. 2. 24	古墳時代の祭祀~水のマツリを中心として~	第47号
第23回	R5. 2. 24	古墳時代の水のマツリ	本号(第49号)

新潟県内における古墳時代の水のマツリ

鹿取 渉(佐渡市世界遺産推進課)

はじめに

古墳時代に見られる祭祀遺跡には、水を対象とするものがあり、畿内周辺を主体として多くの検出例がある。今回は導水施設、湧水点・井戸(湧水)祭祀、河川・流路祭祀に分けて特徴を抽出し、新潟県内の水のマツリの状況を見ていきたい。

導水施設

佐渡で2例が確認されている。東沢遺跡(第1図1)では、かつての新保川の流れの河川跡 SW1・3 最上層から槽付木樋を検出している(第6・7・9図)。槽付木樋に対する堀等の区画施設は検出しておらず、調査区外に存在するのかもしれない。なお、河川跡に隣接する方形区画溝 SX01と溝内に壁材を落とし込んだ平地建物 SX03の組み合わせは、方形の囲みの中に方形建物が配置されるように見え(若狭2020)、想像逞しく言えば、導水施設の覆屋の可能性がある。また、SW1・3に隣接する掘立柱建物 SB01-SP03より出土した木柱(辺材)は、年輪酸素同位体比分析の結果、AD287と測定され(木村2015)、導水施設の年代を考える上で重要である。なお、東沢遺跡の槽付木樋は年代不明であり、検出遺構の SW01・03出土土器も時期幅があるため(第8図)、時期比定に苦慮するが、滋賀県守山市服部遺跡出土槽付木樋と同形状であり、かつ SW01・03出土土器の大多数が古墳時代前期であるため、その時期の所産と考えたい。

蔵王遺跡(第1図2)では、木樋を2箇所で見出している。木樋1～3はSB1に沿った位置でL字に配置されている(第2・3図)。木樋4はSB1・SB2の間に位置し、斜め方向に配されている(第2図)。いずれも環濠と推定される溝 SD6に接続しており、水を環濠へ排水若しくは環濠から導水するようである。なお SB1-P2・4(第3図)の大型礎板(辺材)は年輪年代測定の結果、AD288・272と推定され(光谷2017)、導水施設の年代を考える上で重要である。また SD6からは舟形・剣形・翳形木製品、鶏形土製品等の祭具が出土している(第4・5図)。

湧水点・井戸(湧水)祭祀

井戸は上越・中越・下越でいくつか見られるが、遺構の形態や出土遺物等からは、高山遺跡(第1図12)で遺存度の高い土器がまとまって出土した例や五千石遺跡 SE76(第10図)の底面よりヒョウタンが2個体、上層底面より白玉が1点出土した以外は、明確な湧水点祭祀は見出せない。なお余川中道遺跡(第1図15)周辺では、かつては豊富な湧水が見られた(余川誌編集委員会1990)とあり、余川中道遺跡C区からはメノウ製勾玉や滑石製白玉、刀形や漆塗りの弓といった木製品等の祭具も出土しており、湧水点での祭祀が行われていた可能性がある。

河川・流路祭祀

河川沿い・流路内からの土器の大量出土は、県内で一定数見られる。土器集積(集中)遺構については、田中大輔氏が認定条件等をまとめている(田中2009)が、県内事例はその定義等について明確にできていない。河川沿い・流路内からの土器集中(集積遺構)は必ずしも水のマツリに関連するかは不明であり、単なる廃棄行為によるものもあるかもしれない。そのため今回は、河川沿い・流路内から遺存度の高い土器がまとまって出土していることや、舟形木製品といった祭具、玉類、石製模造品等の出土を水のマツリの条件として抽出し、表にまとめたが、南押上遺跡(第1図9)や南原遺跡(第1図14)といった玉作遺跡は廃棄行為の可能性もあり、注意を要する。

丸潟遺跡（第1図22）では、自然河川（1号溝）に直行して人工水路（2号溝）・区画溝（4号溝）が接続し、河川の前に四角形の空間を作出し、1号溝の前の平行する位置に1号柵列を配している（第14図）。柵列は河道への区画の類で、四角形の空間で水のマツリを実施していた可能性がある。なお1号溝からは舟形木製品が出土している（第15図）。丸潟遺跡の類似例として、道端遺跡があげられる（第1図28・第16図）。河川跡（SR2）に向って舌状に張り出す箇所に1・2号杭列が配され、区画して空間を作出して水のマツリの場としている可能性がある。

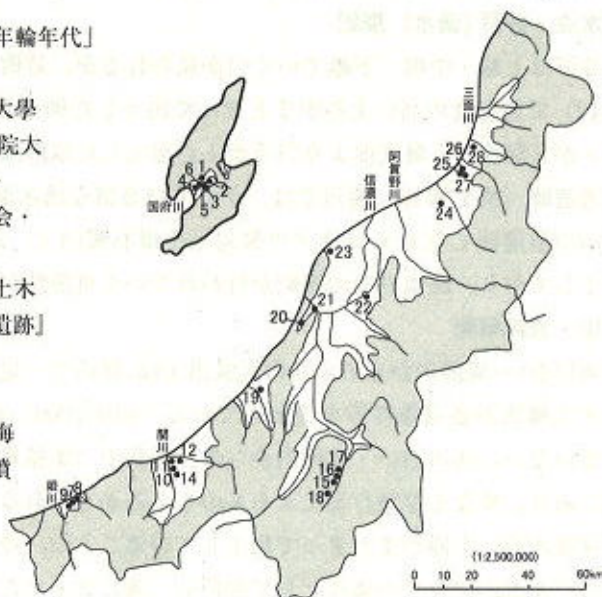
河川沿い・流路内からの土器集中（集積遺構）の例としては、余川中道遺跡（第1図15図）があげられ、多数の遺存度の高い土器や石製模造品、白玉等が多数出土している（第12・13図）。なお余川中道遺跡は、発掘調査によって集落域・祭祀域・水田域といった空間構成が見出され（第11図）、墓域である飯綱山古墳群と密接な関係にある（小野本2020）。

まとめ

新潟県内の状況を見てきたが、佐渡・上越・中越・下越とも古墳時代の水のマツリは多いとは言えない。確実なものはいずれも佐渡に分布し、東沢遺跡の槽付木樋と蔵王遺跡の木樋で導水祭祀を実施しているにすぎず、湧水点祭祀は現状では皆無に近い。水のマツリに関連する祭具の可能性が高い舟形木製品も、道崎遺跡・出崎遺跡（第1図3）等の佐渡を中心に計15点出土しているにすぎない。このように水のマツリの祭式をあまり受け入れないのが新潟県の特徴と言えるのかもしれない。

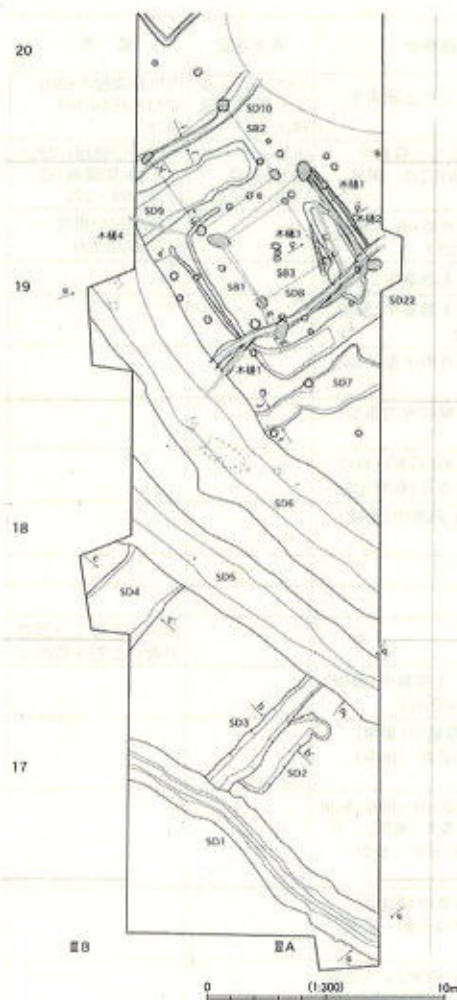
引用・参考文献

- 飯坂盛泰他 2005『余川中道遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
 伊藤秀和 2000『丸潟遺跡・新通遺跡』加茂市教育委員会・山武考古学研究所
 小野本 敦 2020「余川中道遺跡の調査と諸問題」『新潟県の古墳時代研究の新展開－余川中道遺跡を探る－』新潟県考古学会
 加藤由美子他 2011『五千石遺跡 1区・3区・4区東地区・5区』長岡市教育委員会
 鹿取 涉他 2015『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
 鹿取 涉他 2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
 金田拓也 2020「祭祀遺構からみた余川中道遺跡」『新潟県の古墳時代研究の新展開－余川中道遺跡を探る－』新潟県考古学会
 木村勝彦 2015「4 東沢遺跡および周辺遺跡群の年輪年代」『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
 田中大輔 2009「土器集積に関する覚書」『國學院大學 伝統リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
 前川雅夫他 2005『道端遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 光谷拓実 2017「1 年輪年代法による蔵王遺跡出土木材の年代調査」『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
 余川編集委員会 1990『余川誌』
 若狭 徹 2020「5世紀の東国と越後・佐渡－日本海沿岸の津と東国豪族の対外活動」『新潟県の古墳時代研究の新展開－余川中道遺跡を探る－』新潟県考古学会

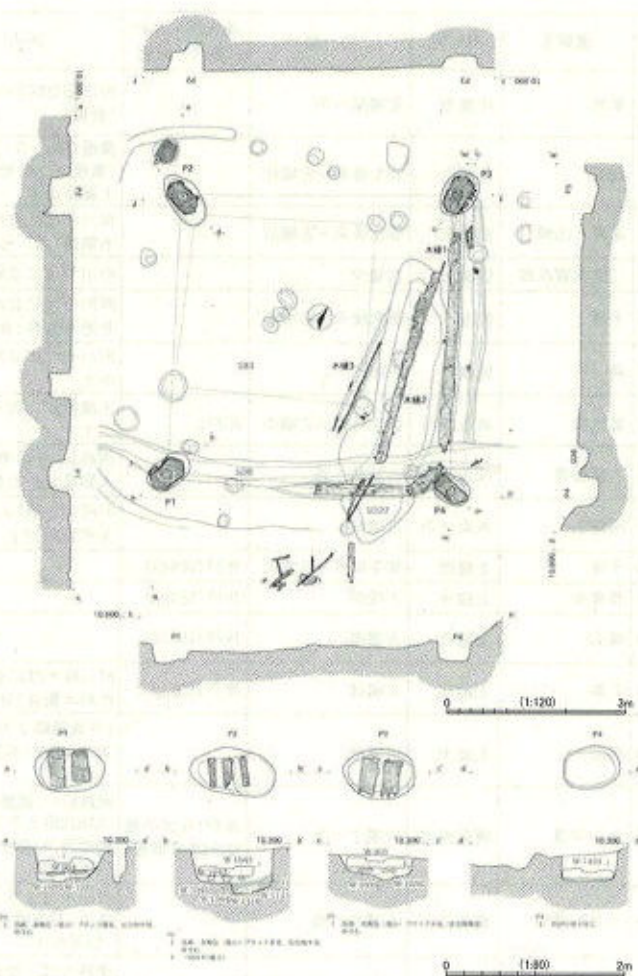


第1図 新潟県内 水のマツリ遺跡位置図

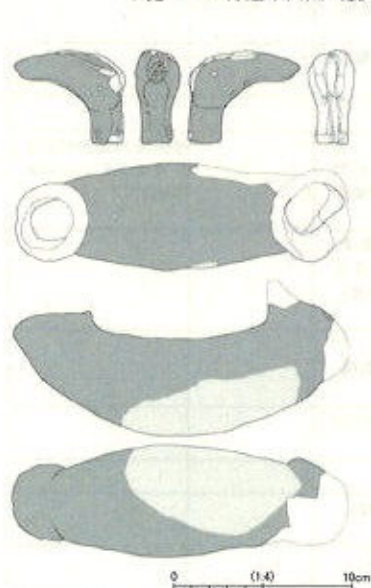
No.	遺跡名	市町村	時 期	湧水点・井戸 (湧水) 祭祀	河川・流路祭祀	導水施設	備 考
1	東沢	佐渡市	古墳前～中		河川跡(SD01～03)より土器集中(集積)	SD01・03上層より槽付木樋検出	河川跡隣接のSB01-SP03木柱(辺材)AD287
2	蔵王	佐渡市	弥生後末～古墳前		環濠(SD1・5・6)より土器集中(集積)、舟形木製品2点、鶏形土製品出土	木樋1～3と木樋4は環濠(SD6)に接続	木樋1～3隣接のSB1-P2・4大型礎板(辺材)AD288・272
3	道崎・出崎	佐渡市	弥生後末～古墳前		河川そばに立地 舟形4点・剣形木製品1点、弓2点出土		矢板列3・4(樹皮付)AD202・209
4	二宮加賀次郎	佐渡市	古墳中		河川そばに立地 土器集中(集積)		
5	千種	佐渡市	弥生後末～古墳前		河川そばに立地 土器集中(集積) 舟形木製品1点出土		
6	泉	佐渡市	古墳		河川そばに立地 舟形木製品1点出土		
7	笛吹田	糸魚川市	弥生後末～古墳中	井戸1	大溝検出 勾玉、琴柱形石製品出土		
8	六反田南	糸魚川市	古墳前～後		流路1より斎串2人形2刀形1・舟形木製品4点・石製模造品(板形)出土		
9	南押上	糸魚川市	古墳前		旧河川(SD4)より土器集中(集積) 玉作製品出土		
10	子安	上越市	弥生後末～古墳前	井戸(SE645)			
11	津倉田	上越市	古墳前	井戸(SE363)			
12	高山	上越市	古墳前	井戸1(SE30)			井戸最下層より残存率高い土器多数出土
13	下割	上越市	古墳前	井戸1(SE103)	河川跡そばに立地 土器集中(集積) 舟形木製品1点・勾玉出土		
14	南原	上越市	古墳後		1号流路跡より土器集中(集積)、勾玉・管玉・石製模造品(板形)・白玉出土		
15	余川中道	南魚沼市	古墳中～後	井戸1(C区中層SE8001古墳後)	流路沿い、流路内(SD2100・3603・3650・SX6220)より土器集中(集積)、石製模造品(剣形・勾玉形・板形)・白玉出土		
16	六日町藤塚	南魚沼市	古墳中～後		河川そばより土器集中(集積)、管玉・石製模造品(勾玉形・板形)・白玉出土		
17	坂之上	南魚沼市	古墳中～後		流路そば、流路内(SR38)より土器集中(集積)、管玉・石製模造品(剣形・勾玉形・板形)・白玉出土		
18	来清東	南魚沼市	古墳中		水辺そばより土器集中(集積)、石製模造品(剣形・勾玉形・板形)出土		
19	下境井	柏崎市	古墳前～後		河川跡(SD530)より土器集中(集積) 槽か鉄刀鞘?木製品出土		
20	大武	長岡市	弥生後末～古墳前	井戸1(SE89)			
21	五千石	長岡市	古墳前～後	井戸3基検出うち3区SE76より白玉1出土	河川沿いより土器集中(集積)、水路跡(SD11)内より堰状遺構、杭列、土器集中、管玉、勾玉、石製模造品(板形)、白玉、弓出土		※SE76は底面付近よりヒョウタンも2個体出土
22	丸湯	加茂市	古墳前		河道跡(1号溝)より土器集中(集積)、舟形木製品出土 1号溝に直交する人工水路(2号溝)・区画溝(4号溝)、1号溝に平行する1号溝列あり		
23	御井戸B	新潟市	古墳前～後		河川そばより土器集中(集積)、勾玉・管玉・環玉・ガラス小玉・石製模造品(剣形・勾玉形・板形)出土		
24	蚤取橋	新発田市	古墳後	井戸1(井戸13号)	河川跡より斎串・剣形木製品出土		
25	西川内南	胎内市	古墳前		舟形木製品1点出土		
26	反貫目	胎内市	古墳前～中		河川跡そばより土器集中(集積)、白玉出土		
27	天野	胎内市	古墳前～中	井戸2(122・613号)古墳前	川跡そばより土器集中(集積)(古墳中)、勾玉・白玉出土		
28	道端	村上市	古墳前		河川跡(SR2)より土器集中(集積) 河川跡を区画する1・2号杭列あり		



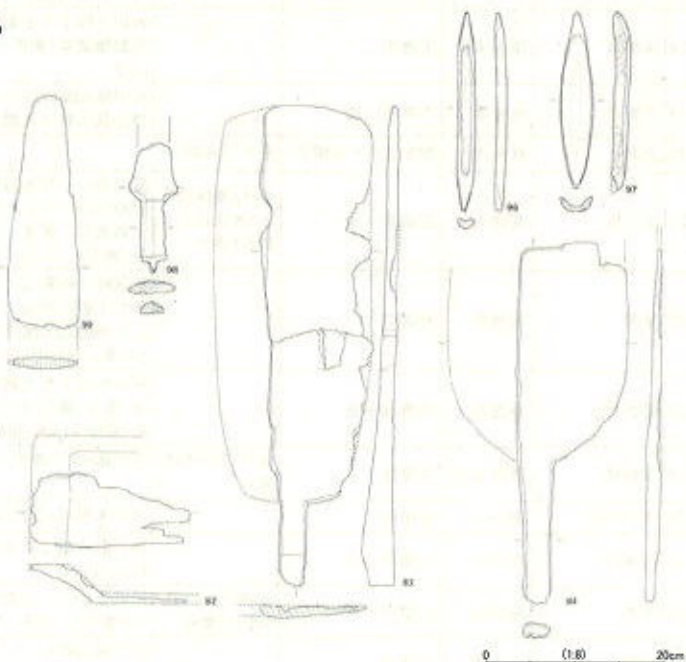
第2図 蔵王遺跡 SD1・5・6 (環濠)・
木樋1～4 付近平面図 (鹿取他 2017)



第3図 蔵王遺跡 SB1 (掘立柱建物)・木樋1～3 平面図 (鹿取他 2017)



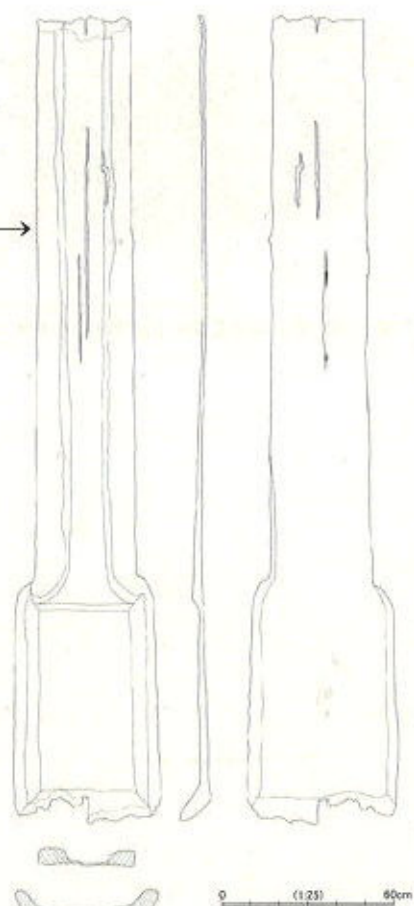
第4図 蔵王遺跡 平地建物 (大型建物)・
SD6 (環濠) 平地建物出土土製品 (鹿取他 2017)



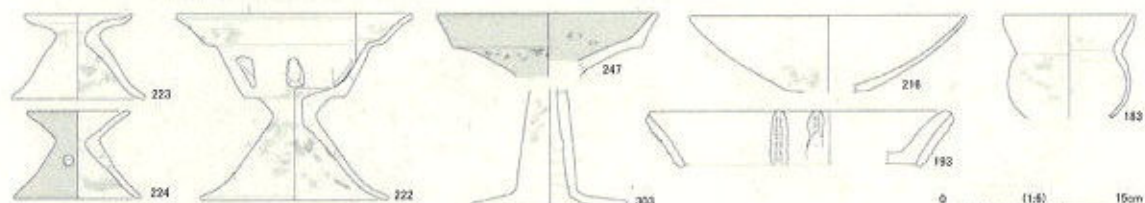
第5図 蔵王遺跡 SD6 (環濠) 出土木製品 (鹿取他 2017)



第6図 東沢遺跡 遺構配置図・SW01～03（河川跡）
木製品分布図（鹿取他 2015）



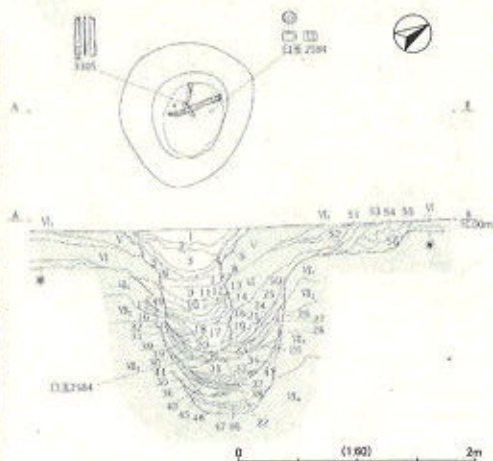
第7図 東沢遺跡 SW01・03（河川跡）
出土槽付木樋（鹿取他 2015）



第8図 東沢遺跡 SW01・03（河川跡）出土土器（鹿取他 2015）



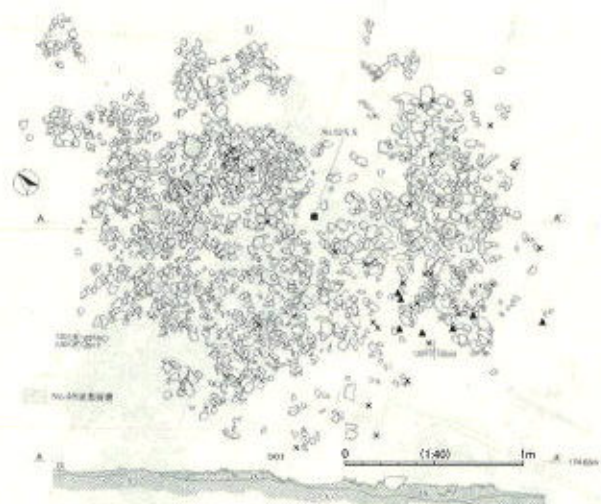
第9図 東沢遺跡 槽付木樋出土状況（鹿取他 2015）



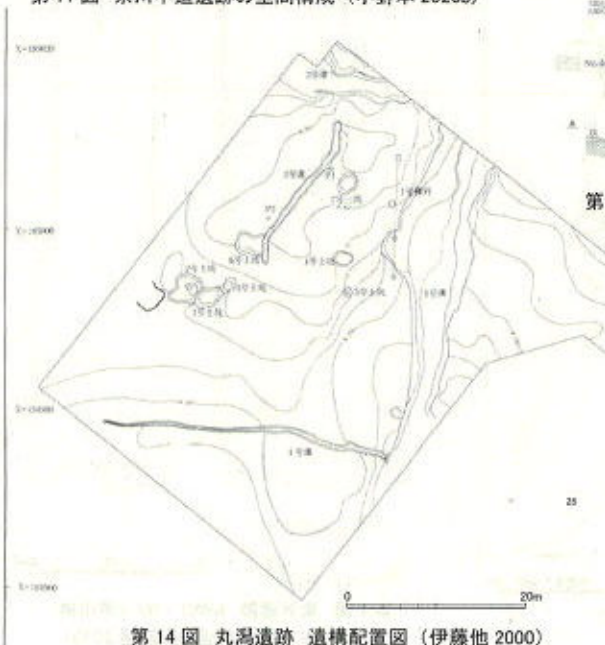
第10図 五千石遺跡 SE76（井戸跡）（加藤他 2011）



第11図 余川中道遺跡の空間構成 (小野本 2020b)



第12図 余川中道遺跡 A区 D03 (土器集中) (飯塚他 2005)



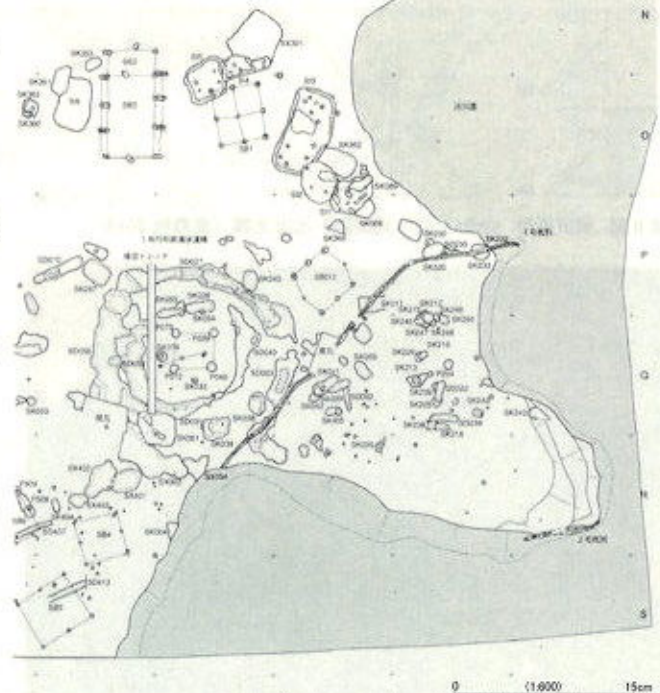
第14図 丸湯遺跡 遺構配置図 (伊藤他 2000)



第13図 余川中道遺跡 A区 D03 (土器集中)
出土石製品 (飯塚他 2005)



第15図 丸湯遺跡 1号溝遺物出土状況 (伊藤他 2000)



第16図 道端遺跡 遺構配置図 (前川他 2005)

富山県内における水のマツリ

青山 晃(公益財団法人富山県文化振興財団)

はじめに

富山県内では古墳時代の導水施設については今のところ確認されていない。このため、井戸・流路での祭祀行為と考えられる事例について示していく。

1. 井戸

井戸では廃絶時における土器の意図的な埋納や集中廃棄といった行為が確認される。飯野新屋遺跡(初頭)では井戸の廃絶時に板囲いを設けた土器の埋納と集中廃棄する両者が確認される。八町Ⅱ遺跡(中期)では井戸の最下層に甕が据え付けられ、埋土中から白玉・炭・種子・骨片が出土する。

これらの井戸は集落内で検出され、周辺に首長墓と推測される墳墓があることから、その造営集団との関連が想定される。ただし、集落の様相については建物規模等に不明な点が多く、祭祀が行われた井戸周辺の空間的な構造は判然としない。

2. 流路

流路では扇状地先端部や丘陵地裾部において、主に土器の廃棄行為として確認される。蔵野町東遺跡(初頭)では埋没最終段階の流路沿いに装飾器台を並べて置く。南太閤山Ⅰ遺跡(中期)では土器の廃棄に加え、子持勾玉・白玉・有孔円板が出土する。流路内には堰の設置も認められ、利水施設としての役割も持つ。後期の溝からは刀形木製品が出土しており、継続的な祭祀行為が認められる。若宮B遺跡(中期)では土器と共に子持勾玉・有孔円板・ヒスイ原石が出土する。中谷内遺跡(中期～後期)では大量の土器と竈形土製品、手捏土器、土玉、鳥形土製品、石製品(玉類等)が出土する。一方、流路では河口付近でも祭祀行為が確認されている。打出遺跡(前期)では旧河道河岸から土器が集中出土し、その中には三連壺が含まれている。

これら流路での祭祀行為では多くの土器を用いることが基本となり、その他に初頭～前期では装飾器台・三連壺のような非在地系の土器、中期以降には子持勾玉・石製模造品・刀形木製品等が加わる。祭祀行為の背景としては、立地的に水源を意識したものが中心となり、農耕生産に関わる可能性が高い。特に南太閤山Ⅰ遺跡のような水源を管理・掌握する場所でのあり方は、そうした性格を示すものと考えられる。なお、中谷内遺跡では流路付近には粘土採掘坑群があり、丘陵地から取得する資源に対する意識も祭祀行為の背景に含めることも可能であろう。また、打出遺跡の河口付近での事例では河川の安定や水上交通などとの関わりも想定される。このように、流路での祭祀行為の背景はいくつかあるが、出土品に見る特殊な遺物の存在や多量の土器使用といったあり方からは、遺跡周辺も含めた共同の祭祀行為が行われ、地域の有力層が介在していたことが想定される。

おわりに

富山県内では井戸や流路において、主に湧水・水源を意識した祭祀行為が行われていたと考えられる。その執行には首長層の関わりが想定されるが、その居住地等の具体像など不明な点が多く、今後も課題として残る。また、流路では丘陵地裾部・河口付近といった場所での祭祀行為もあり、農耕以外の生産活動等との関連も視野に入れておく必要がある。

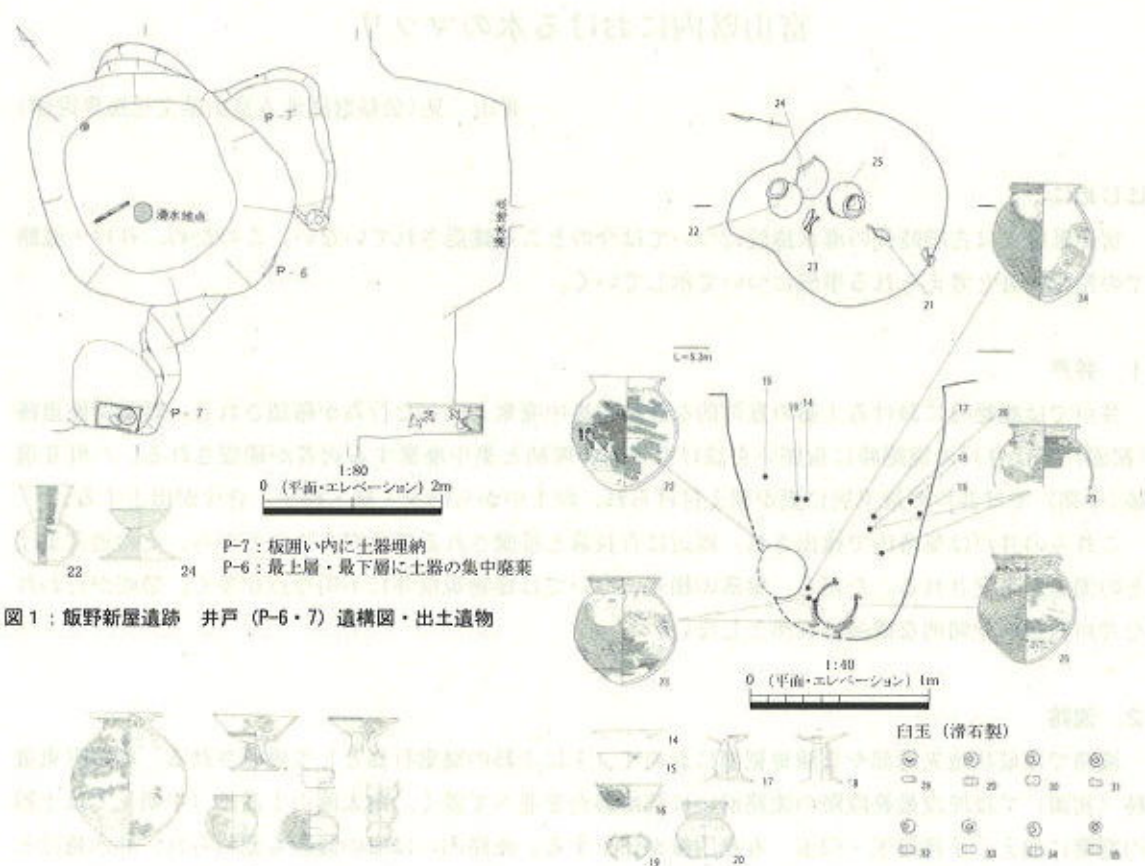
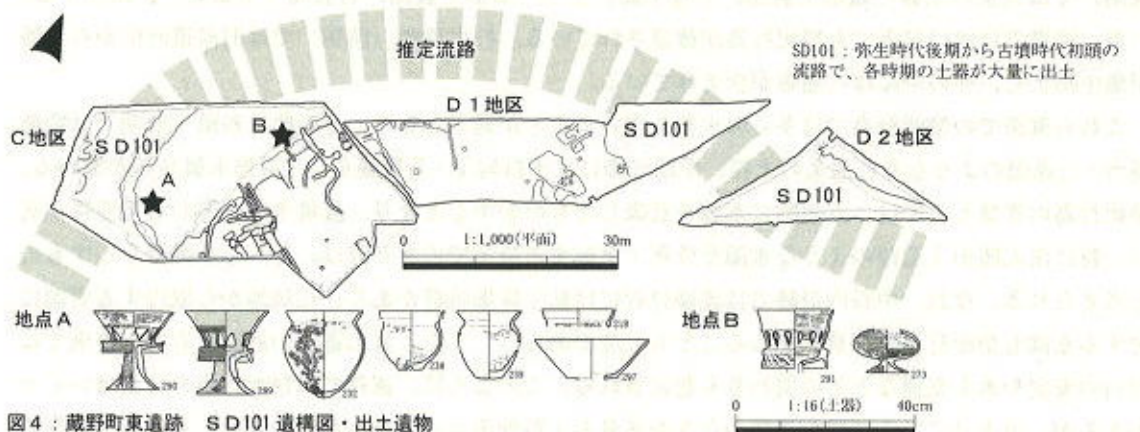


図3：打出遺跡 旧河道河岸遺物

図2：八町Ⅱ遺跡 SE02 遺構図・出土遺物



※図1～4について
土器の縮尺は1：16

引用・参考文献

- 図1：富山市教育委員会1984『飯野新屋遺跡発掘調査概報』
図2：富山市教育委員会2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
図3：富山市教育委員会2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
図4：（公財）富山県文化振興財団2013『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 蔵野町遺跡 蔵野町東遺跡 駒方南遺跡発掘調査報告』（掲載図を基に改変）

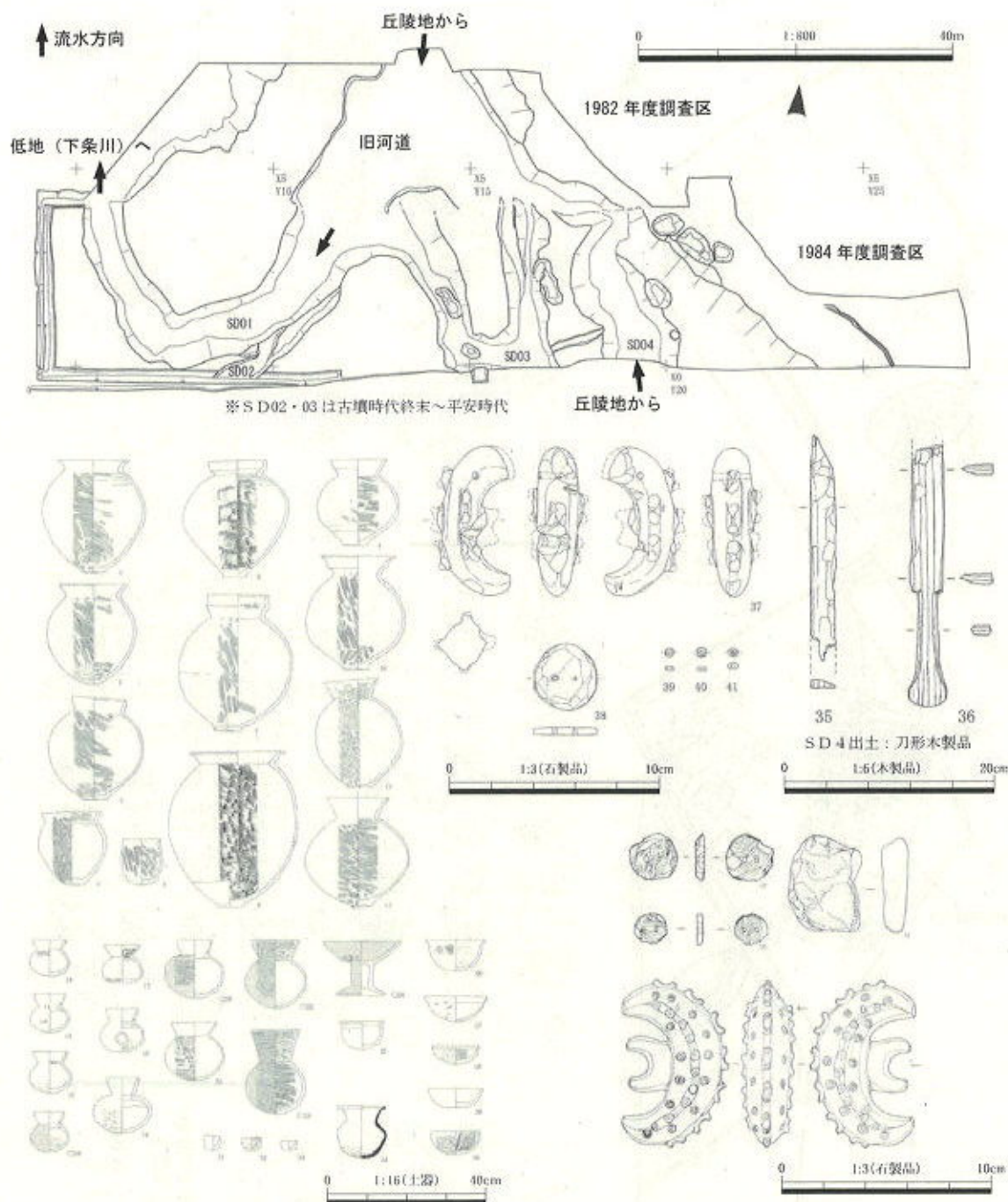


図5：南太閤山Ⅰ遺跡 遺構図・出土遺物

図6：若宮B遺跡 出土遺物

引用・参考文献

- 図5：富山県教育委員会1983『都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群 発掘調査概要』
 富山県教育委員会1985『都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群 発掘調査概要(3)』
 富山県埋蔵文化財センター2020『とやまの古墳時代集落遺跡等出土品』(掲載図を基に改変)
- 図6：富山県教育委員会1981『北陸自動車道遺跡調査報告-立山町遺構編-』
 富山県教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告-立山町土器・石器編-』
 富山県教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告-立山町木製品・総括編-』
- 図7：(公財) 富山県文化振興財団2013『中谷内遺跡発掘調査報告』(掲載図を基に改変)

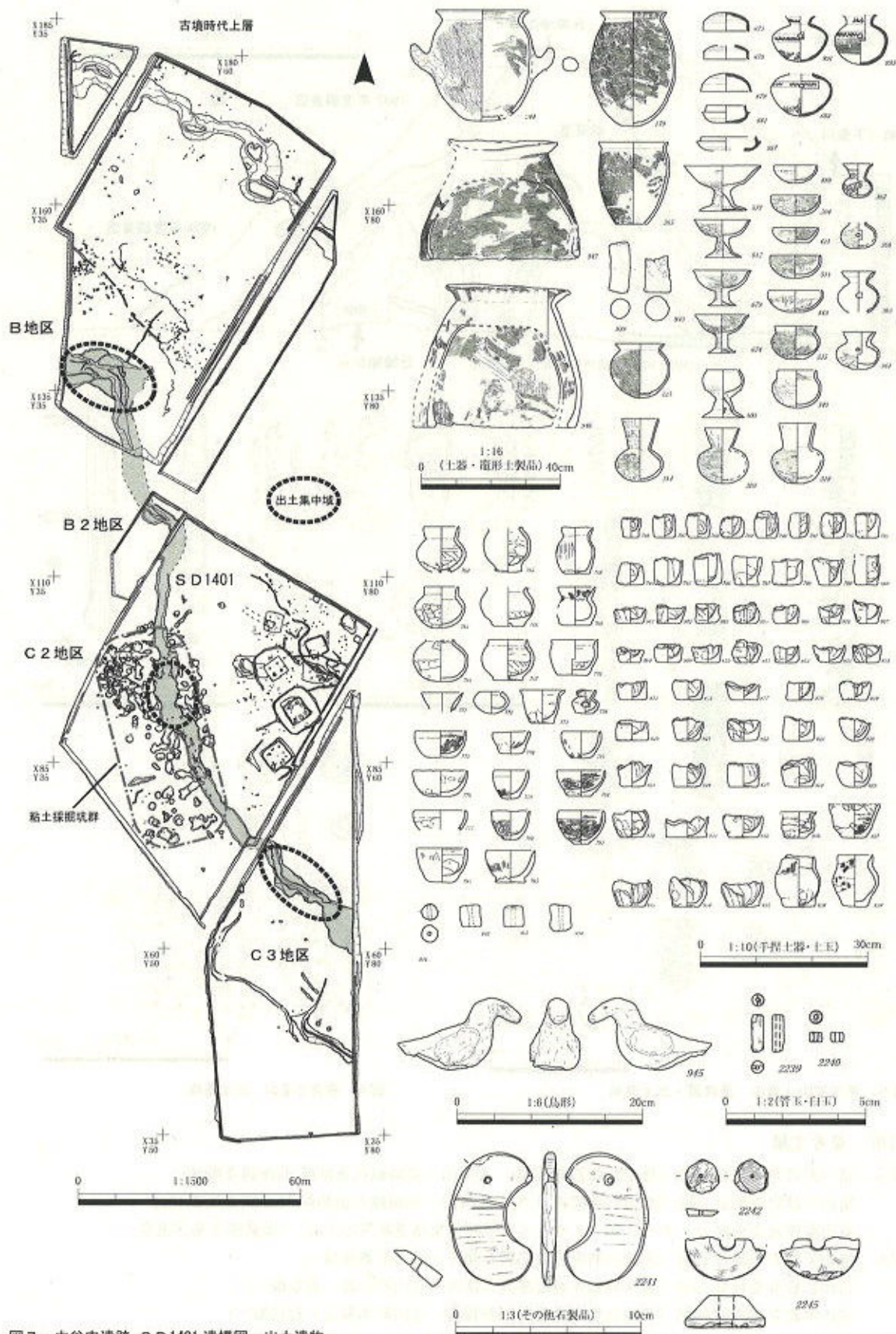


図7：中谷内遺跡 SD1401 遺構図・出土遺物

古墳時代の水のマツリ ～石川県をケーススタディとして～

新美祥人夢(公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)

はじめに

令和3年度に引き続き、環日本海文化交流史研究事業で古墳時代の水のマツリをテーマとして研究集会を行った。本稿ではそれらの内容を踏まえ、石川県内の水のマツリについて言及していきたい。

1. 集落内における祭祀形態

石川県内における集落内での水にまつわる祭祀行為は、井戸・流路などで行う事例から以下の3つに大別することができる。

I 類…特別な施設を用いて祭祀空間を設けるもの

例) 畝田遺跡、八日市遺跡、千代・能美遺跡

II 類…河川や流路で行われるもの

例) 萩市遺跡、二口六丁遺跡、矢田遺跡

III 類…湧水点や井戸等で行われるもの

例) 萩市遺跡、千代・能美遺跡

2. 県内遺跡の概要

本節では県内の水のマツリに係わる遺跡の出土遺物について言及していきたい(図1)。

① 加賀地域

八日市遺跡は、加賀市に所在する古墳時代前期の集落で、流路内に独立の祭祀施設とそれを覆い祭祀空間を設ける。溜升状の施設から手前に上澄みされた水が流れ出す構造になっている。遺物は、武器形木製品、剣鞘、舟形木製品などが出土し、槽と木樋も川跡より出土している。

畝田遺跡は木樋と槽が別作りになる初期の導水施設に見られる特徴を持つ施設が確認されている。出土遺物は、大量の土器を含め、農耕具、刀把、容器類等、多く存在するが、上記施設に伴う遺物の判断については、慎重に行わなければならない。しかしながら、弧文板や玉杖形木製品の存在、集落内で石製品関係の生産を行っていたことから畿内政権と関係のある生産遺跡と評価できる。

千代・能美遺跡は、湧水点祭祀と流水祭祀を行った跡が確認された。北区画からは、大型掘立柱建物(SB12)に隣接する形で大型の桶を転材した井戸がみつかり、南側には①日隠し堀と思わしき柱穴跡があること②工房施設群がある中央区画との境には板堀が設置されていること、の2点から周りとの隔絶性が際立つものと考えられる。南区画からは東南側の井戸(SE01)から溢れ出る水を流して、木製構造物に入れたものと考えられる。大量の土器とともに木製高坏や武器・舟形といった木製祭祀具の出土も確認されている。

② 能登地域

能登地域は加賀地域に比べ、祭祀施設を設ける資料がまだ出そろっていない状況にある。

宝達志水町に所在する萩市遺跡の流路内からは、大量の木製品が出土した。それらの中に剣形木製品が含まれる。この流路横の井戸からは木鐸の出土が確認されている。羽咋市太田ニシカワダ遺跡は、水のマツリに関わる遺物自体少ないものの、集落内で石製品を生産していた可能性が高く、畝田遺跡と同じような集落形態とも考えられる。

近年、発掘調査を行った七尾市矢田遺跡では、古墳時代中期の溝から建築部材、準構造船の部材、農具、容器類、刀剣装具（未製品を含む）などが数多く見つかった。溝の上面には手づくね土器と双孔円盤も見つかっており、祭祀行為が認められる。遺物については現在整理中な為、より詳細な検討は後論に譲りたい。

③ 小結

県内の代表遺跡を概観してきた。畝田遺跡、千代・能美遺跡、両遺跡での水のマツリは林氏（林2016）が指摘するように、施設の性格から畿内政権との関わりが窺えるものである。加賀地域では、古墳時代前期前半段階での畿内政権との積極的な関係が認められる一方、能登地域では中期以降、矢田遺跡を代表に水のマツリと四柳ミッコ遺跡で見られる様な鍛冶技術といった手工業生産から、畿内との関係が読み取れる。

3. 石川県内での水のマツリ

前節までの内容についてまとめ、石川県内の水のマツリの性格について述べる。

I類については、溝や井戸とは別の特別な祭祀施設あるいは空間を設けるものが該当し、畝田遺跡、千代・能美遺跡、八日市遺跡など古墳時代前期に多く、分布は加賀に偏りを見せる。

また、II類としたものは流路より所謂祭祀遺物が出土した遺跡が該当する。二口六丁遺跡や西念・南新保遺跡では、祭祀遺物の舟形木製品とあわせて大量の木製品（容器や農耕具）が出土しており、周辺の住居域に関わる溝として理解でき、同時に、それらの溝で祭祀行為も行っていた事が指摘できる。矢田遺跡では、弥生時代後期～終末期、古墳時代中期の重複する溝からそれぞれ鳥形木製品、案脚などの祭祀遺物とともに大量の木製品（容器、準構造船部材、建物部材）や手づくね土器、滑石製模造品が出土した。こちらも祭祀のみの独立空間というより生活域に祭祀が組み込まれているような印象を受ける。

III類とした湧水点祭祀は、石川県内では井戸でしか認められず、単体では、萩市遺跡の井戸覆土に木鋸が含まれる事例が該当する。千代・能美遺跡の湧水点については、林氏の指摘（林2016）にあるように弥生時代からの湧水点祭祀セットに系譜をたどれる遺構と理解できる。

以上、3分類はあくまで祭祀を行う場所について分けたものであり、①I類を頂点とする階層性があるのか②溝の重複状態、どこからどこに向かって流れる溝か、同じ溝であっても水源や流れつく所によって遺構の属性を考える必要がある、という2点については、今後議論が必要である。

4. 予察：能登地域の王墓の成り立ちについての理解

能登地域の王墓成り立ちの理解は、伊藤氏の研究が挙げられる（伊藤2016）。伊藤氏は①古墳の立地や様相②墳形の変化が不自然であることを根拠に古墳時代前期末において、2つの首長系譜の並立を想定している。

中期初頭の石川県内最古事例である長方板葺板甲を副葬する柴垣円山1号墳（円墳・21.5m）をはじめ、B種ヨコハケを施す円筒埴輪が出土する滝大塚古墳（帆立貝式古墳・90m）の出現など畿内政権下の古墳で採用される墓制と同じ特徴を持つものが多く見受けられる。古墳時代前期の段階では、七尾湾沿岸（万行遺跡、矢田遺跡）の海上交通ルートがあり、それが中期になると羽咋市へ寄る、あるいは立ち入るルートが積極的に開発されていったことに起因するシンボルマーク的な古墳の築造と予想する。

それら古墳築造の背景として、前期では太田ニシカワダ遺跡、中期では四柳ミッコ遺跡といった集

落内での生産を担った人々が、より畿内政権との関係を強固にしていた可能性がある。

おわりに

石川県内の水のマツリを行う集落は古墳時代を通して、畿内政権との関係が如実に表れる地域と地方独自で行う様な事例が認められる。特に前期段階においての加賀地域では、畝田遺跡や千代・能美遺跡といった遺物とその周辺環境から畿内政権との積極的な関係が認められる事例があるが、刀剣装具の未製品など、多数の木製品が出土した矢田遺跡や集落内で行っていた四柳ミッコ遺跡の存在から中期の能登地域でも畿内政権との関係が認められる。それらの背景には「水のマツリ」という共通の行為あるいは手工業生産技術の共有により、関係をより強固にした集団がいた可能性が示唆される。

本研究事業で、古墳時代の祭祀・集落研究の課題が見えてきたように思う。県内の事例は、畝田遺跡の評価が問題になってくる。導水施設を有する遺跡との評価がされることもあるが、その性格については再考の必要があろう。また、水のマツリと水利開発の関係など考えなければいけないこともある。

今後は、水のマツリに限らず、マツリ行為全体を意識して古墳時代の祭祀行為の実態について明らかにしていきたい。

参考文献

- 石川考古学研究会 1997『石川県考古資料調査・集成事業報告書』祭祀具Ⅱ
石川考古学研究会 2001『石川県考古資料調査・集成事業報告書』捕遺編
伊藤雅文 1991『畝田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
伊藤雅文 2008『古墳時代の王権と地域社会』学生社
伊藤雅文 2016『加賀・能登の潟湖の古墳』『加賀・能登 王墓の世界』
大阪府狭山池博物館 2022『古墳時代導水施設の儀礼』大阪府狭山池博物館図録36
大阪府立近つ飛鳥博物館 2018『百舌鳥・古市古墳群に学ぶ、古墳と水のマツリ』平成30年度夏季企画展図録
小嶋芳孝・川畑誠・安英樹・柿田祐司・北野博司・田嶋明人 1993『石川県』『第2回 東日本埋蔵文化財研究会
古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』第Ⅰ分冊—東日本編Ⅰ—東北・東海地方・中部・北陸 北武蔵
古代文化研究会
川畑 誠ほか 1998『石川県羽咋郡志雄町 萩市遺跡 一般国道159号萩市歩道設置に係る発掘調査報告書』(社)
石川県埋蔵文化財保存協会
中屋克彦 2019『八日市遺跡』『石川埋蔵文化財情報誌』第40号 (公財)石川県埋蔵文化財センター
七尾市教育委員会 2003『七尾市埋蔵文化財発掘調査概報 石川県万行遺跡発掘調査概報—古墳時代の大規模建物
群とその関連遺構の概要報告書—』
七尾市史編さん専門委員会 2002『新修 七尾市史 1 考古編』七尾市役所
羽咋市教育委員会 1973『羽咋市史』原始・古代編
羽咋市歴史民俗資料館 2006『古代能登の神々とまつり』【羽咋市歴史民俗資料館特別展図録】
林 大智ほか 2000『七尾市三室福浦 B 遺跡・三室まどかけ遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
林 大智ほか 2015『羽咋市四柳ミッコ遺跡』(公財)石川県埋蔵文化財センター
林 大智 2016『古墳時代の首長居館を求めて』『加賀・能登 王墓の世界』
穂積裕昌 2021『「導水施設研究」の軌跡と展望—その「浄水化を問う」』【縄向学研究センター研究紀要 縄向学
研究 第10号 縄向学の最前線—桜井市縄向学研究センター設立10周年記念論集—』

表 1 祭祀関連遺物出土清跡一覽

所在地	遺跡名	時期	遺構			主な出土本製品	他の発掘遺物	備考
			倉戸・溝	堀川・水路	排水施設・その他			
取寄市八日市跡	八日市遺跡	古墳時代前期		川跡	排水施設(溝)	銅粉、陶器、酒器、舟形土器など、漆器		緒遺関係の建物跡を想定
加賀市 天聖寺本町	永町西ノノマザリ遺跡	古墳時代?		溝			勾玉(滑石製)	土器から磁土(滑石製)・管土(緑色凝灰岩製)・ビツトからも出土
加賀市馬渡町	馬渡遺跡	古墳時代中～後期		川跡		万葉本製品など	ミニチュア土器 石製遺物	集落内石製製品製造地あり
小松市千代町	千代ヶ江A遺跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期		溝		陶器類	多数の土器	
小松市龍興町	千代・龍興遺跡	古墳時代前期	倉戸		排水施設 矢張り跡 未確定	大量の本製品 (武器類・本製品、木製器類など) 建築部材		古墳時代前期前半から前期後半にかけて盛行 川跡から鉄器本製品、陶器出土
小松市津町	津町遺跡	古墳時代		溝状遺構			舟形土製品 土坑からも舟形出土	福川中流域(津町)に存在する弥生時代 後期から古墳時代内(巨大集落 展開)時期不明
金沢市藤江北	藤江B遺跡	古墳時代前～中期		溝			土器とともに 緑色凝灰岩の破片	前期古墳から出土する石製腰懸物や 管土の管玉を持っていた可能性
金沢市西町	西町ケルビ遺跡	古墳時代中～後期		溝状遺構			青土陶器、古銅製小形土器類	
金沢市下安原町	下安原遺跡	古墳時代前期		溝			陶文銭	古代を意図した装飾性土器
金沢市六丁町	二口六丁遺跡	古墳時代前期		溝		刀形、磨研具、工具、瓦、など	大量の土器が出土	板形土2点出土
金沢市牛車町	前田・牛車遺跡	古墳時代			水利施設		板形勾玉(滑石製) 勾玉(コハク製)	水利施設の詳細については不明
金沢市朝霞町	朝霞・朝霞南遺跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期		溝		銅製本製品、短形本製品		弥生時代の青銅製銅器
金沢市津田町	津田遺跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期		溝(500?)		磨研具、結核具、建築部材など		特殊すべきは磁器、磁器類の出土
金沢市戸本町	戸本の遺跡	古墳時代前期		溝				特殊土の遺構(溝)から出土するモノ
金沢市戸本町	戸本の遺跡	古墳時代中～	倉戸				鉄器類(緑色凝灰岩)	本製品
羽咋市宝達志水町	宝達志水遺跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期		溝		刀形、磨研具、板形具、金事具 建築部材		大量の土器・木製品
羽咋市西海町	西海ミツコ遺跡	古墳時代中期			土器等あり		平づくね土器 小型丸底釜	古墳時代の鉄器(土器)を製造 地(羽咋市)を伴う集落 土器は高坪の割合が高い
羽咋市	太田ニシカワタ遺跡	古墳時代前期		溝		銅製本製品		
七尾市 万町～久佐町	久佐遺跡	弥生時代後期～ 古墳時代中期	川跡			銅製本製品、銅製板形具、 小型磨研具、板形、など	板形磨研具、平づくね土器	水利施設?
七尾市三堂町	三堂塚遺跡	古墳時代前期		溝			管土(緑色凝灰岩)	遺跡内、古墳時代後期に改築 する製塩土庫が出土
羽咋市若菜町	若菜遺跡	古墳時代後期			磨研部材		平づくね土器、平づくね 磨研具、板形磨研具、板形磨研具	

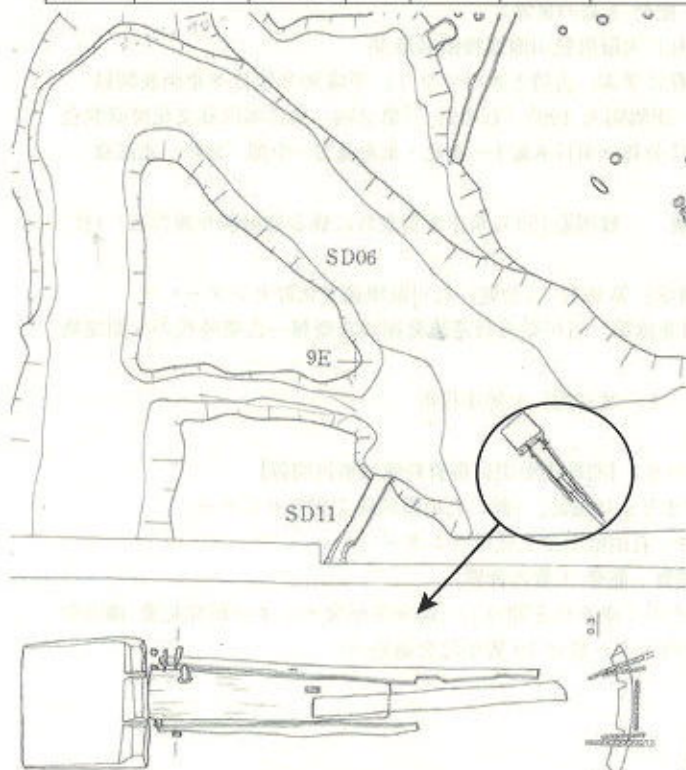


図1 畝田遺跡の導水施設検出状況
(上 1/120 下 1/30 伊藤 1991 より)

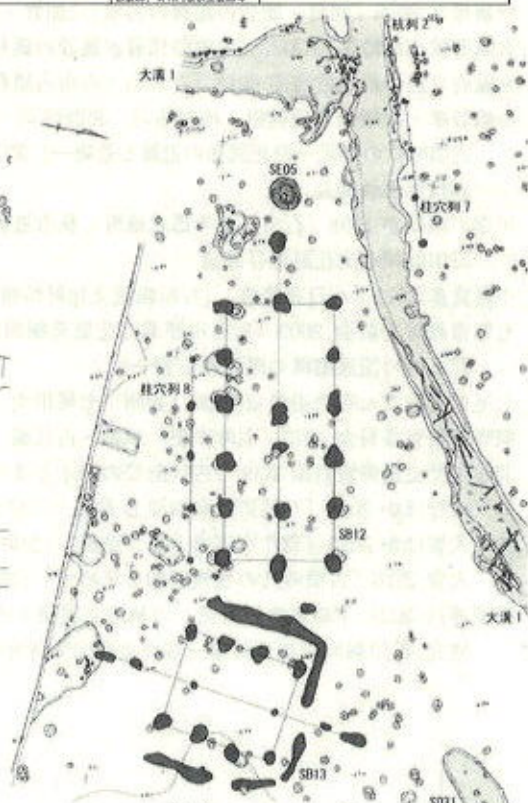


図2 千代・能美遺跡 北区画平面図 1/300 (林 2012 より)

福井県(越前・若狭)

魚津知克(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)

1. 福井県の概要

福井県では、平野部・盆地部の沖積地において発掘調査が蓄積され、木器が数多く出土している。弥生・古墳時代の木器が出土した遺跡の一覧を別稿にまとめた(魚津2023)。

本稿では、“水のマツリ”に関連する遺構もしくは遺物を確認した主要遺跡として、福井市河合寄安遺跡・高柳遺跡・小稲津遺跡の3遺跡を抽出する。ただし、今後も、嶺北地域・嶺南地域の双方において、重要資料が提示されることが予測される。

2. 河合寄安遺跡における“水のマツリ”とマツリゴト

河合寄安遺跡は、地方における武器生産の実態を解明した(橋本2015)という点で、学界に衝撃を与えた。倭王権中枢の武器生産拠点である奈良県天理市布留遺跡三島(里中)地区(山内編1995)に比べ、調査面積は小さいが木器出土密度は匹敵する。布留遺跡の生産開始期(中久保2020)に形成され、鹿角装を模した布留遺跡資料(岩井2022)に類似する木製把未成品が出土している点も見逃せない。

ただし、武器生産のインパクトとはうらはらに、遺構や遺物の全体像を俯瞰した研究は乏しい。本稿では、以下に注意を促したい。

遺構単位での特徴としては、井泉を囲むように竪穴建物跡が配置され、計画性が認められる点がある(第1図)。「単なる居住空間ではなく、特殊な空間」(白崎・白嶋2003)という位置づけが可能である。

遺物(出土状況)単位では、下記の3点が大きな特徴である。

特徴① 未成品も含む木器を、比較的短期間のうちに廃棄している。

特徴② 武器、農具、容器ごとに、出土位置がまとまる。

特徴③ 刀剣装具以外にも、大型脚付木製品、縦穿孔の木錘、横杵の可能性のある木器など、高度な製作・使用技術を伴う木器が存在する。

これらは、一見すると、“水のマツリ”の遺跡というよりも、生産遺跡であることを示すと理解されがちな特徴である。しかし、現在は開発で大きく変貌したのだが、河合寄安遺跡の本来の景観は、「海を背後に、丘陵上の首長墳に直面し、九頭竜川上流の山々を望む」というものである。

古墳時代の、生産と祭祀と地域支配とは、別々な存在ではない(若狭2021)。刀剣生産論からも、“水のマツリ”とリンクしながら古墳時代の生産活動がなされていたことが示されている(齊藤2022)。神と人(首長)との協調を促し、海(開かれた先進的製作・使用技術)と山(九頭竜川を下る豊かな木材資源)との調和を謳う、地域の安定への願いが、この井泉にて奉じられたのであろう。河合寄安遺跡には、列島全体を俯瞰する古墳時代像が凝縮されている。



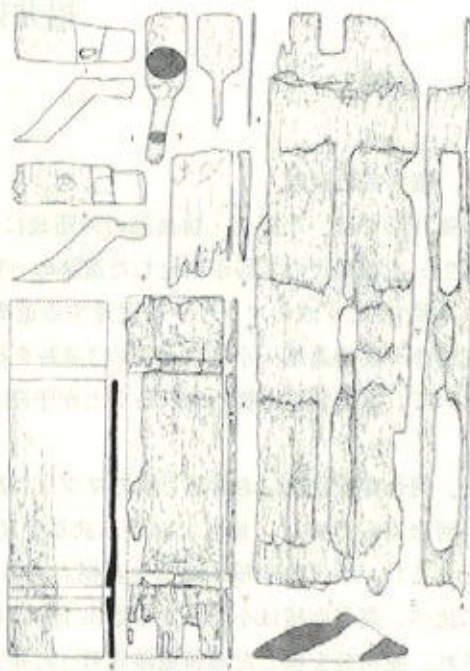
第1図 河合寄安遺跡出土遺構
(1/600) (福井市文化財保護
センター編2011に遺構名追加)

3. “水のマツリ”の広がり

地域社会の実態を捉えるにあたっては、“水のマツリ”の裾野を押さえる必要がある。それを語るのが、高柳遺跡及び小稲津遺跡である。

九頭竜川対岸の比較的近距離に位置する高柳遺跡の生産・祭祀活動は、弥生時代終末から古墳時代前期が中心で、河合寄安遺跡より早い。ただし、両遺跡とも調査範囲が限定され、面的な遺構の広がりについては今後の課題となる。生産活動の様相から、地方政権は兩岸を一体運用していたと現時点では理解したい。

小稲津遺跡は、足羽山を望み、西は小羽山墳墓群のある清水地域、南西は武生・鯖江盆地に至るという交通の要衝にある。この遺跡では、方形周溝墓群が古墳時代前期まで存続している。“水のマツリ”を直接示す遺構は明確ではないものの、大型脚付木製品（第2図左下）などが出土した。本資料をもって、墓制の伝統を維持する中小首長にも“水のマツリ”に連なる祭儀が定着していたことを示すとすれば、祭儀の波及時期は弥生時代終末以前に遡る可能性が高い。



第2図 小稲津遺跡Ⅱ区出土木器（鈴木編 2002）

引用・参考文献（県埋文報：福井県埋蔵文化財調査報告の略）

- 青木隆佳（編）2021『高柳遺跡2』県埋文報第175集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 秋山綾子（編）2021『高柳遺跡1』県埋文報第174集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 岩井彰彦 2022『鹿角と木』『ここまで判った布留遺跡』発表資料集 天理市観光協会 pp.65-70
 魚津知克 2023『福井県弥生・古墳時代木器出土遺跡一覧』『年報』37 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター pp.26-28
 齊藤大輔 2022『布留遺跡刀剣装具研究の余波』『ここまで判った布留遺跡』発表資料集 pp.199-202
 白崎一夫・白嶋裕司 2003『福井市河合寄安遺跡の調査』『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究会発表要旨集 鉄器文化研究会 pp.179-182
 鈴木篤英（編）2002『小稲津遺跡』県埋文報第59集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 田邊明宏（編）2011『高柳遺跡』福井市教育委員会
 白崎一夫（編）2014『高柳遺跡Ⅱ』福井市教育委員会
 中久保辰夫 2020『布留遺跡の古墳時代集落』『大和布留遺跡における歴史的景観の復元』研究紀要第24集 公益財団法人由良大和古代文化研究協会 pp.104-123
 橋本達也 2015『古墳時代中期の武器・武具生産』『中期古墳とその時代』季刊考古学別冊22 雄山閣 pp.99-110
 福井市文化財保護センター（編）2011『河合寄安遺跡 発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会
 森田喜久男 2009『日本古代の王権と山野河海』吉川弘文館
 山内紀嗣（編）1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団
 山田俊輔 2016『鹿角製刀剣装具の系列』『日本考古学』第42号 日本考古学協会 pp.21-33
 若狭 徹 2021『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館

京都府北部・兵庫県北部(丹後・但馬)

魚津知克(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)

1. 京都府北部(丹後) —立地の共通性—

祭祀具を含む主な木器出土遺跡(第1表)のうち、“水のマツリ”に関連する遺構が確認された主要な遺跡として、京丹後市峰山町古殿遺跡と同市網野町浅後谷南遺跡とに注目したい。両者の立地は共通しており、“水陸両方の交通が至便な場所”、そして“谷からの水が集まり河川へと流れる場所”を選び、人為的に溝を掘削し、構造物を設置する。

古殿遺跡では、2次調査第1トレンチの古墳時代前期の溝SD02-2から出土した大型脚付木製品と、ほぼ同時期の第2トレンチQ5グリッド包含層から出土した刀装具が目される。前者は四脚の優品で、中国大陸起源の儀礼を受容したことを示す(長友2005)。後者は、豊島直博分類の落とし込み式A類把に該当する(豊島2008)。この型式の把は、多くが鉄刀付着木質状況として認識され、木器単体が出土するのは珍しい。他の類例より時期も早い。装具については在地生産だと考えるのは、突飛な想像なのだろうか。

浅後谷南遺跡は、古墳時代前期の槽付樋の存在が著名だが、弥生後期から古墳前期にわたって各種の木器生産が継続している点にも着目したい。この間、溝や構造物も繰り返し築かれる(高野2014)。生産や交流の拠点で、“水のマツリ”が展開していることを如実に示す遺跡である。

2. 兵庫県北部(但馬) —“水のマツリ”の起源と展開—

祭祀具を含む、主な木器出土遺跡(第2表)のうち、“水のマツリ”に関連する遺構が確認された主要な遺跡として、豊岡市出石町袴狭遺跡・入佐川遺跡が存在する。

袴狭遺跡の類例は、今回の対象時期からは遡るものの、“水のマツリ”の成立過程を示す重要な資料だと考えられる。弥生時代後期の溝SD304からは準構造船を線刻した板材(柴田2021)や透かし彫りのある板、そしてやや東の同一遺構面からは魚類や動物などを線刻する琴板と考えられる箱形木製品が出土した。SD304での構造物自体は未確認だが、“水のマツリ”との関連がきわめて濃厚である。別地点では木製装飾高杯も出土しており、技術複合(石川2019)と祭祀体系とを“水のマツリ”のもとで密着させ(馬路2021)、地域内統合や地域間交流を円滑かつ強固に推進させるという、地域経営の手法を読み取ることができる。

入佐川遺跡の木器貯蔵遺構は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて継続的に利用され、刀装具が出土した。丹後の様相と比較すると、木製刀装具の出土という点では古殿遺跡と共通しており、各種木器の継続的生産という点では浅後谷南遺跡と共通する。古墳時代中期の福井市河合寄安遺跡における生産様相(福井県の項参照)も踏まえると、武器の少なくとも装具生産部門については、日本海側一帯で技術的水準がほぼ達成されており、新技術の受容も十分可能だと考えられる。

朝来市池田古墳(山田編2015)の立地は、前項の古殿遺跡等と共通する。造り出しには水鳥形埴輪群が配置され、周溝からは樋形・槽形土製品が出土している。ただし、管見ながら、古墳以外の“水のマツリ”では、鳥形木製品等を重点的に配列するような様相は認められない。この違いは「葬と祭との分化」を反映しているのかが、“水のマツリ”を理解する上での大きな焦点だと考える。

引用・参考文献

- 石川ゆずは 2019「纏向遺跡辻土城4出土装飾木製高杯の系譜」『古代学研究』222号 古代学研究会 pp.1-9
- 柴田昌児 2021「準構造船と描かれた弥生船団」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2020』鳥取県 pp.19-25
- 高野陽子 2014「古墳時代前期の導水祭祀—京都府浅後谷南遺跡の再評価—」『古墳出現期土器研究』第2号
古墳出現期土器検討会 pp.123-137
- 豊島直博 2008『古墳時代前期の鉄製刀剣』2005（平成17）年度～2007（平成19）年度科学研究費補助金（若手B）研究成果報告書 奈良文化財研究所
- 長友朋子 2005「弥生時代から古墳時代への食事様式の変化とその歴史的意義」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室 pp.353-382
- 馬路晃祥 2021「花卉高杯のライフサイクル」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2020』鳥取県 pp.26-34
- 山田清朝（編）2015『池田古墳』兵庫県文化財調査報告第471集 兵庫県教育委員会

第1表 京都府北部（丹後）の類別

No.	遺跡名	場 所	時期（木器の時期）	遺 構	出土木器	祭祀具（奈良以降は除外）	備 考
1	古殿	京都府京丹後市峰山町字古殿	弥生末—古墳前	2次SD02	農具（鋤柄・鎌柄）・工具（木釘）・紡織具（有頭棒）・食器具（柄杓）・容器（箱・蓋）・腰掛（組合・一木）・部材・建築部材	四脚机・三脚盤・脚付盤・盾・儀仗柄？	堰（止水板）
			古墳前	2次SD04	容器（槽）・部材		
			古墳前	2次SD08	容器（蓋）・板材・部材・建築部材		
			古墳前	2次SD11	農具（直柄平鍬・杵）・容器（盤？）・食器具（柄杓）・有頭棒・部材・建築部材	剣形？・火鑊杵	
			古墳前	2次1トレンチ西	食器具（柄杓）・部材・建築部材	火鑊白・火鑊杵	
			古墳前	2次1トレンチ東	農具（鎌柄）・容器（箱）	琴？	鎌柄・箱・琴？は報告書で確認できず
			古墳前	2次2トレンチ	紡織具（杵）・容器（盤）・板材・部材・建築部材	刀装具・脚付盤	
			弥生後—末	3次SD302	腰掛		腰掛はSD303のものと接合
			弥生後—末	3次SD303	容器（槽）・腰掛・羽子板状	鎌形	腰掛1つはSD302のものと接合
			古墳前	3次SX301	容器（箱）・有頭棒・羽子板状		
			弥生末—古墳前	3次包含層	農具（直柄平鍬・田下駄）・工具（斧柄）・容器（盤・箱・鉢・蓋）・有頭棒	舟形・火鑊白	
2	浅後谷南	京都府京丹後市網野町字公庄	弥生後—古墳中	H9 第7トレンチSD01	梯子・板材・杭・部材	石見型板〔盾状木製品〕	
			古墳中	H9 第7トレンチSD02			

		古墳中・後半 (TK23-47埋 没)	H10 A地区 SD2010 (新)	農具(横鋸・横泥除・曲 柄ナスビ・杵未成品・田 下駄杵)・工具(組合斧 柄・槌)・食事具 (簋)・容器(槽・曲物 底板・箱)・木錘・部 材・建築部材	堰部材・樋・火 鑽白・刀柄未成 品(あるいは脚 未成品?)・舟 形・刀形・堅櫛 (完形)	上記遺構の 上流部分 土製勾玉 建築部材は 高床式建物 はぼ1棟
		古墳中・後半 (TK23-47埋 没)	H10 A地区 SD2011	容器(槽・箱)・部材・ 建築部材	火鑽白	
		古墳前	H9 第7トレ ンチSD05	農具(横鋸未成品:堰止 水板に転用)	浄水施設(槽付 樋)・堰止水 板・儀杖か・模 造剣か	
		古墳前	H10 A地区 SD2012	農具(横鋸未成品)・容 器(把手付槽)・食事具 (簋)・梯子・建築部材	浄水施設(部 材)・鳥形・円 板(鏡形か)・ 舟形(大型)・ 剣装具・火鑽白 板材	上記遺構の 上流部分
		弥生末-古墳 前	H10 A地区 SD2016 (新)	容器(槽・桶底板付)・ 櫛未成品?・堰止水版・ 板材	脚付槽	
		弥生末-古墳 初	H10 A地区 SD2016 (古)	食事具(柄杓)・堰止水 版・把手・板材		
		弥生末-古墳 初	H10 A地区 SD2017	農具(横鋸未成品)・堰 止水版・杭		
		古墳中・後半 (TK23-47埋 没)を中心と する	包含層	農具(横鋸未成品・曲柄 鋸未成品?破片・鋸柄・ 田下駄)・食事具 (簋)・容器(槽・ 箱)・紡織具(総かけ)	脚付槽・火鑽 白・刀形・剣 形・刀子形・鏃 形?・鳥形?・ 斎串状・弓	

第1表 京都府北部(丹後) 文献

1. 土橋 誠(編) 1988『古殿遺跡』京都府遺跡調査報告書第9冊 京都府教育委員会
2. 黒坪一樹 1998「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第83冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
石崎善久・黒坪一樹・福島孝行 2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

第2表 兵庫県北部(但馬) 文献

1. 篠宮 正(編) 2002『五反田遺跡』兵庫県文化財調査報告第227冊 兵庫県教育委員会
2. 中村 弘(編) 2002『入佐川遺跡』兵庫県文化財調査報告第229冊 兵庫県教育委員会
3. 鈴木敬二(編) 2000『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第197冊 兵庫県教育委員会
中村 弘 2002「袴狭遺跡出土線刻画木製品について」『入佐川遺跡』兵庫県文化財調査報告第229冊 兵庫県教育委員会 pp. 151-156・図版121-123
4. 池田征弘(編) 2007『加都遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第324冊 兵庫県教育委員会

第2表 兵庫県北部（但馬）の類例

No.	遺跡名	場 所	時期（木器の時期）	遺 構	出土木器	祭祀具（奈良以降は除外）	備 考
1	五反田	豊岡市祥雲寺	古墳中	SD31 SR42 SD43 SS44 第4面A区 (SR41-SR42間) 第4面B区 (SR42-SD43間) 第4面C区 (SD43南西側)	農具（田下駄） 農具（田下駄）・工具 （横槌）・容器（槽・ 箱）・運搬具（天秤棒・ 舟）・板材 農具（田下駄）・運搬具 （天秤棒）・容器 （蓋）・腰掛・板材・建 築部材 農具（田下駄）・紡織具 （糸車） 農具（田下駄・穂摘 具）・容器（刳物盤・刳 物槽・指物箱）・食事具 （箸）・板材・棒材・建 築部材 農具（田下駄）・運搬具 （天秤棒）・工具（網台 目盛板）・板材・棒材・ 建築部材 農具（田下駄）・容器 （刳物把手?）・棒材・板 材	刀形・火鑽白・ 火鑽棒 舟形・火鑽棒 刀形・鳥形?	※上層（第 3層）洪水 砂層から滑 石製有孔円 板と琴柱形 石製品が出 土
2	入佐川	豊岡市出石町 宮内	古墳—古代	3区第4遺構面 落ち込み	農具（田下駄）・漁撈具 （アカ取り・網杵）・工 具（木槌）・運搬具（天 秤棒）・容器（曲物把 手）部材・建築部材	把頭	落ち込み中 のSK435に 横線・横線 泥除の未成 品
3	袴狭	豊岡市出石町 袴狭	弥生後 古墳—飛鳥	国分寺2区 SD01 深田1区第3 遺構面SD304 深田1区第3 遺構面SD306 深田1区第3 遺構面SD310 深田1区第3 遺構面SD313 深田1区第3 遺構面直上 深田1区第2 遺構面直上 深田1区第2 遺構面ベース 層	用途不明品 農具（田下駄） 農具（穂摘具） 建築部材 農具（田下駄）・容器 （曲物底板・皿・盤）・ 部材・板材・建築部材 農具（田下駄・小型堅 杵）・容器（曲物底板・ 皿・刳物桶・刳物高 杯）・杓子形木器・棒 状・板状・部材・用途不 明品	琴 透かし彫り板 絵画線刻箱形木 製品（琴板） 脚付盤・火鑽白 鳥形・火鑽白・ 槌状木器	
4	加都	朝来市和田山 町市御堂	古墳中—中世		農具・運搬具・容器・服 飾具・食事具・工具・雑 具・建築部材等	刀形	

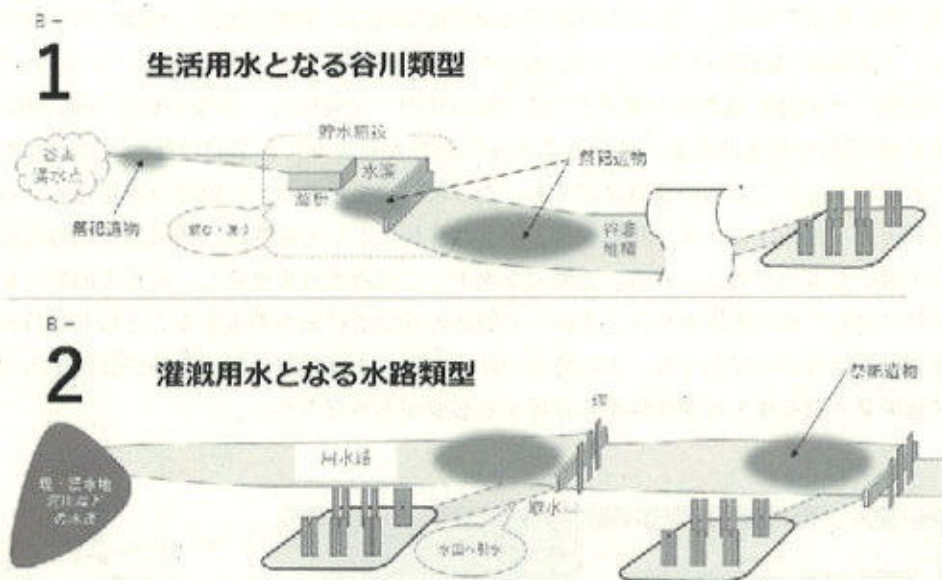
(文献は前頁に掲載)

山陰地域における古墳時代の水のマツリ

松尾充晶(鳥根県立古代出雲歴史博物館)

1. 「水のマツリ」の種類

水に関わる祭祀遺跡の立地・構造は、A. 井泉、B. 流路、C. 導水施設に大別される。このうち A. 井泉(水源地と大型建物等で構成される儀礼空間)、および C. 導水施設(遮蔽物・覆屋内に置かれた木槽樋)、は畿内・畿内周辺地域に事例が知られ高位首長層によるものとして注目されるが、中国地方には典型的な事例が無い。山陰(中国地方)における水のマツリはほぼ全てが B. 流路(生活用水・灌漑用水として利用される自然河川および人工水路)を舞台にしたものである。その立地・構造・祭祀遺物の出方はさらに2つに大別できる[第1図]。



第1図 流路における「水のマツリ」の種類

谷川類型の祭祀遺跡は、谷奥から流れ下る谷筋の傾斜地や、谷出口に形成された小扇状地形の微高地に立地する。谷の最奥部には自然の湧水地があり、その下手に木製(板組)の溜橋など貯水施設が伴う。祭祀のための特別な空間ではなく、谷川に面して建物遺構が伴うなど概して居住空間との距離感が近い。生活に伴う土器・木製品類と混在しながら、祭祀遺物(木製祭祀具・手捏ね土器・モモ核など)が下流の谷底に堆積して検出される場合が多い。

水路類型は、河岸段丘や谷底平野、沖積地など平地に立地する。水源は堤・谷水・河川からの取水など様々で、水田耕地に向けて引水する水路に水位を上げるための堰と、水田への取水口が設けられる。堰周辺など水流が停滞する箇所に集まるように祭祀遺物がまとまって検出される。水路は人工的に掘削された溝に限らず、自然流路を水田灌漑に利用した場合もある。幅10m程の大規模なものもあることから、部分的な発掘調査では「河道」「自然流路」と報告される事例も多い。

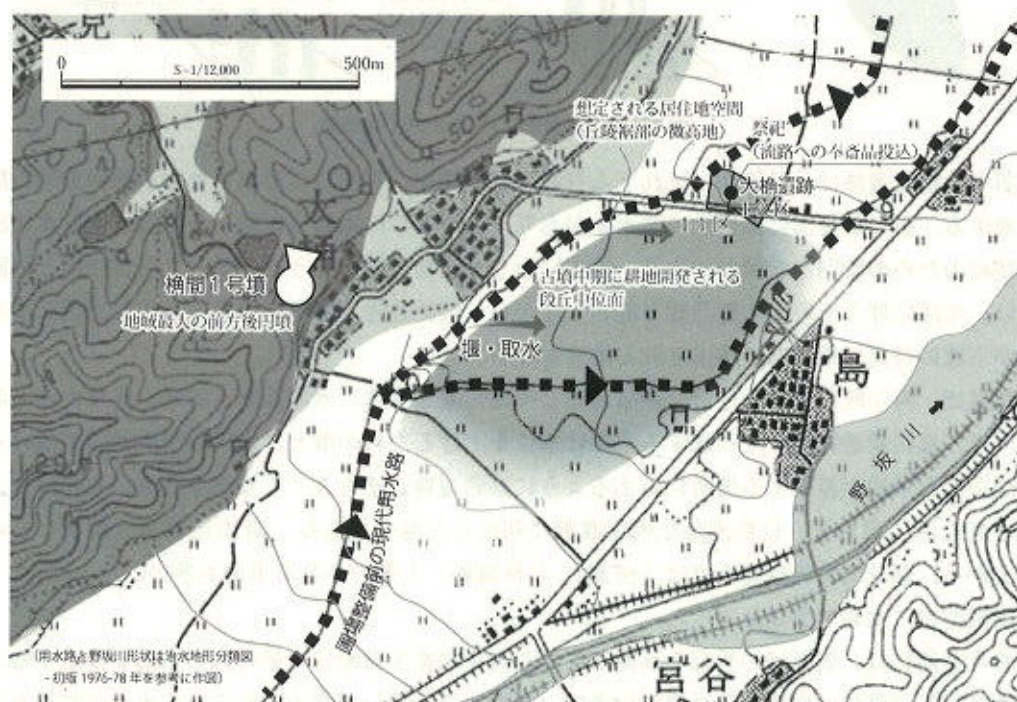
2. 谷川類型の「水のマツリ」

古墳時代前期には、集落域の外郭を区画していた溝を廃絶する際に大量の完形土器を投棄する行為が古志本郷遺跡(鳥根県出雲市)や博労町遺跡(鳥根県米子市)で認められるが、水への特別な意識はうかがえず、「水のマツリ」といえる遺跡は無い。祭祀遺跡として明確に認知できるのは定型的な

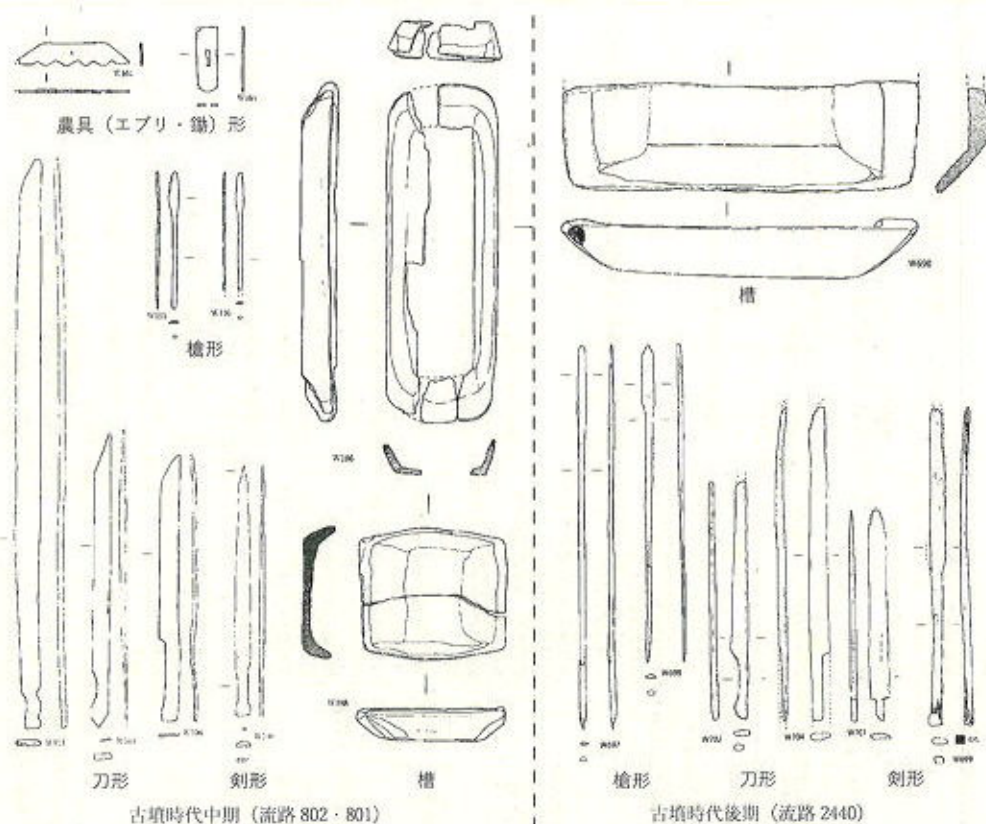
祭祀具、すなわち土製模造品や滑石製品、木製祭祀具があらわれる古墳時代中期中葉からで、中期後葉に規模の大きな事例が増加する。祭祀行為の大規模化には首長層の主導があったと想定され、中期(TK208型式期)の谷川類型である石田遺跡(鳥根県松江市)では大型の木製琴が出土しているし、同類型の助平3号遺跡(広島県東広島市)では遺跡から200mの至近に広島県下最大の三ツ城古墳(前方後円：全長92m)が築かれたことが契機になったと想定される。このような、首長が主導・関与する谷川類型の水のマツリは後期にも続き、6世紀後葉～7世紀前半の高住牛輪谷遺跡(鳥取県鳥取市)では出土品に団扇形木製品や馬具(銅鈴・漆塗の木製鐙)が含まれるなど奉斎品の質が高い。

3. 水田開発と水路類型の「水のマツリ」

水路類型の立地は開放的で可視性が高い。中期中葉の大家八反田遺跡(鳥根県大田市)の場合、水路内に設けた堰の周りの広場のような空間に集落の構成員が多数集まって、多量の粗製土器・土製品・果実を捧げた様子が明らかになった。このような、水田耕作の安定的な恵みを祈念する季節的農耕祭祀を水路(堰・取水口など)でおこなう図式は中期後葉以降に事例が増え、やはり首長層の主導が想定される。大橋遺跡(鳥取県鳥取市)では、水路から木製祭祀具(刀形など)が出土するのと同時期に、隣接する丘陵上へ因幡地域最大の橋間1号墳(前方後円：全長92m)が築かれる[第2図]。ほぼ同位置に昭和40年代の用水路が通っていることから分かるように、祭祀の舞台となった水路は段丘中位面の水田に水を引くための灌漑水路であった。段丘上を流れる河川流路を安定化し、水田へ給水する用水路として活用する土木工事は橋間1号墳の首長により先導され、共同体生産力の拡大と首長権の伸長を導いたものと考えられる。労働力を集中して灌漑水利を整備し、耕地を開墾・維持することと、自然に対して水の恵みを祈り、生命・共同体の安定的持続を希求することは共に首長の権能であり、権力と密接な行為であった。古墳時代中期～後期に水路類型の祭祀遺跡が展開する現象は、こうした耕地開発・首長権との関係性から分析する必要があるだろう。



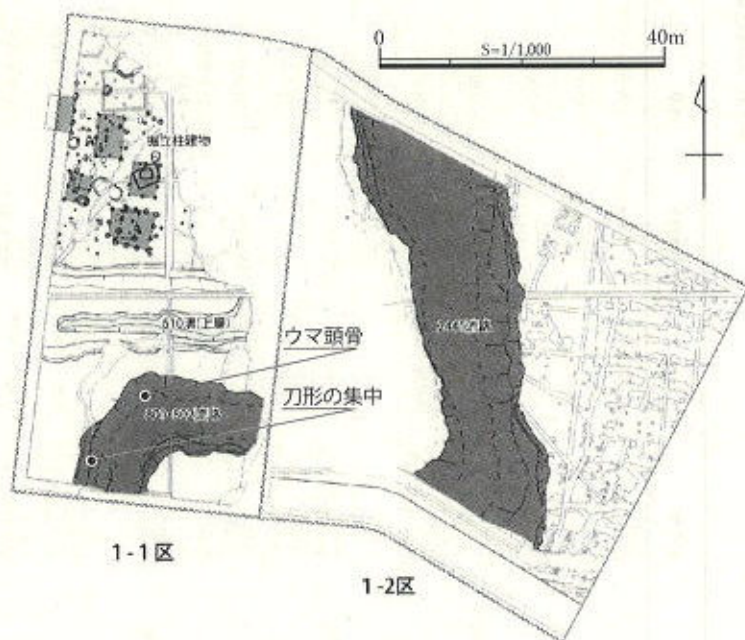
第2図 大橋遺跡の首長墳・居住域・耕地・用水路と祭祀の位置関係



第3図 大槻遺跡出土 木製祭祀具・木製品 (1/12)



第4図 橈間1号墳墳丘測量図



第5図 大槻遺跡 古墳時代中期遺構図

第1表 山陰地域(中国地方)の主要な「水のマツリ」遺跡

遺跡名	所在地	立地	遺構種別	時期	出土品	備考	
博労町遺跡	鳥取県 米子市博労町	海浜砂丘上	大溝(1区SD02)	古墳前期～中期	完形土器300点以上	集落縁辺を区画する溝の廃絶	『博労町遺跡』米子市教育文化事業団2011
大橋遺跡	鳥取県 鳥取市大橋	谷底平野 (河岸段丘上)	用水路 (1-1区SD02)	古墳中期	木製刀形・剣形・槍形(29点)、 ワナ頭骨	柄間1号分の築造と対応	『大橋遺跡Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』『Ⅳ』 鳥取県教育文化財団2017・2018
〃	〃	〃	用水路 (1-2区SD440)	古墳後期	木製刀形、ヤリ形、他木製品多数		
高住牛輪谷遺跡	鳥取県 鳥取市高住	谷間口部	谷川 木槽、暗渠水路	古墳後期	木製刀形、斎巾、団扇形木製品、木製 壺・銅鈴、モミ核2000点以上	高階層器財を伴う。谷斜面 に居住。	『高住牛輪谷遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会2014、『高住宮ノ谷遺 跡』鳥取県教育委員会2017、『高住牛輪谷遺跡Ⅱ』鳥取県教育 委員会2018
岩吉遺跡	鳥取県 鳥取市岩吉ほか	沖積地(水田域)	水田農用水路 (SD03)	古墳中期	木製模造品(刀4、船2、鳥1)		『岩吉遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会1991
〃	〃	〃	土坑(SK27)	古墳中期	斎巾状木製品25、桃種子11、底板		
長瀬高浜遺跡	鳥取県 東伯郡湯梨浜町	海浜砂丘上	包含層	古墳前期 ～中期	銅鏡、鉄製剣形、石製模造品(鏡形、 有孔円板2)ほか	大規模集落。大河内だが水 辺祭祀ではない。	
津波遺跡	鳥取県 東伯郡湯梨浜町	沖積微高地		古墳中期	木製刀形	北山古墳の近傍	『津波遺跡発掘調査概報』東郷町教育委員会1974、『新鳥取県 史』
秋里遺跡	鳥取県 鳥取市秋里ほか	沖積地(河口 自然堤防上)	廃棄土坑	古墳前期～中期	舟形土製品、完形土器多数	大規模集落。大河内だが水 辺祭祀ではない。	
塞ノ谷遺跡	鳥取県 鳥取市良田	谷間口部	池状遺構	古墳中期後葉 ～後期	木製祭祀具、手捏ね土器	詳細不明。護岸施設を伴う 池状遺構。	『新修鳥取市史』第一巻古代・中世編1983
古志本郷遺跡	鳥取県 出雲市古志町	河岸段丘上	溝 (G区SD41ほか)	古墳前期前葉	多量の完形土器	集落縁辺を区画する溝の廃 絶	『古志本郷遺跡Ⅴ』鳥取県教育委員会2003ほか
〃	〃	〃	水路 溝(G区SD39)	古墳後期後葉	大型の鉄刀2、須恵器多種、土師器 炊具ほか	用水路の縁部における供献	
石田遺跡	鳥取県 松江市浜佐田町	谷奥の湧水地	谷川 溜槽状施設	古墳中期後葉	木製琴ほか	谷奥の湧水地付近の水場	『石田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2004
キコロジ遺跡	鳥取県 松江市朝納町	谷奥の湧水地	谷川 溜槽状施設	古墳後期後半	木製土頭柄、楔形柄木製品、土器多 種	湧水地に設けられた溜槽	『キコロジ遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2011
前田遺跡	鳥取県 松江市八雲町	谷底平野 (河岸段丘上)	用水路(河道C) 取水堰	古墳中期後葉 ～後期後葉	木製琴、木製頭柄、玉類	東岩板から引水した用水路	『前田遺跡(第Ⅱ調査区)』鳥取県八雲村教育委員会2001
大家八反田遺跡	鳥取県 大田市大代町	山間部の 谷底平野	水路 河道と堰	古墳中期中葉	土製模造品(鏡・玉・カエル)、 手捏ね土器	河道内に設けた堰周辺	『古墳時代の水利と祭祀』『古代文化研究』第23号、鳥取県古代 文化センター2015
九景川遺跡	鳥取県 出雲市東神西町	谷の開口部	谷川 自然流路(SR03)	古墳中期後半	手捏ね土器、土器類	谷間口部の谷川	『九景川遺跡』鳥取県教育委員会2008
鳥井南遺跡	鳥取県 大田市鳥井町	丘陵谷部 (千代迫地区)	谷川 湧水と谷川	古墳中期 ～後期初頭	玉類、土製品	集落に隣接した谷湧水地と 水溜	『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大田市教育委員会2018
白石遺跡	山口県 山口市白石	丘陵裾	溝	古墳初頭	鳥形木製品		『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅲ』山口大学埋蔵文化財資料 館1985
岡の段C地点遺跡	広島県 山県郡北広島町	河岸段丘上	川に面した斜面	5C末～6C初頭	土製模造品(鏡・勾玉)、手捏ね土器		『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)』広 島県埋蔵文化財調査センター1994
助平3号遺跡	広島県 東広島市西条町	谷奥湧水地 ～開口部	谷川 谷部の自然流路	古墳中期後半 ～後期	土製模造品(勾玉)、製塩土器、有孔 円板	谷川に沿った集落	『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告(Ⅱ)』 広島県埋蔵文化財調査センター1993
百間川原尾島遺跡	岡山県 岡山市原尾島	自然堤防上	用水路 溝	古墳中期	木製模造品(刀3?)、有孔円板、白玉	集落微高地の縁を流れて水 田に引く用水路	『百間川原尾島遺跡2』岡山県文化財保護協会1984

東海の古墳時代「水のマツリ」遺跡について

穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）

はじめに

古墳時代の水のマツリに関して、愛知・岐阜・三重3県の代表的な調査事例に静岡県（旧遠江国）の1例を加え、地域の概要を確認する。いわゆる導水施設の性格をどう考えるかは措くとして、古墳時代を中心とした水にかかわる儀礼・信仰的な行為が存在、あるいは推測される遺構を下記のように分別・把握した。

- 1 井戸や井泉などの水源・湧水点
- 2 いわゆる導水施設
- 3 河川・溝の辺、溝の分水や取水口
- 4 水分

以下、それぞれの代表的な事例を確認する。

1 井戸や井泉などの水源・湧水点

水源・湧水点には、以下の3種がある。

泉（自然に水が湧き出ているところ。自然湧出の場所）

井泉（浅く掘り窪めた人工の浅い泉）

井戸（垂直に掘られて壁部を木材や石垣で補強する「掘り井戸」、素掘りもある）

泉・井泉・井戸

「井」の本義は「井桁をもつもの」、すなわち垂直に掘り込んで相応の深さをもち、そこに木材を組んだ枠状施設が伴うものを指す（白川1995）。一方、弥生時代や古墳時代には井戸のような枠状施設が伴わず、掘鉢状に掘り込まれた比較的浅いものも多く、「人工の泉」という含意で「井泉」と称するのが適当と認識している（穂積1992）。素掘りのものと、石組による保護を伴うものがある。

「井戸」は、地下水位が相対的に低く、湧水が地上まで溢れずに井戸内に留まっていることが多いのに対し、泉や井泉は地下水位が浅いため地上に溢れ出し、その処理（排出）のための溝を伴うことが多い。ただし、湧水量の多い井戸は余分な湧水を排出するための小溝を伴うものも多く、井泉と井戸には流動的な側面もある。東海地域ではないが、大阪府池上曽根遺跡の事例は、浅いが垂直の掘り込みが伴い、クスノキ製の削り抜き枠材をもつ（秋山1999）ことを重視すれば、「井戸」とみてよからう。

「泉」は、人間の手を加えない自然の湧水点である。集落からは、一定程度離れた清浄な地にあることが多く、そこで湧き出た清水を溝や木樋を通じて集落まで引き込むことは、水道普及以前の山村部などでは普通に存在しており、生活や農耕で使用する水の根源地として祭祀が行われることもあった。

単独型・源流型・流路付設型

湧水が一定の水位で止まり、流れ出ていかない湧水点（＝単独型）と、オーバーフローした湧水を流すための排水用の水路（溝）を伴い、水源の起点として湧水点と溝が一体化した湧水点（＝源流型）がある。また、最上流部の源流ではないが、旧河道や谷の法面に取り付けて設けられ、オーバーフローした湧水がそのまま旧河道や谷へ流れていくもの（＝流路付設型）もある（穂積2012）。

代表事例

単独型は、三重県松阪市古轡通りB遺跡の井戸がある。古墳時代前期に属し、近傍にいわゆる四面庇付きの大型掘立柱建物1棟が存在することから、両者はセットで存在したとみられる（奥野2000）。

源流型は、三重県城之越遺跡と岐阜県砂行遺跡の事例が代表例として挙げられる。このうち城之越遺跡は、3か所の湧水点（2か所が石組み井泉、1か所が素掘井泉）があり、流れ出た湧水は弧状を呈した貼石溝へ引き込まれる（穂積1992）。貼石溝には突出部や立石、広場、流路へ降りるための階段などが伴い、全体が貼石祭儀場として機能していたとみられ、約100m東方には2棟の「四面庇付」大型掘立柱建物が存在する（中浦1998）。貼石溝や合流後の素掘大溝からは高坏や小型丸底壺などを中心とした土師器や、刀形木製品や案、建築部材などの木製品が大量に出土した。ただし、木器組成に農具と槽が含まれないことは注意される。砂行遺跡からは、土師器・須恵器のほか、韓式系土器も出土している（成瀬2000）。

流路付設型は、三重県六太A遺跡と愛知県八王子遺跡の事例を代表例として挙げる。このうち六太A遺跡では、遠からず源流部があるとみられるが、小さな開析谷を基盤に形成された大溝の湧水出口となる上位側（左岸）法面に弥生時代後期から古代に至る13ヶ所の井泉（古墳中期以降は石組）が存在した。法面の岩盤から滲み出た湧水を溜める「磐井」の様相を呈する。このうち扉板を転用して枡材とした井泉1では木製刀形と滑石製勾玉が、同じく枡材をL字状の枡材とした井泉7では6世紀前葉頃の正立状態の須恵器・土師器の坏類等が出土した。大溝からは、祭祀に用いられたとみられる武器形木製品や滑石製模造品類などを含む大量の遺物が包含されていた（穂積2000・2002）。一方、八王子遺跡では、大型建物1棟を溝で囲繞する方形区画と集落域の間にある谷筋（方形区画側）に1基の井泉が設けられていた。この周囲から、未使用状態の大量のミニチュア・小型の土師器類が出土しており、井泉に対して供された土器群として評価されている（樋上2002）。

2 いわゆる導水施設

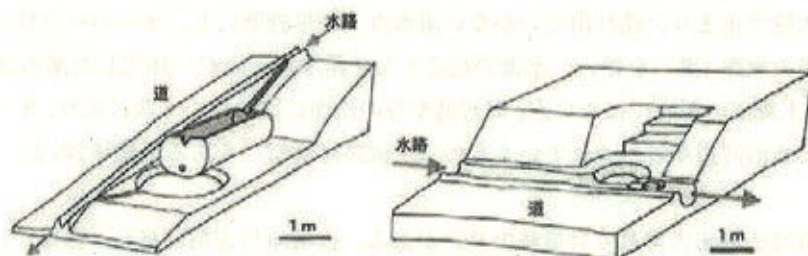
東海3県で導水施設遺構として挙げられうるのは、三重県伊賀市の水衛遺跡のみである。水衛遺跡では、木樋と転用した木製品を組み合わせた導水施設があるが、導水部が確認されただけで、木槽に相当する部分は未確認である。6世紀初頭頃の須恵器坏類や横櫛等が出土した（船越1997）。

東海では、導水施設としての確認例は低調だが、導水施設や湧水施設などを原形として成立した開形埴輪は東海でも出土例がある。三重県松阪市宝塚1号墳では導水施設型と湧水施設型の両方が出土したほか（福田2005）、三重県伊賀市石山古墳（高橋ほか1993、筒井編2005）や愛知県岡崎市経ヶ峰1号墳（斎藤1981）などでも開形埴輪の出土がある。

なお、導水施設の性格・機能については、「水のマツリ」や沈澱・濾過を繰り返す行うことにより上澄のきれいな「浄水を得るための施設」とする説など諸説が提起されているが、岐阜県飛騨市宮川町の民俗例などでは、丘陵部の湧水点（泉）から集落まで引き込み溝で導水し、そこで飲用水の採取や洗浄など生活上の諸行為を行う施設である「ミズヤ」が最近まで機能していた。ミズヤの基本構造は、古墳時代の導水施設とも共通しており、参考までにその模式図等を掲げておく（丸山ほか2001）。

3 河川・溝の辺、溝の分水や取水口

東海3県から、代表的な事例として、愛知県豊田市本川遺跡と、古代に属するものではあるが三重



岐阜県飛騨市宮川町種蔵及び西忍のミズヤ模式図

県松阪市朝見遺跡の例を挙げた。本川遺跡では、集落域を画する溝にケヤキの大木があり、その根元に手捏ね土器や土師器小型丸底壺などが置かれており、祭祀が行われた状況が明らかとなった。また、それとは別に、鳥形木製品も出土している（樋上2003）。

一方、朝見遺跡では、古墳時代から平安時代まで続く大溝から青銅鏡2点が出土したほか、最下層では時期不明の銅鏡が出土し、河川へ対する祭祀的行為の存在が窺われている（櫻井2022）。また、朝見遺跡では、別地点の別遺構ではあるが、溝や旧河道などから、斎串や鳥形などの木製品が出土しており、これも溝にかかる祭祀的行為の存在を示唆している。

この他、三重県津市の橋垣内遺跡では旧河道から木製刀形や儀杖形木製品、桃種が入った須恵器ハソウなどが出土しており、旧河道もしくはその周辺で祭祀が行われたらしい状況が窺われる（穂積2009）。

4 水分

1992年、辰巳和弘氏は静岡県天白磐座遺跡の報告書『天白磐座遺跡』（辰巳編1992）で「水源祭祀」を提唱し、1994年の著書『地域王権の古代学』（白水社）で「水源祭祀」と同義としての「井泉祭祀」も提唱した（辰巳1994）。辰巳氏は、天白磐座遺跡について、河川が盆地へ流れ出る水分の地に立地していることから、同地を盆地からみた水源と見做した。辰巳氏のいう「水源祭祀」概念は、河川脇で実修された祭祀であっても、その立地が「水分」の地である場合はその射程に含み、当該地域内で「水源」と見做されるもの全体を俯瞰する。つまり、辰巳氏の「水源祭祀」（井泉祭祀）概念は、河川であっても「地域の水源」としてその水分に位置する場合、それを水源とみて考察されたわけである。ただし、天白磐座遺跡の場合、遺構の存在形態そのものは磐座であり、それを辰巳氏のようにその立地を重視して、その性格を「水源祭祀」（あるいは井泉祭祀）とするかどうかは研究者間での認識の相違がある。

なお、辰巳氏のように、水分を水源と捉えた場合、伊勢神宮内宮を流れる五十鈴川も地域へ流れ出る水源として捉えることが可能となる（穂積2013）。内宮域は、現在の荒祭宮周辺で多数の白玉などが採集されており、古墳時代の相当大規模な祭祀場から出発している。荒祭宮は、南北両脇を小支谷で画された尾根上に立地し、南側谷筋の奥に御井がある。御井は江戸時代末の絵図にはあるが古代以前にまで遡及するものではない。しかし、『萬葉集』巻1と巻13に伊勢の「山辺御井」を詠んだ歌があり、読み込まれた「大宮」から山辺御井は伊勢神宮に存在した御井とみるのが妥当であり、滑石製模造品類の出土も勘案すると、荒祭宮脇の御井の「原形」となる御井がかつて存在し、それが「山辺御井」とされた可能性が高いのではないかと認識している（穂積2018）。もしこれらの観察や推定が正しいとするなら、天武朝から持統朝にかけて皇祖神を祀る宮として整備される神宮は、その初現的な存在形態としては水とのかかわりの中で創祀・出発したと推定される。

5 小結

東海における水に関わる祭祀を、遺構の存在形態の差から分類し、それぞれの代表的事例を紹介した。導水施設に関する確認例は乏しいが、湧水点や河川・大溝脇などの祭祀事例は相応に認められる。湧水点の地を祭祀場として造成した城之越遺跡の事例は、全国的にも湧水点祭祀の代表的事例として捉えられる。また、磐座という祭祀形態を採りながらも、その立地から水源祭祀の場とされた静岡県天白磐座遺跡の事例など、水に関わる祭祀を考えるうえで東海地域の事例は研究史上も重要な位置を占めてきた。

井水に関わる儀礼・意識は、『日本書紀』天智9年の山御井の傍で諸神の座を敷いて幣帛を班した記事や大嘗祭の中臣寿詞などから、律令期初期の大王・天皇など倭王権中枢も関わった祭儀にも取り込まれていたことが確認できる（穂積2022）。

『日本書紀』卷二十七 天智天皇(小島ほか1998)

(九年)三月の甲戌の朔にして壬午に、山御井の傍に、諸神の座を敷きて、幣帛を班つ。中臣金連、祝詞を宣る。

これらは、古墳時代の井戸／井泉など湧水点を祀る祭祀からの連続性を辿れるものであり、アマテラスなど擬人化した神を祀るようになる段階以前は、王権中枢を含む首長層が執行した祭祀として、とりわけ重要な祭儀であり、いわゆる「王権祭祀」として採用されたことが窺われる。東海の事例は、伊勢神宮も含め、これらを考えるうえで大変重要な事例を提供しているといえよう。一方で、『常陸国風土記』新治郡条では、集落形成に際して新たな井を掘り、そこで祭祀が行われたことが語られている。

『常陸国風土記』新治郡条(植垣ほか1997)

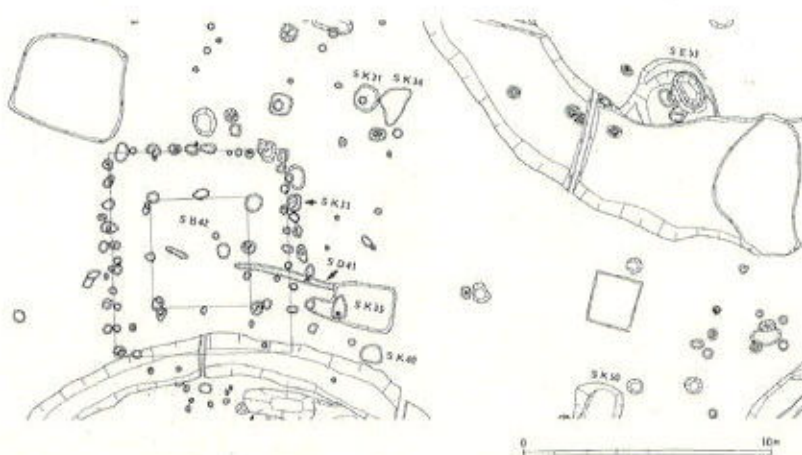
古老の曰へらく、昔、美麻貴の天皇敷宇しめし世に、東の夷の荒ぶる賊俗、阿良夫流爾斯母乃と云ふ。を平け討たむと為て、新治の国の造の祖、名は比奈良珠の命と曰ふものを遣はしたまひき。

この人罷り到りて、すなはち新しき井を穿りしに、今も新治の里に存り。随時に祭を致す。その水浄く流れき。すなはち、井を治りしを以て、因りて郡の号に着けたり。(以下略)

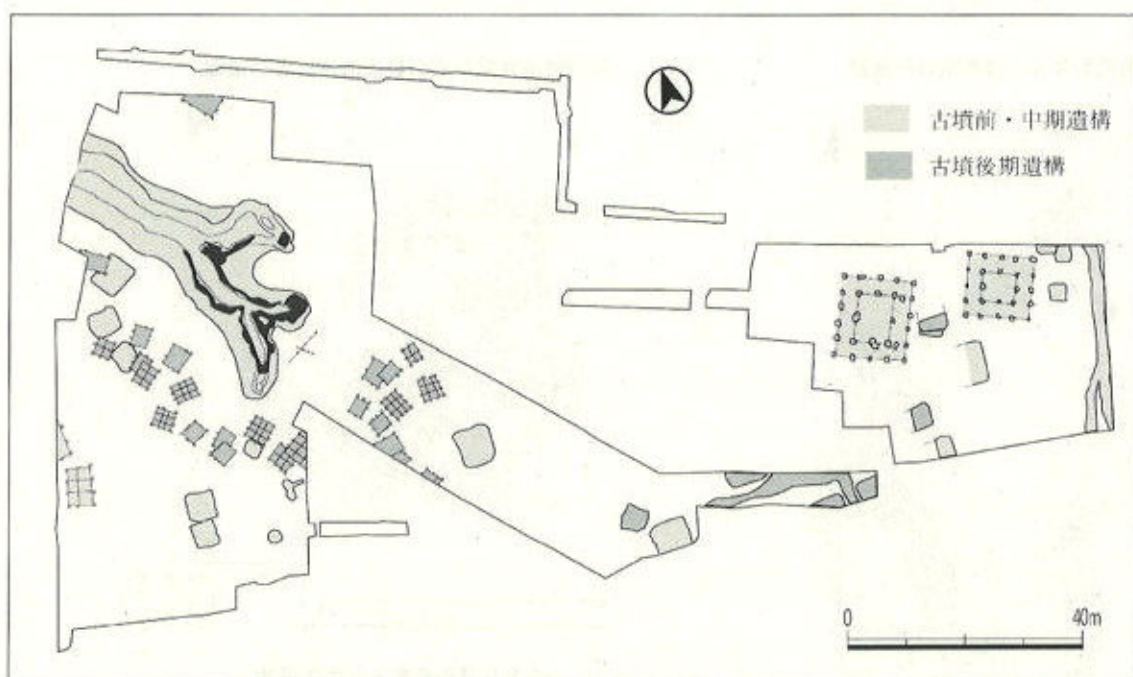
このように、水に関わる祭祀的行為は古墳時代祭祀のなかでも大きな位相を占めており、それらは大王から一般集落に至るまでの重層構造として示されるてんに、本祭祀の重要性があると認識している。

引用・参考文献

- 秋山浩三 1999『池上曾根遺跡の弥生時代井戸諸態』『みずほ』30 大和弥生文化の会
植垣節也校注 1997『日本古典文学全集 風土記』小学館
奥野 実ほか 2000『古嚮通りB遺跡・古嚮通りB古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
小島憲之他校注 1998『日本古典文学全集 日本書紀』小学館
齊藤嘉彦 1981『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会
櫻井拓馬編 2022『朝見遺跡(第5次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
白川 静 1995『字訓』平凡社
高橋克壽ほか 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
辰巳和弘編 1992『天白磐座遺跡』引佐町教育委員会
筒井正明編 2005『石山古墳』(第24回三重県埋蔵文化財展)三重県埋蔵文化財センター
中浦基之編 1998『城之越遺跡(2次)発掘調査報告』上野市教育委員会
成瀬正勝ほか 2000『砂行遺跡』財団法人岐阜県文化財保護センター
樋上昇編 2002『八王子遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財センター
樋上昇ほか 2003『本川遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財センター
福田哲也ほか 2005『三重県松阪市 史跡宝塚古墳』松阪市
船越重伸 1997『水衛遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌編 1992『三重県上野市比土 城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 2000『六太A遺跡発掘調査報告(木製品編)』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌編 2002『六太A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌ほか 2009『橋垣内遺跡(A～C地区)発掘調査報告 研究紀要第18-3』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 2012『古墳時代の埋葬と祭祀』雄山閣
穂積裕昌 2013『伊勢神宮の考古学』雄山閣
穂積裕昌 2018『神宮御井小考』『斎宮歴史博物館研究紀要』27 斎宮歴史博物館
穂積裕昌 2022『大嘗祭の考古学』雄山閣
丸山俊輔・山藤正敏 2001『岐阜県古城郡宮川村西忍集落の水利用』『人類史集報2001』東京都立大学人類史調査グループ



単独井泉：三重県古書通りB遺跡



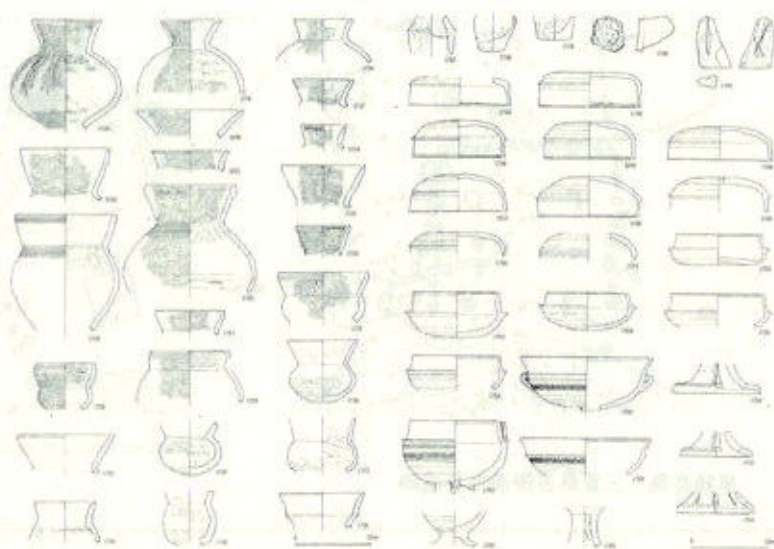
源流型井泉：三重県城之越遺跡



城之越遺跡の貼石祭儀場構成



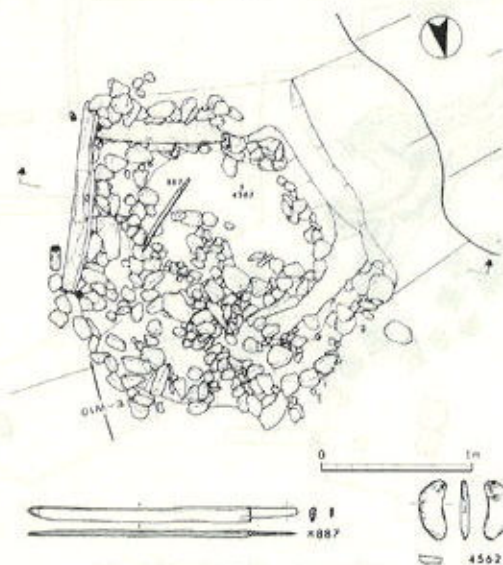
源流型井泉：岐阜県砂行遺跡



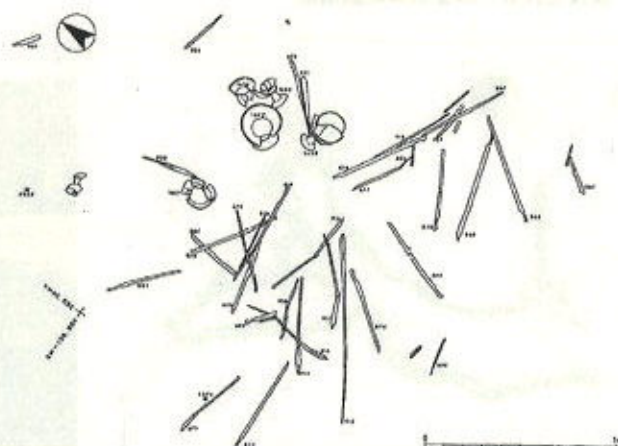
砂行遺跡井泉からの排出流路出土の遺物



流路付設型井泉：三重県六次A遺跡



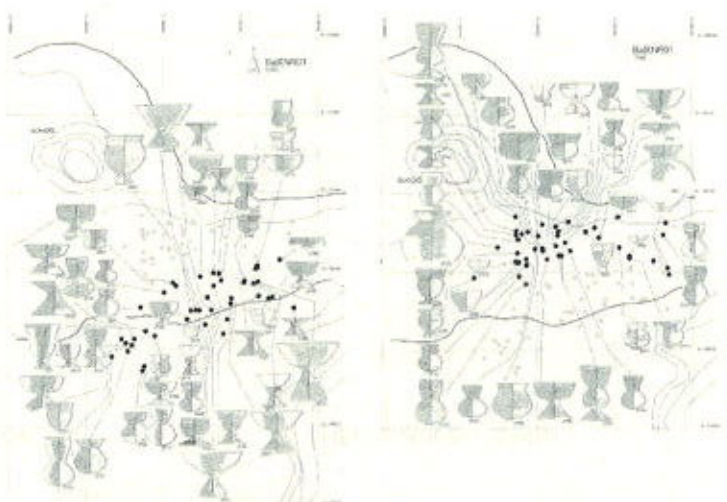
六次A遺跡井泉1と出土遺物



六次A遺跡井泉1と出土遺物



流路敷設型：愛知県八王子遺跡の遺構配置



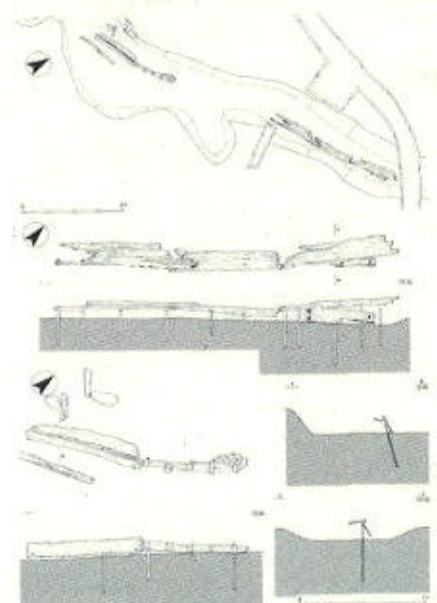
八王子遺跡井泉 SX05 遺物出土状況



導水施設：三重県水衛遺跡



水衛遺跡の木樋出土状況



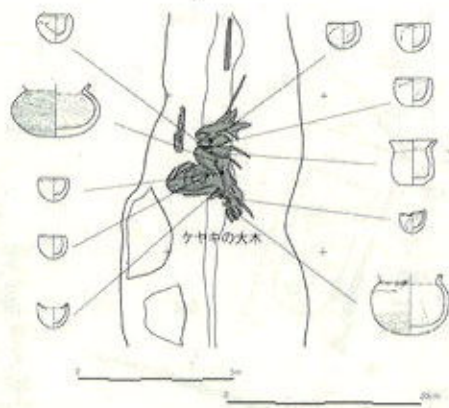
水衛遺跡の導水部



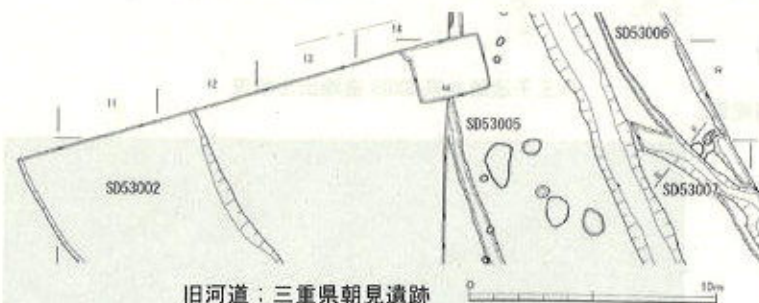
水衛遺跡出土の木樋等



旧河道：愛知県本川遺跡

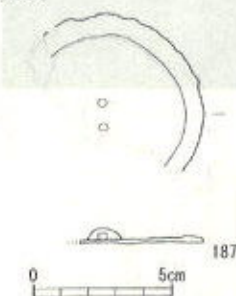


本川遺跡のケヤキ根元の手捏ね土器等

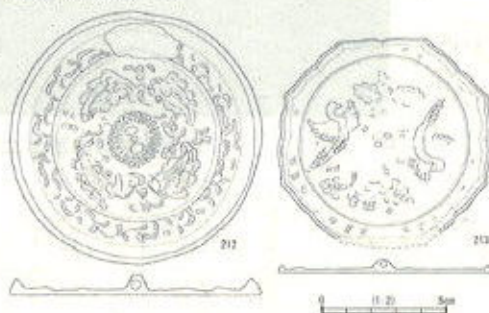


旧河道：三重県朝見遺跡

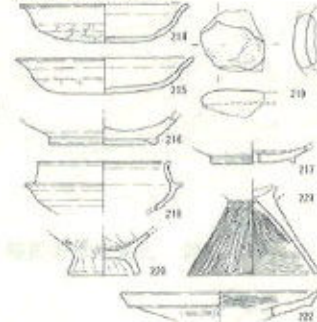
SD53002 最下層
(187)



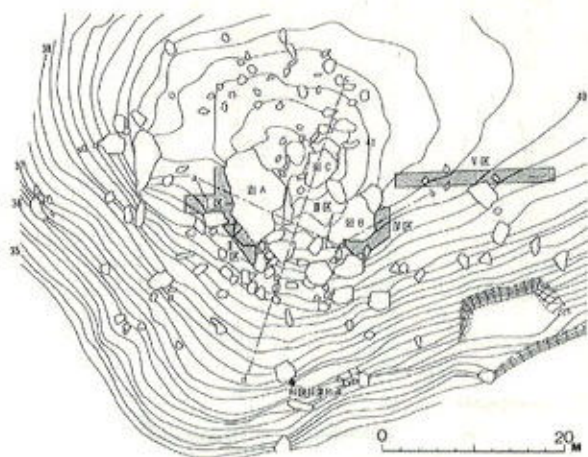
SD53002 最上層 (212・213)



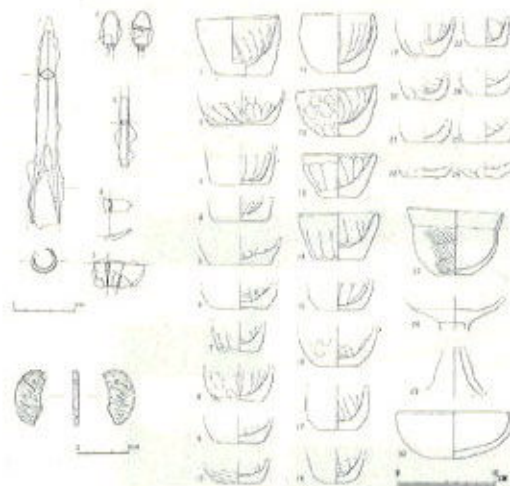
SD53002 上層 (214~233)



朝見遺跡大溝出土の銅鏡等



水分：静岡県天白磐座遺跡の磐座



天白磐座遺跡出土の祭祀遺物

近畿地方中枢部における古墳時代の水のマツリ

青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

はじめに

水は人間にとってきわめて重要な物質である。人間の生命が水に左右されるからである。古墳時代においても、水をめぐり干ばつなどの自然災害に見舞われたり、人間界においても様々な軋轢が生じたことであろう。それをコントロールするために、古墳時代の権力者たちは様々な手段を講じてきたと思われる。その対策の一つが「水のマツリ」であったと考える。本稿では、当時の日本列島の政治中枢が存在した奈良盆地と大阪平野を中心とした近畿地方中枢部（プロト畿内）の事例を概観して、この問題を考えてみたい。

近畿地方中枢部における水のマツリの概要

水のマツリの類型化については、本特集の冒頭でなされているので、ここではその分類に沿って概観していく。ちなみに、当該地域では、顕著な事例は古墳時代前期～中期に偏る傾向がある（図1、表1・2）。

① 湧水点・井戸（湧水）

この類型は大きく i) 単独で土坑状のものと、ii) 導水施設（溝）、方形突出部を伴うもの（導水施設 B 類、青柳 2003）とに分けられる。

i) には古墳時代前期の纏向遺跡、藤江別所遺跡など、中期の和爾・森本遺跡、唐古・鍵遺跡、十六面・薬王寺遺跡など、ii) には古墳時代前期の顕著な事例はなく、中期の南紀寺遺跡、阪原阪戸遺跡、水間遺跡などが挙げられる。

② 河川・流路（流水）

河川・流路の屈曲部周辺に多量の祭祀遺物を投棄する事例がみられ、類例には古墳時代前期の下長遺跡、東紀寺遺跡、小阪合遺跡など、中期の布留遺跡、谷遺跡、斗西遺跡、堂田遺跡、神宮寺遺跡、大日山 I 遺跡、音浦遺跡などが挙げられる。

③ 導水施設（導水施設 A 類、青柳 2003）

この類型は河川・流路の途中に構築された施設で、貯水池、槽付き木樋、覆屋、垣根・柵・堀からなるが、現状ですべて揃う例は南郷大東遺跡例しかない。槽付き木樋と、そこに水を供給するための貯水池あるいは貯水施設が最小単位になろうか。類例には古墳時代前期の服部遺跡、小樋尻遺跡、纏向遺跡など、中期の南郷大東遺跡、大柳生宮ノ前遺跡、神並・西ノ辻遺跡などが挙げられる。なお、前期の貯水池には木製護岸、中期の貯水池には石貼護岸がみられる。

①～③とも出土遺物に共通点が多いが（表1、2）、古墳時代中期に動物遺存体、韓式系土器、製塩土器などが新たに加わること、②に武器・武具が顕著であること、③の前期の事例は掃除が行き届いていることなどを指摘できる。

また、儀礼を執行した場所は、①、②は開放的な場所、③は閉鎖的な場所が考えられる。

なお、上記事例はそれぞれ孤立した儀礼ではなく、河川を介して山—集落域・墓域—農業生産域—外港（海）をつなぐ体系的な儀礼の一環として実施した可能性を考えている。現状では、それらをすべて兼ね備えた事例はないが、たとえば古墳時代中期の葛城地域では、金剛山（王山）—南郷遺跡群・室宮山古墳—葛城川流域の水田（茅原中ノ坊遺跡など）が一体として地域開発がなされた可能性があり（図2・3）、そこに「水のマツリ」が深く関わっていることを想定した（青柳 2023 近刊）。たとえば、

金剛山では①、南郷遺跡群・室宮山古墳では③、葛城川流域の水田域では②の儀礼を執行した可能性を想定できる。このような状況は、布留遺跡でも想定できそうであり、各地で検討すべき課題となりつつある。なお、このような状況は、出雲国風土記から想定されている地域観に近いと思われる(松尾2015)ので、列島の広範囲で形成された地域開発モデルの可能性もある。今後は、その成立時期と背景を考究すべきであろう。そのためには従来、別個に進展していた古墳、集落、生産、祭祀の研究を横断し、相互に有機的な地域像を構築しなければならない。そこに、「水のマツリ」の研究意義があると考える。

おわりに

本稿では十分な検討はできなかったが、石川県での議論も踏まえて、重要な論点が明らかになったと考える。すなわち、従来は「水のマツリ」は特殊な事例として議論される場合が多かったので、個別分断的に議論され、その成果も孤立していたが、それぞれの地域での空間的なレイアウトを考えた時に、実はその儀礼は、山(聖域)、集落域、墓域、生産域、外港という地域を形成する核となる要素をつなぐ、きわめて重要な儀礼であることが分かる。その儀礼の具体像の解明は、まだまだこれからだが、従来のように特殊で孤立した議論にするのではなく、地域の中核に位置付けるような議論にすべきであると提言し、擧筆したい。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2003「導水施設考」『古代学研究』160
青柳泰介 2019「古墳時代の導水施設に使用された槽付き木樋について」『古代学研究』222
青柳泰介 2023(近刊)「布留遺跡と南郷遺跡群～古墳時代中期の奈良盆地の「地域開発拠点」の比較検討～」
『布留遺跡の様相』
国立歴史民俗博物館 1985『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集(共同研究「古代の祭祀と信仰」)
祭祀考古学会 2004『シンポジウム みたび、水辺の祭祀』祭祀考古学会平成16年度奈良大会資料
帝塚山考古学研究所 1997『王権祭祀と水』古墳文化研究部会第100回最終記念シンポジウム資料集
奈良県立橿原考古学研究所 2000『大和木器資料Ⅰ』
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2021『大和の考古学』(常設展示図録)
日本考古学協会三重県実行委員会 1996『シンポジウム1 水辺の祭祀』日本考古学協会1996年度三重大会資料集
東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第2回東日本埋蔵文化財研究会資料集
穂積裕昌 2012『古墳時代の喪送と祭祀』雄山閣
穂積裕昌 2023『大嘗祭の考古学』雄山閣
松尾充品 2015「古代の祭祀空間―『出雲国風土記』にみる地域社会の神と社―」『史林』第98巻第1号

表1・2 参考文献

1. 桜井市教育委員会 1976『纏向』
2. 明石市教育委員会 1996『明石市藤江別所遺跡』
3. 奈良県立橿原考古学研究所 1989『和爾・森本遺跡Ⅱ』
4. 丸山真史・藤田三郎 2014「唐古・鍵遺跡出土の古墳時代中期の馬骨について」『田原本町文化財調査年報』22、田原本町教育委員会
5. 奈良県立橿原考古学研究所 1983「十六面・薬王寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』
6. 奈良市教育委員会 1995「南紀寺遺跡の調査第4次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成6年度』
7. 奈良県立橿原考古学研究所 1993「阪原阪戸遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1992年度』

8. 奈良市教育委員会 2006『県営園場整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ—柚ノ川イモタ・キトラ遺跡 水間遺跡—』
9. 滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの 弥生時代のまつりと社会』
10. 奈良県立橿原考古学研究所 2002『東紀寺遺跡試掘・発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報2001年度』
11. 大阪府立近つ飛鳥博物館 2012『王と首長の神まつり』
12. 埋蔵文化財天理教調査団 1995『布留遺跡三島(里中)地区発掘調査報告書』
13. 奈良県立橿原考古学研究所 1985『谷遺跡 宇陀地方の遺跡調査 大和高原南部地区パイロット事業地内の発掘調査概要—昭和59年度—』『奈良県遺跡調査概報1984年度』
14. 能登川町教育委員会 1993『斗西遺跡(2次調査)』
15. 滋賀県教育委員会ほか 1989『堂田・市子遺跡(2)』
16. 長浜市教育委員会 2004『神宮寺遺跡(1992年)』
17. 和歌山県立紀伊風土記の丘 2022『紀氏、大地を開く』
18. 和歌山県教育委員会 1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
19. 伴野幸一ほか 2021『服部遺跡出土の導水施設の再評価—樹種鑑定と築造年代—』『淡海文化財論叢』第13輯
20. (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2020『小槌尻遺跡第10・11次』
21. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2003『カミによる水のまつり』
22. 奈良県立橿原考古学研究所 2003『南郷遺跡群Ⅲ』
23. 奈良県立橿原考古学研究所 2001『大柳生宮ノ前遺跡発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報2000年度』
24. (財)東大阪市文化財協会ほか 2002『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡調査報告書』

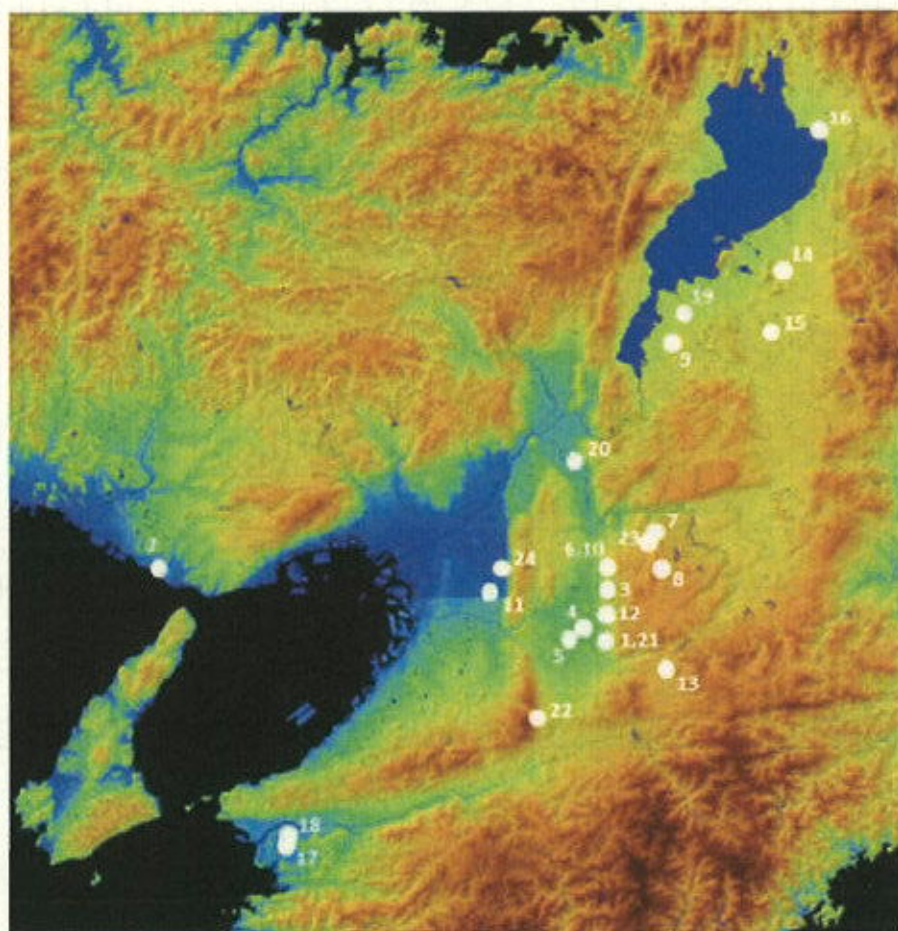


図1 遺跡分布図(番号は表1・2に準拠)

表1 出土遺物一覽

番号	通称名、通称名	関係者	時代	火葬場	馬牛	遺体物	王・妃	外果木土器	手づくぬ土器	灰埋土器	水用品【表々】	正装飾師	主	銅鏡	生産産品形	武器・武具	備考
1	神田、北二宮4	奈良	①-1					○	○		○		○				
2	神田、北二宮5	奈良	①-1				○					金輪石	○			鉄鍬	
3	和歌山、F和歌S05	奈良	①-1	○	○						○						
4	熊鷹・森、SK3101	奈良	①-1		○						○?						
5	十六道・東王寺、西15K01	奈良	①-1	○	○	○		○	○		○						
6	谷配寺、清水点検地蔵	奈良	①-1												土器		
7	飯原坂戸、清水点検地蔵	奈良	①-1														
8	水部、清水点検地蔵	奈良	①-1														
9	下長、旧川瀬	奈良	②					○	○								
10	東配寺、南沢河	奈良	②				○				○						
11	小室会、深川藤	大板	②								○						
12	本館、三島・里中地区2路1	奈良	②		○				○	○	○		○			鉄刀、矢、箭	鳥槍
13	松、渡野	奈良	②	○	○			○	○	○	○		○			銅鏡	刀剣生産 コウヤマキ生産
14	井高、SD01	奈良	②										○				
15	守山、SD2	奈良	②										○				
16	和歌山、SR01	奈良	②		○						○		○				
17	大日山1、谷谷川2	奈良	②	○					○	○	○		○				
18	聖澤、聖澤水路	奈良	②		○?			○	○				○				
19	御膳、清水池	奈良	③										○				鳥形土器
20	小豆原、清水池	奈良	③														土器のみ?
21	加賀、清水池	奈良	③														紫河牛
22	南園大栗、清水池	奈良	③		○				○	○			○				土器のみ?
23	大津生屋ノ前、清水池	奈良	③		○				○	○							土器のみ?
24	津並・西ノ江、清水池	大板	③		○		○			○	○		○				常時有人監視

表2 出土木製品一覽表

[illegible]

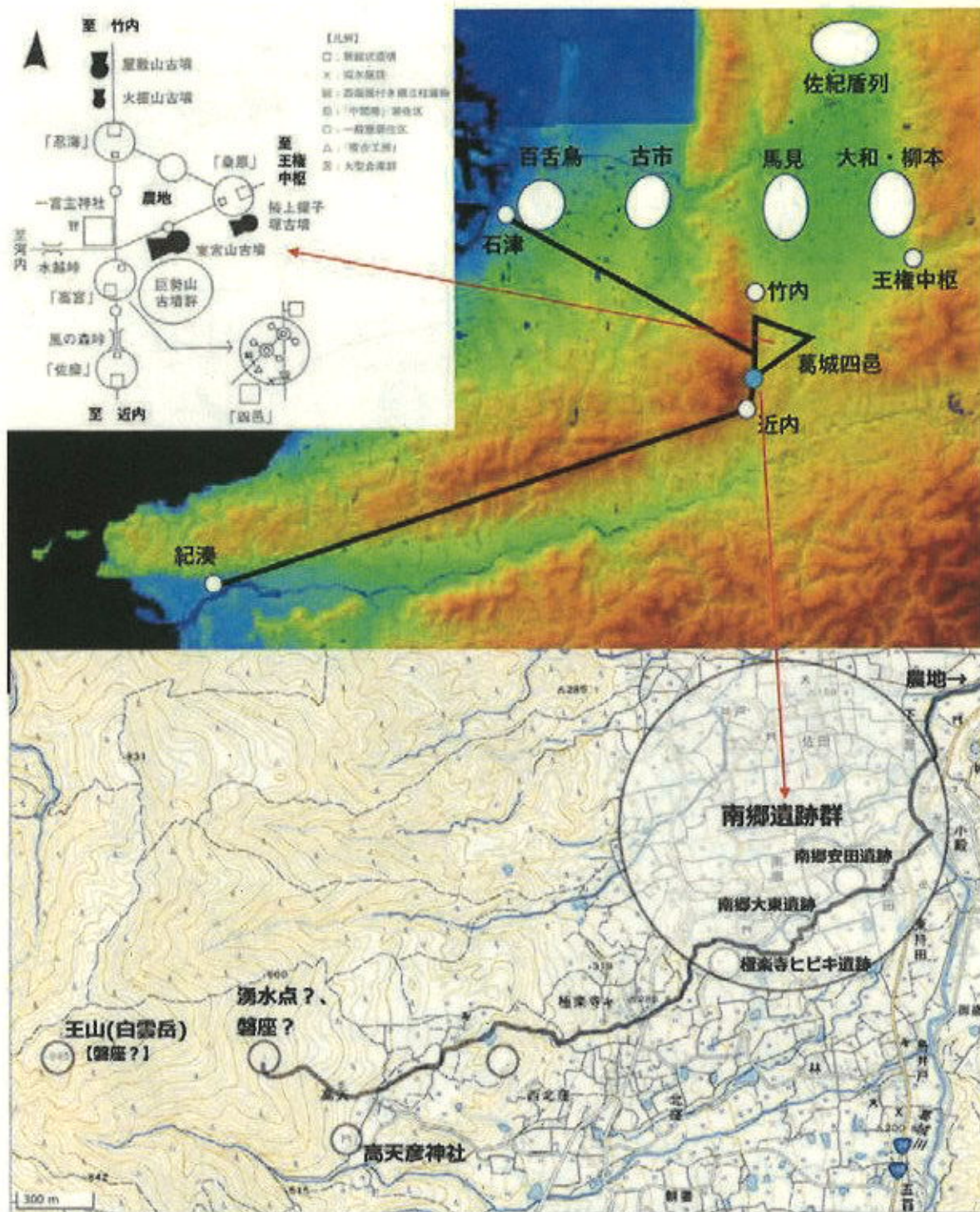


図2 古墳時代中期の葛城地域【左上：葛城四邑、上：葛城の範囲、下：南郷遺跡群周辺】

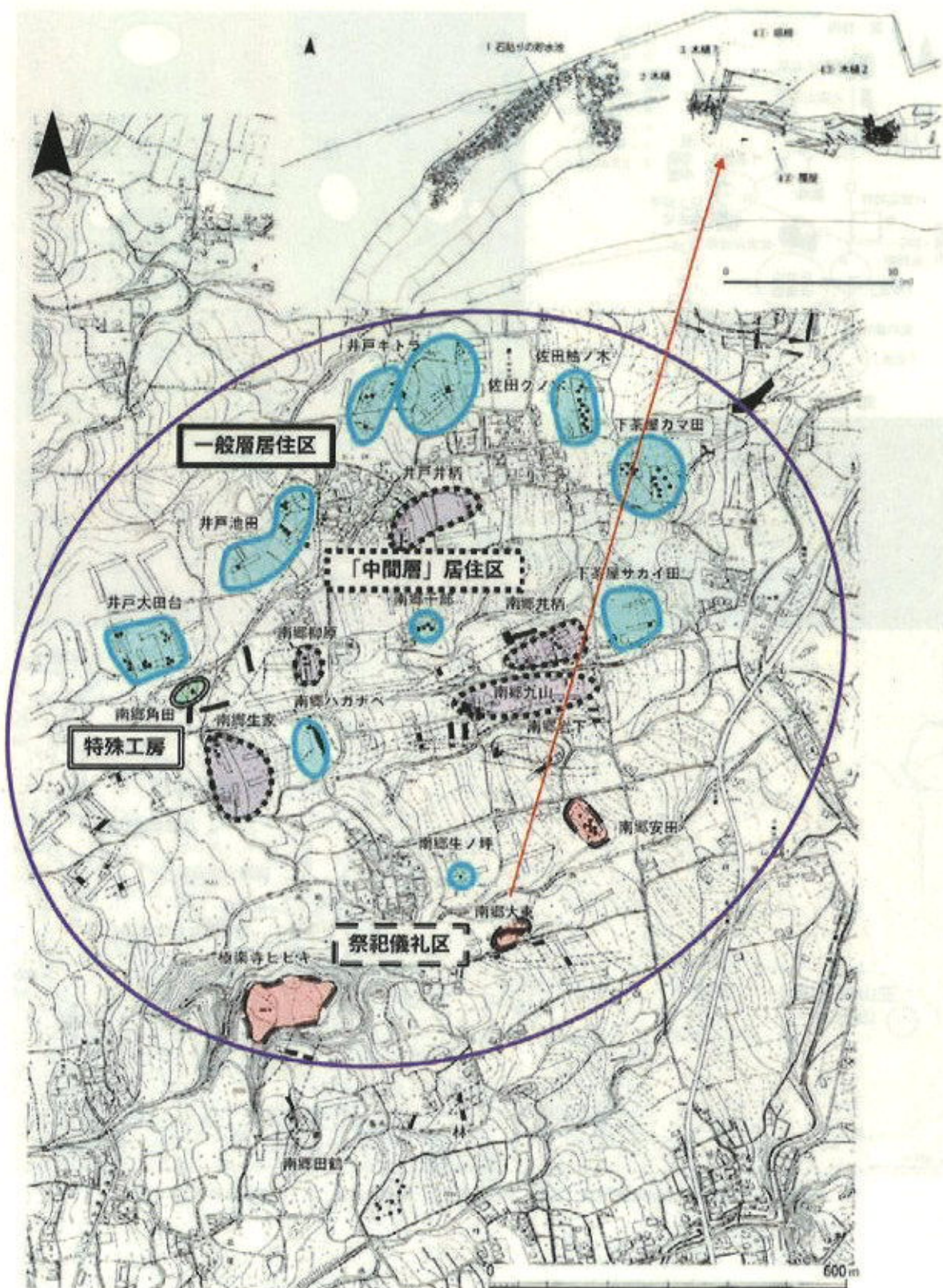


図3 古墳時代中期の南郷遺跡群全体図(右上:南郷大東遺跡の導水施設)

石川県七尾市矢田遺跡出土の木製刀剣装具について

新美 祥人夢

はじめに

矢田遺跡は石川県七尾市万行町～矢田町に所在する弥生時代後期～中世の集落遺跡である。令和3年度調査時の弥生時代後期～古墳時代の溝(SD02・12・07)から多量に出土した木製品は、今年度から整理作業を開始した。それらの木製品の中には、案脚や槽、横槌のミニチュアなどの遺物が出土するのに加え、大小限らず加工途中の材が出土していることから周辺の集落域で木器の生産を行っていたことが窺える。遺物の整理作業を進めるにあたり、新たに刀剣装具の未製品を確認した。筆者の資料調査の結果、当該資料は石川県で初例となる古墳時代の刀剣装具の未製品であるのと同時に列島内においても珍しい遺跡での未製品出土という事を踏まえ、議論の深化を目的とした早期の情報公開が必要と考え、資料の重要性に鑑み、報告書刊行前に資料の紹介を行うこととした。

1. 矢田遺跡および出土遺構の概要

本遺跡は、石川県七尾市矢田町～万行町にかけて所在する沖積平野に位置する弥生時代後期～中世の集落遺跡である。現在の海岸までの距離は約800mであり(古代においては500m以内)、比較的海岸沿いに所在する遺跡であった。また、遺跡の北側には古墳時代後期の前方後円墳である矢田高木森古墳(前方後円・58.2m)、北東側約1kmには古墳時代前期の大型倉庫群が確認された万行遺跡が所在し、古墳時代を通して墓域や集落域として重要な立地であったことがわかる。以下、調査区の年代と遺物について触れる。



図1 矢田遺跡遠景写真(南東から)

B区では、弥生時代後期～古墳時代中期の溝や柱穴を確認した。特筆すべき点は、B-3区の溝（SD 2・12・07）より大量の木製品が出土していることである。SD02・12・07は3時期にまたがる溝が重複した状態で確認された。本溝は古い方からSD07→12→02と堆積する。

上層のSD02は古墳時代中期～後期に存続した溝だと考えられる。須恵器・土師器、移動式カマドが出土したほか多くの木製品も出土している。上面では手づくね土器と滑石製模造品が出土しており、水の祭祀を行っていた可能性が示唆される。

中層のSD12も古墳時代中期の遺物が大部分を占める（註1）。木製刀剣装具も全てこの溝から出土しているものである。これらの他には建築部材、容器類、武器類（形代も含む）、加工途中の木製品、種子などが出土している。

下層のSD07は弥生時代後期～終末期の溝である。土器は上2つの溝に比べ少ないが、木製品が多量に出土しており、それらの中には、祭祀的な遺物も出土している。

2. 資料の観察初見

本稿で紹介するのは刀剣装具と判断した4点である。刀剣装具とは弥生時代～古墳時代の刀剣の把、鞘などの総称であり、本遺跡の資料はいずれも木製である。

【資料1】（図3）

縦20.1cm、横9.9cm、高さ4.8cmを測る。肉眼観察で広葉樹と判断した。本製品は、背面に溝を掘って茎を落とし込むことから、置田雅昭氏・山内紀嗣氏のB類（置田1985a・山内1995.2003）、豊島直博氏の落とし込み式B類（豊島2010）に分類される刀把であることがわかる。なお、背面の溝が掘られる前の段階である。本体の表面の加工はいくつかの工具を使っている痕跡が確認できる。下部には刃先の鋭い小さな工具で端部をはつり整えた痕跡、把合の表面には、長いストロークの加工によって表面をなめらかにしている痕跡など、多くの工具痕を残す。製作に際していくつかの工具を使い分け、精密に作られた製品であることがわかる。また、この段階で仕上げに佩表、佩裏の意識の違いは認められない。

【資料2】（図4）

縦29.1cm、横9.3cm、高さ4.8cmを測る。肉眼観察では、広葉樹だと判断した。上面下面共に切られており、加工痕が残る。断面形状は六角形を呈する。表面は刀子のような工具で突起を削り出したこと、六角形の面取りを行うため、それぞれ刃先の広い工具で幾度も刃を入れた痕跡が見て取れる。資料1とは異なり、上方向と横方向に突出部を持つことから岩本崇氏の分類における有段有突起型（岩本2006）に該当すると思われる。このことから剣把と判断でき、資料1と併せて



図2 B区平面図 (S=1/400)

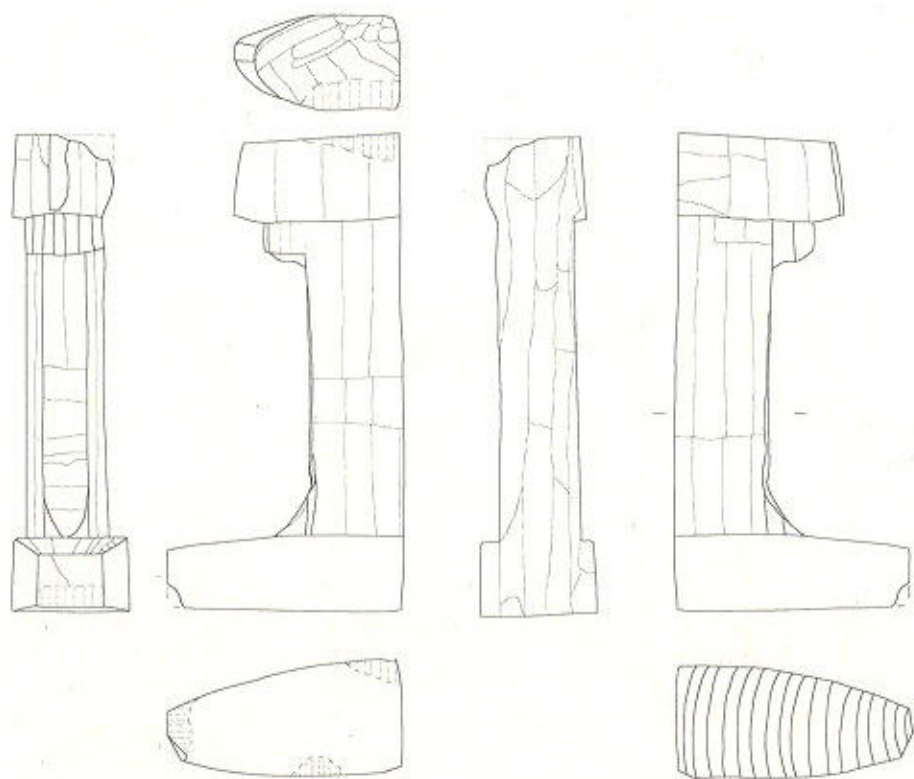


図3 資料1：刀把 (S=1/3)

0 (1:3) 10cm



【資料1】側面



【資料1】背面

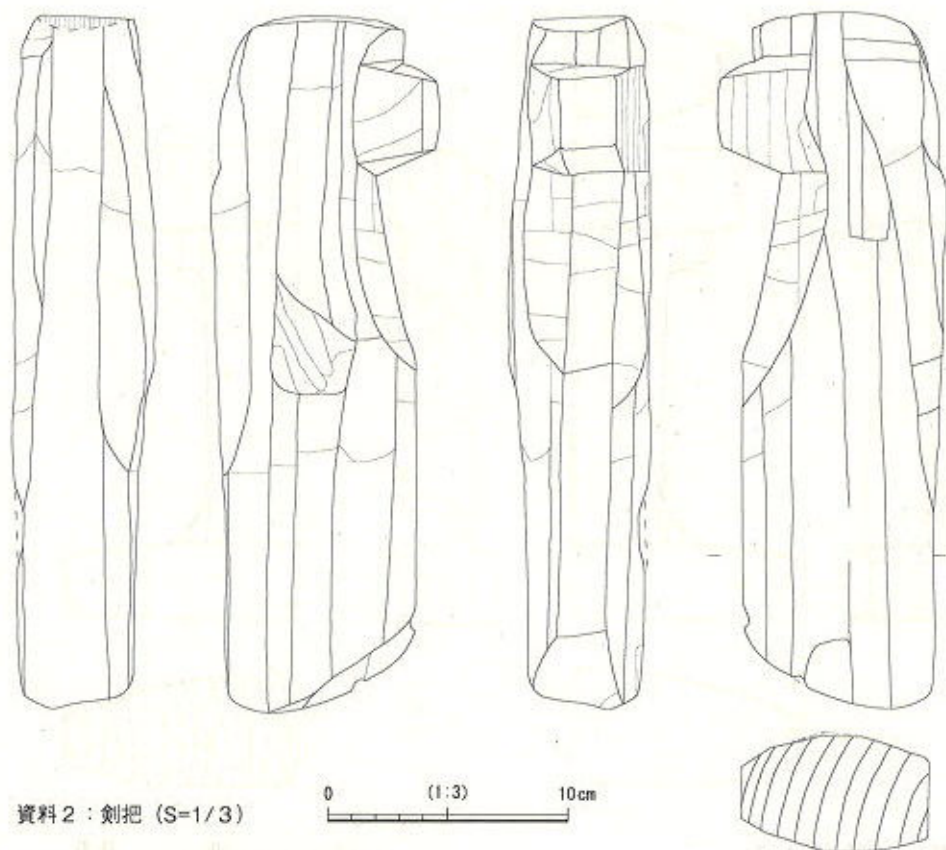


図4 資料2：剣把 (S=1/3)



【資料2】突出部加工痕



【資料2】下面加工痕



【資料2】側面

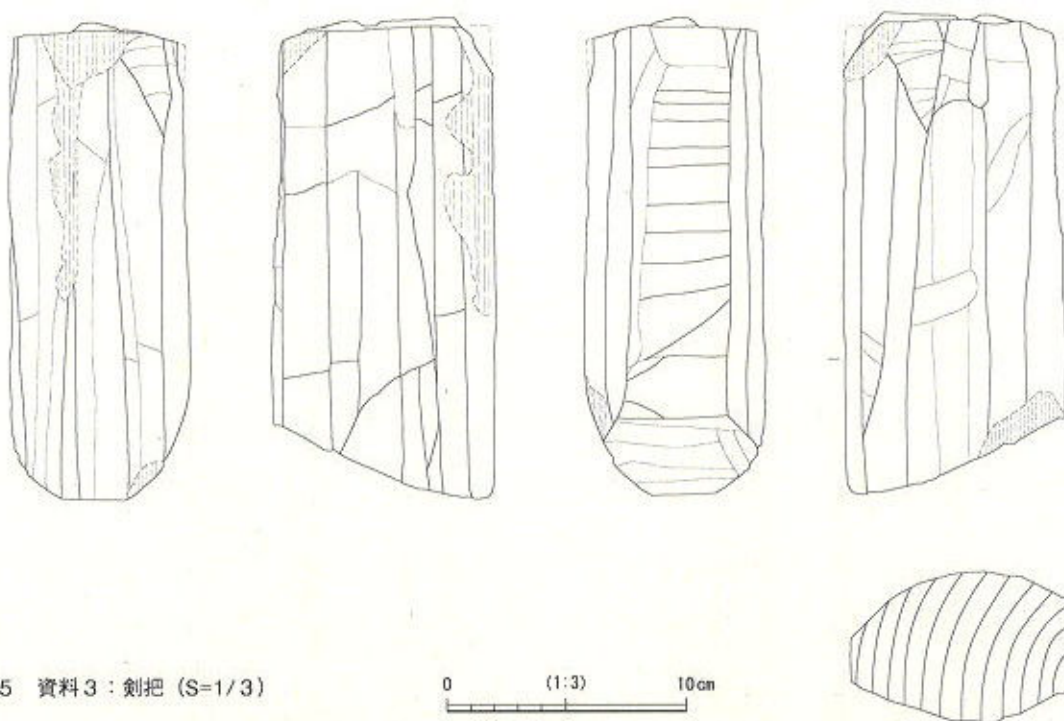


図5 資料3：剣把 (S=1/3)

0 (1:3) 10cm



【資料3】上面突起部



【資料3】背面 (左：上面)



【資料3】側面 (左)

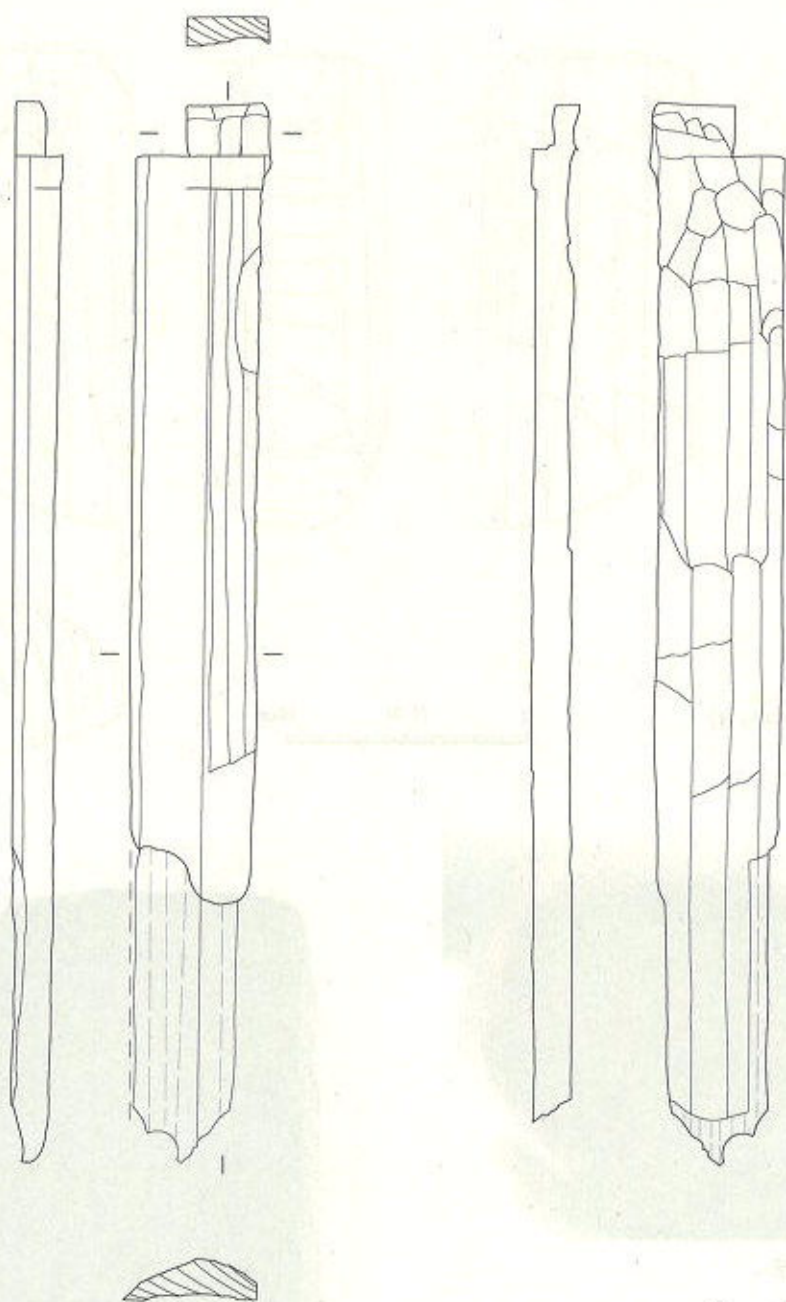


圖6 資料4：劍鞘 (S=1/2)



【資料4】鞘尾側外面



【資料4】鞘尾側內面

刀把と剣把をとともに集落内で製作していたことを示す。

【資料3】(図5)

本製品は、個別の観察では装具かどうかの判断は難しい。縦20.4cm、横9.3cm、高さ6.3cmを測る。肉眼観察では、広葉樹で資料1・2と同一の材だと判断した。上面下面共に手斧の様な工具によって切られており、加工痕が残る。資料2と同様に断面形状がおおむね六角形を呈し、同じく剣把の未製品であると考えられる。製作工程を考えると突出部がまだ完全に削り出されていないことから資料2の前段階にあたるものと思われる。表面には刃先の広い工具で6面それぞれが削り出された痕跡が見られる。だが、資料2に比べ若干小さい点から短剣の把である可能性も考えられる。

【小結】

資料1は刀把、2は剣把、3は断面形状からおそらく剣把と判断した。また肉眼観察の結果、資料1～3は全て広葉樹であり、樹種の同定まではできなかったが、同一樹種であると思われる。

【資料4】(図6)

現状、本遺跡で確認されている唯一の剣鞘である。縦29.4cm、横3.8cm、高さ1.4cmを測る。材は肉眼観察の結果、針葉樹でスギだと思われる。断面形状が杏仁形を呈すること、内側の鞘尾側に剣先を意識して掘った窪みがあることから剣の鞘であることがわかる。鞘尾側の突起の存在から、鞘尾にキャップ状の別装具が取り付け鞘装具I類(置田1985b)だと考えられる。後縁を中心として据えた際に突起がやや左寄りである。内部はやや摩耗していることから本資料は実際に使用されていたものと考えられる。製品表面には刃幅の狭い工具で削った痕跡が見られる。内面鞘尾側には鑿状のもので削られた痕跡がいくつか確認でき、鞘口に近づくにつれ、表面の調整を行った工具よりも刃幅が広く、ストロークの長い工具で整えた痕跡が認められる。

【製品製作の諸段階】

不明な部分も多いが、資料1～3を参照しつつ、木製把装具製作過程について考えてみたい(図7)。

1) 製作工程・工具痕について

製作工程：伐採→半割→木取り(把はいずれも柁目取り)

表面加工：手斧(大型工具)で表面粗削り→ヤリガンナか刀子か鑿(小型道具)で表面をある程度仕上げる→表面磨き(石を用いる?)→製品完成

工具については、表面の加工に使うものは横広でストロークの長いものである共通点が見られる。

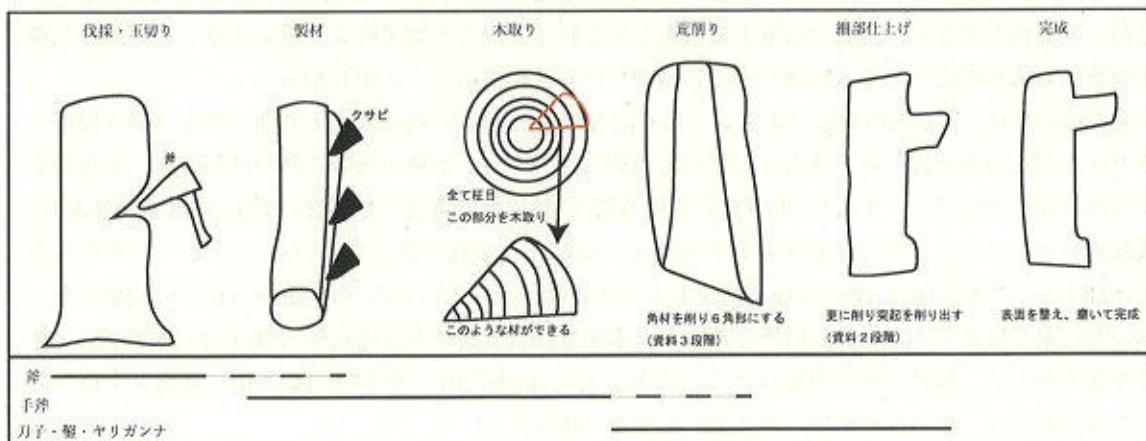


図7 製作工程のイメージ

この特徴から表面を削ぎ落としていく動作は、製品に当てた刃物を引きながらあるいは押しながら表面の調整をするものとして刀子あるいはヤリガンナといった工具が想定できる。また把縁の段を削り出す際も同様に、鑿など上から叩いて削る道具と言うより、刀子あるいはヤリガンナといった上からの圧があまりかからない（削り過ぎにならない）工具を選択したであろうことが窺える（註2）。

3. 資料の位置づけ

以上、前節までは遺跡と資料について概観してきた。本節では、これら資料について若干の考察と位置づけを行いたい。木製刀剣装具は、遺存状態によって大きく左右されるため、未解明な部分も多いが、類似資料の存在から刀把と剣把について言及していきたい。

1) 代表的な資料の紹介

福井県河合寄安遺跡 福井市に所在する古墳時代前期～中期の集落遺跡である。水場遺構（古墳時代中期・TK73～TK216型式期）から木製刀剣装具未製品が出土した。それらの中には有段有突起型B類剣把（岩本2006）、楔形把頭、鞘、鞘尾などが確認され、内一つは全面に黒漆を塗り、赤色顔料で直弧文を施文するものである。刀把にはいずれも潜孔が確認できるが、布留遺跡などで見られる潜孔の穿孔方法と異なる。また、近くに位置する高柳遺跡では剣と思われる鞘の未製品が3点出土している他、鍛冶関連遺構の存在も確認されており、この地域一帯で武器生産が行われていた可能性がある。

静岡県山ノ花遺跡 浜松市に所在する古墳時代中期後半の遺跡である。大溝から大量の木製品が出土した。木製品の中には農耕具、容器類、櫛など様々で、刀剣装具は剣鞘と刀把の出土が確認されている。

奈良県布留遺跡 本遺跡は天理市に所在する木製品、鉄製品の生産などを行っていた複合遺跡である。木製刀剣装具が出土したのは、三島（里山）地区の流路内で、楔形頭部を有する刀把や刀剣鞘、鞘尾装具、剣把等が約60点出土した本遺跡は物部氏の本拠地と考えられており（中久保2018）、畿内政権指揮の下で刀剣装具の生産を行っていた集団の存在が想定される。なお、それら木製刀剣装具の製作開始は5世紀以降である（池田ほか2020）。

県内の事例 古墳時代中期では、畝田・寺中遺跡での出土資料が挙げられる。両遺跡ともに流路での出土で製品である。畝田・寺中遺跡の資料は刀把であり、出土している2点とも材はスギである。形状としては楔形頭部を持つB類（山内1995）と思われる（註3）。

頭部が楔形を呈する大刀把の出現は古墳時代中期初頭にあたり、帯金式甲冑の出現と時を同じくする。背面に切り込みを入れ、そこに茎を落とし込み固定し、把とするものである。中期において広域的に見られ、上限では6世紀前半の古墳への副葬は確認されており、当時期に盛行する代表的な木製刀把との評価ができよう。畿内政権下で武器生産を担っていた布留遺跡より出土することから最先端かつ畿内地域を初現として各地域の古墳に副葬される武器であることがわかる。

剣把の画期は、岩本氏の指摘にあるように有段突起型B類の出現が最大の画期とする（第3段階）。それは上記した帯金式甲冑、畿内系刀把の出現期に該当する。前期中葉の段階で鉄製甲冑、多方向穿孔式の出現などはリンクするが、板甲も方形板革綴式・堅矧板革綴式の2系統の生産、鞘は3系統あり、武装具のセットとして斉一化が図られたとするには様々な型式が乱立している（註4）。その在り方と比較すると中期初頭は、畿内地域を初現とする武装具が斉一的に産出され、畿内政権での武装具セットの成立期と評価できる。この属性を重視し、本稿では岩本氏の有段突起型B類を畿内系剣把（一体式を畿内系Ⅰ式、複数の部材が組み合うものをⅡ式）、山内氏のB類を畿内系刀把（直弧文を持つものを畿内系Ⅰ式、ないものを畿内系Ⅱ式）とする（註5）。

2) 各資料の検討

資料1(刀把)は上記したように、頭部が楔形を呈する大刀の把である。本製品には表面の装飾的な加工は認められない。筆者の畿内系刀把I式である。資料2は有段の存在から剣把であると判断した。断面がおおむね六角形を呈する剣把は現時点では出土例が確認されていないことからおそらくこれからさらに側面を削り込み、側面を整える前段階の資料である。おそらく一木で造り出すものであり、畿内系剣把I式に該当する。資料1と同様に布留遺跡や河合寄安遺跡での生産も行われている。

資料4の剣鞘については、鞘尾に装具が取り付け、鞘装具I類(置田1985b)と考えられる。内面が摩耗していることから使用されていたことが想定される。剣把が出土していることから鞘も本遺跡内で生産されていた可能性が高い。

3) 小結

武器あるいは刀剣装具の生産は畿内政権下において一元的生産が行われた遺物と考えられてきたが、河合寄安遺跡出土資料発見以後、その考え方は徐々に改められていくこととなる。本遺跡出土資料は、その考えを裏付ける新資料となろう。未製品の存在からいずれも本遺跡内で生産されていたと判明した。また、それらの製品は布留遺跡の出土品や副葬品として広く知られる畿内系刀剣装具で、中期では最先端の武装であり、精緻な作りをした製品であることが言及できる。

4. 地方生産にかんしての言及

刀剣装具の地方生産については、橋本達也氏と林大智氏によって言及されている。橋本氏は古墳時代中期の地方遺跡から出土する刀剣装具の未製品について、鍛冶関連遺跡との関係から古墳時代中期には地方で生産されていた可能性を指摘した(橋本2015)。また、林氏は福井県河合寄安遺跡出土資料の中に特異な特徴(潜り孔の穿孔方法)が見られることを指摘し、付近の鞘未製品が出土する高柳遺跡と併せて、この地域一帯で武器生産が行われていた可能性を指摘した(林2013)。

古墳時代中期以降地方の遺跡で出土する刀剣装具未製品について地方生産の可能性を考えてみたい。集落より出土する装具未製品の理解をする背景は、以下の3パターンが想定されよう(註6)。

パターン①刀剣は他地域より入手し、装具のみ集落内で生産する。

例) 奈良県名柄遺跡

パターン②刀剣も自地域で生産し、装具も自地域で生産する。

例) 福井県河合寄安遺跡、奈良県布留遺跡

パターン③刀剣も装具も他地域から入手する。

→(未製品がなく、鍛冶関係の遺跡が近くにないパターン)

例) 現状不明

古墳時代中期の刀装具が出土する遺跡の背景に穂積裕昌氏と岩本氏はこれら刀装具の未製品が出土する集落の特徴として、①大量に木製品が出土すること、②大型建物を伴う居住域が周辺に存在すること、③鍛冶関連遺構の有無を挙げている(穂積2002)。矢田遺跡の場合、今年度の調査で大型建物が周辺にあったことが確認され(註7)、穂積氏の提唱する特徴の①・②を満たしていることになろう。

古墳時代中期以降になると地方の遺跡から刀剣装具の未製品が増えることは、既に様々な研究者によって指摘されている(岩本2006・穂積2002・橋本2015・林2013)。中でも鹿角装刀剣装具を含む刀剣把の生産遺跡は、菊地氏によってまとめられている(図8・表1、菊池2021)。矢田遺跡も含め、全国的に生産遺跡と考えられる資料(未製品出土遺跡)は、古墳時代中期以降の地方において増加する傾向にあるのが認められる。一方、古墳から出土する刀剣装具の検討から中期以前の画期について



図8 刀剣把出土遺跡の分布（菊池 2021 を一部改変）

No.	遺跡名	所在地	装具	備考
1	山王	宮城県多賀城市	把縁	刀子把や鍔、刺突具などの 骨角器と共に木製品生産
2	沢田	福井県おおい町	把縁、鞘尾	製造遺跡
3	飯塚北	大阪府四條畷市	把一体 把縁、鞘尾	鉄器、木製品生産
4	小島東	大阪府堺市	把一体	鉄器生産
5	南郷角田	奈良県御所市	不明	鉄器生産 武器具工房？
6	布留	布留	鞘尾	木製刀装具生産
7	西庄	奈良県天理市	把一体 鞘口、鞘尾	多様な骨角器生産
8	田屋	和歌山県和歌山市	鞘尾	刀子把、木製品生産

No.	遺跡名	所在地	装具	備考
9	河合寄安	福井県福井市	刀剣把 刀剣鞘、鞘 尾	近くに鍛冶関連遺跡あり
10	山ノ花	静岡県浜松市	刀把、刀鞘	木製品出土（未製品含む）
11	穴太A	三重県津市	刀把	
12	矢田	石川県七尾市	刀鞘鞘、鞘 尾	木製品出土（未製品含む）
6	布留	奈良県天理市	刀剣把 刀剣鞘、鞘 尾	木製品出土（未製品含む）
13	名所	奈良県御所市	刀把	装具の全容不明

…鹿角製

…木製

表1 刀剣把生産遺跡の分布（鹿角装も含む 菊池 2021 を一部改変）

は豊島直博氏によって言及されている。豊島氏は、弥生時代終末期から古墳時代中期までの刀装具に三つの画期を設けた（豊島 2022）。

第一画期…落とし込み式 A 類把と鞘口一体式鞘の出現。古墳時代前期前半。

鉄刀の舶載、装具の生産と装着、列島各地へと流通体制が畿内に成立した。

第二画期…多方向穿孔式把と鞘口別材式鞘の出現。古墳時代前期中頃。

短刀の国産化に伴う伝統的装具の復活。堅矧板革綴板甲の出現期であり、威信材の役割があったか。

第三画期…落とし込み式 B 類把の出現。古墳時代中期初頭。

隅切尻・隅扶尻鉄刀、帯金式甲冑の出現ともリンクする。中期畿内政権による軍事力強化の一環。

以上の画期を設け、第二・三画期の背景には武具との連動も認められるとする。

さて、畿内系刀剣装具の地方生産が開始されるこの時期はどのような時期であろうか見ていきたい（図10）。武具の観点から古墳時代中期は「甲冑の世紀」と評される。それは、全国的に鉄製甲冑が爆発的に増加する事に起因する。中でも TK73 型式期は鉄留式板甲の出現期にあたる。鉄留板甲の出現は、塚本敏夫氏が馬具工人の流入によってその技術が列島の甲冑生産に影響を与えたとする説がある（塚本 2003）。板甲研究の視点からは阪口英毅氏によって行われている。阪口氏によると鉄留技法は、為政者の政治的な意図の元に外来系甲冑の生産を目的として渡来甲冑工人が組織されたことを契機に列島内へ流入したものと提唱した（阪口 2008.2019）。

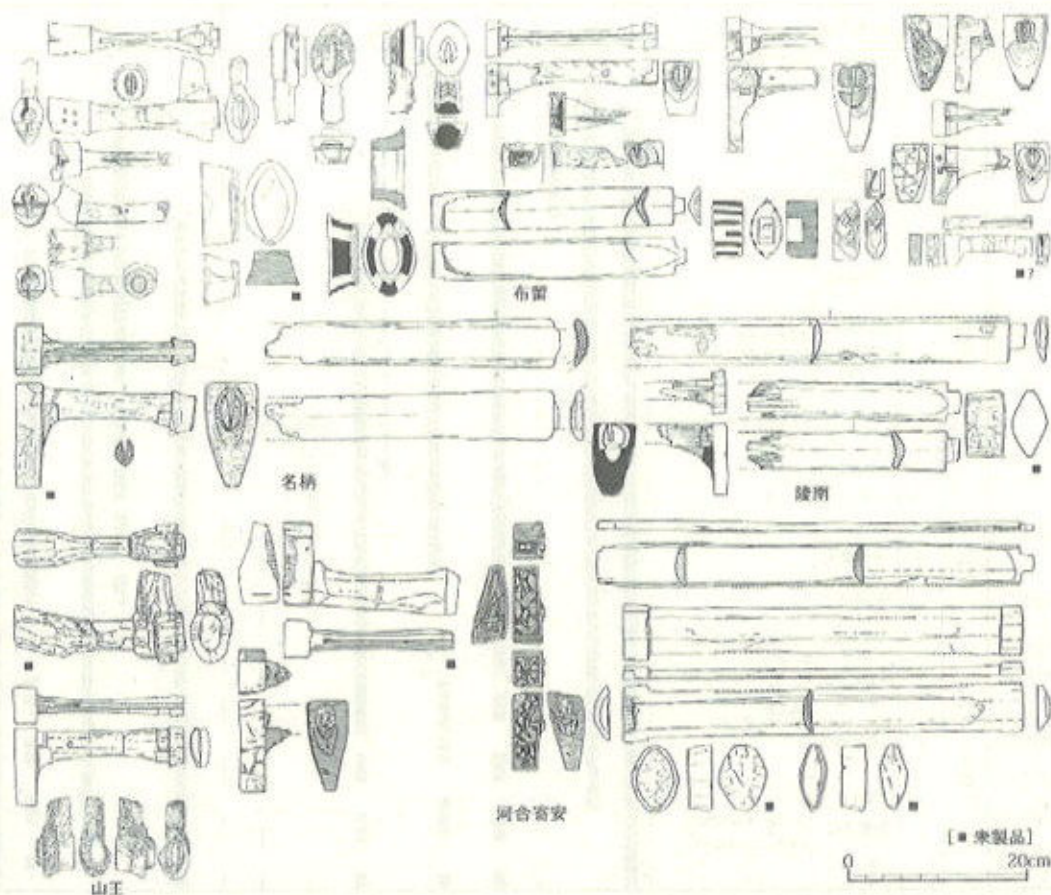


図9 遺跡出土刀剣装具集成 (橋本 2015 より引用)

どちらの説も韓半島からの工人流入が新出の契機になったことを主張するものであり、鋳留技法導入期、つまり TK73 型式期は中央政権内において渡来工人の流入により武装具生産工房に大きな変革がもたらされた時期であった。また、岩本氏の設定する第 4 段階であり (岩本 2006)、畿内系剣把Ⅱ式の出現時期とリンクする。河合寄安遺跡を初現とする畿内系刀剣装具が地方で生産開始期である。

須恵器生産の地方拡散は早い段階では 5 世紀中頃 (ON46 型式期) で確認されており、その拡散のピークは 5 世紀後半～6 世紀前半 (TK23～TM15) と指摘されている (菱田 1996.2007)。早い時期の須恵器生産の地方への工人流入は、5 世紀の中頃から認められる。

倭の手工業生産に韓工人の流入が行われた古墳時代中期という時期は、交流の中で武器生産も伝わったと考えられる。TK73 型式期から中央政権の手工業生産工房に取り込まれた新技術は武装具、須恵器などに列島内で独自の変化を遂げ、地方へ拡散する。それら手工業生産の拡散の中に武器生産も含まれているものと考えられる。

その中でも河合寄安遺跡の事例は地方へ伝わる極めて早い段階である。その要因としては、六呂瀬山・松岡古墳群の存在を背景とした畿内政権との関係の強化が想定される。また、矢田遺跡の須恵器は TK47 型式期以前は陶器産を輸入する事が分かっており (木立 1991)、中期段階でこの地への畿内政権からのヒトの流入は絶えず行われていた事が想定でき、その交流の中で武器生産も伝わったと考えられる。本地域における須恵器窯の出現が TK47 型式期であること、河合寄安遺跡の事例から須恵器の生産技術よりも先行して武器生産が地方に伝播することになる。その背景には、社会的要望の強

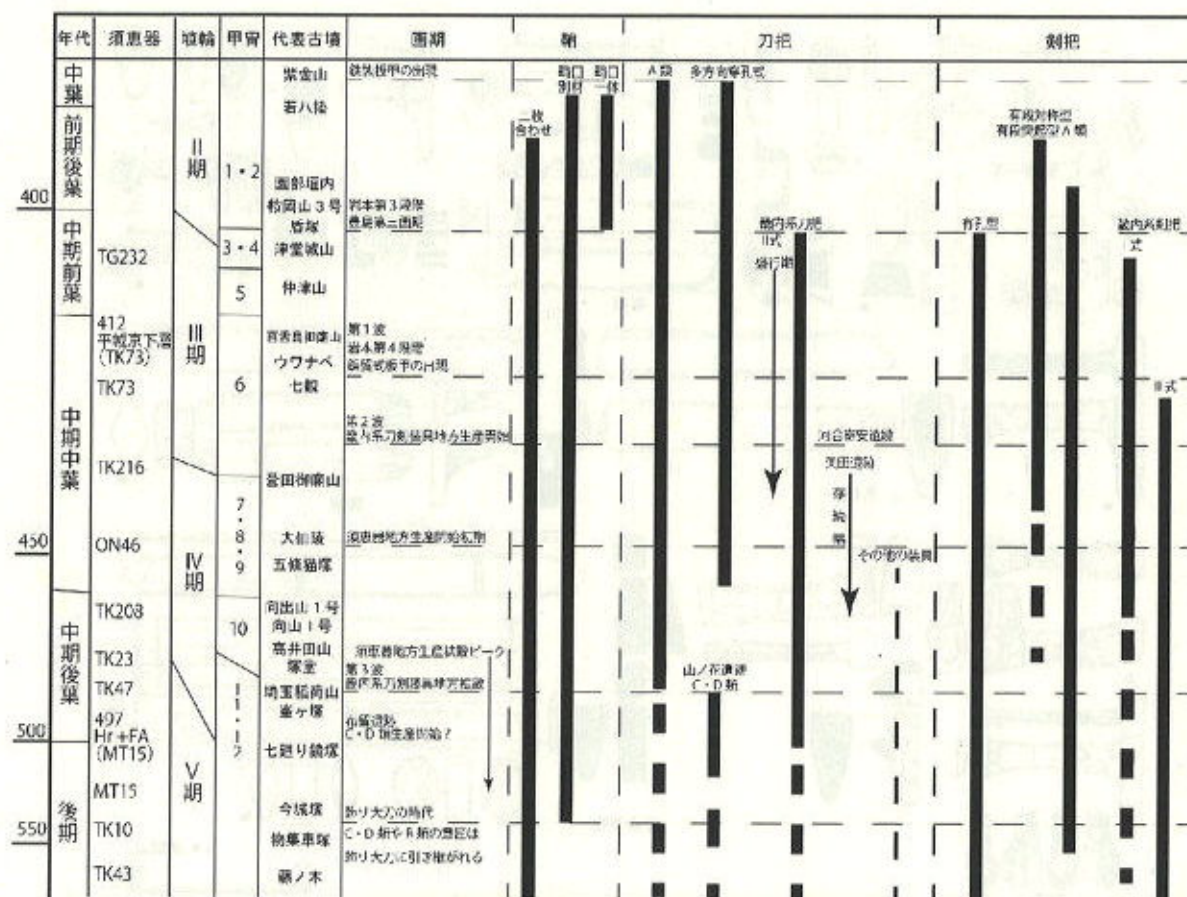


図 10 古墳時代中期における木製刀剣装具の変遷

埴輪は川西 1978、甲冑は川畑 2016 の編年観を参考にした。分類は鞘は豊島 2010、刀把は山内 1995 (註 8)、剣把は岩本 2006 の名称を引用したが、畿内系刀剣装具と名称設定したものはそれぞれの型式名で表した。

かった武器生産技術の共有により畿内政権とより強化な結びつきを図るための政策があった可能性がある。

以上の事から刀剣装具生産における古墳時代中期の画期は以下の 3 つが挙げられる。

第 1 波 (中期初頭) …畿内政権下における畿内系刀剣装具の製作開始時期。帯金式甲冑、隅切尻・隅扶尻鉄刀の出現とリンクする事から畿内政権下での産出された武装具セットの成立期。

第 2 波 (中期中葉) …畿内系刀剣装具の地方生産開始時期。鉾留式板甲の出現とリンク。

第 3 波 (中期後葉) …畿内系刀剣装具の地方生産拡散期。須恵器生産の地方拡散ピーク期ともリンク。

5. 木製刀剣装具からみた矢田遺跡の位置づけ

最後に現状の情報から矢田遺跡の位置付けについて簡単にではあるが述べたい。矢田遺跡は、七尾市域では海に比較的近く準構造船の舷側板や櫓の存在から①海上交通を行う拠点の集落であり、②多量の木製品とそれに伴う加工木や木っ端の出土から木製品を集落内で生産していたこと、③それら木製品の中には畿内系刀剣装具や精巧な作りの案脚などの製品が生産されていたことの以上 3 点から、本遺跡の周辺に居を構えていた人々と中央政権との密接な関係が認められる。弥生時代から集落が営まれ、交通の要所として機能していた可能性が高く、古墳時代中期段階では畿内政権との結びつきが

強くなり、畿内政権下における文化が流入する地域の特徴を見せる。

おわりに

以上、令和3年度の矢田遺跡より出土した木製刀剣装具について概観し、若干の考察を行った。

資料2・3の存在から本遺跡内で、木製品生産の中に畿内系刀剣装具生産が組み込まれていたことが明らかになった。特に資料2・3とした剣把の未製品としてこの段階の資料の存在は全国的に見ても知られていないことから、重要な事例と考えられる。

本遺跡の遺物の整理作業は現在も行なっている最中であり、樹種同定などの化学分析は、今後行う予定である。あくまで本稿は中間報告として行うものとして、具体的様相については、今後遺物の詳細な検討とあわせて報告書の刊行を進めていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、福井市埋蔵文化財センターにはご多忙中にも関わらず、資料調査に対応していただきました。また鈴木静華氏、田中秀弥氏、鶴来航介氏、林大智氏、久田正弘氏、福山博章氏、前田仁暉氏、町田賢一氏、三好孝一氏、森田真史氏、和田龍介氏からは多数のご指導とご鞭撻を頂戴しました。文末に記してお礼申し上げます。

註

- (1) 断言はできない。残存率の高い土器の検討からおそらくTK73～TK208型式期に該当すると思われるが、今後資料整理によって変わる可能性があることを断っておきたい。
- (2) ただし、これらが必ずしも適した工具で加工するとは限らない。工具の制限があるため、生産集落ごとに違う製作工程、工具を使う可能性もあるが、これらの手順が全ての製品に当てはまらない可能性はあろう。
- (3) 実見していないため、断言はできないが、畝田・寺中遺跡より出土した刀把は同時期の資料に比べ、頭部が小さいこと、把の作りが細いこと、材がスギであることなどから、武器形木製品の可能性もある。詳細は後論に譲る。
- (4) 縦刎板革綴板甲と方形板革綴板甲の両立時期であり、その甲がバリエーションに富むのは、先行研究で言及されている。帯金という部材を用いて製作される中期の甲冑は前述の前期甲冑に比べ、齎一的な製品と位置付けられる(阪口2019)。
- (5) 畿内を初現とし各地へ拡散するため、畿内系と名称した。各地の製品に対して、この名称を用いることができるかは今後検討が必要である。本稿では、鞘も含め、畿内系刀剣装具と仮称する。
- (6) それぞれ以下の問題点が挙げられる。これらについては今後深化していきたい。
 - 1 パターン②を証明する条件は、周辺に鍛冶遺跡の存在も必要か。
 - 2 製品に地域色が見られるようになることへの理解は、上記いずれのパターンにおいても在地生産を考えるべきポイントになろうか。
 - 3 ①は周辺で現状鍛冶関係遺構が現状確認できていないだけで、今後発見される可能性もある。
- (7) 矢田遺跡の大型建物は、古墳時代中期のものか具体的な時期についてはまだ判明していない。矢田遺跡が持つ特徴を①・②としたが、今後の調査によって①のみ、あるいは①・②になることも想定される。
- (8) 山内氏の研究は布留遺跡内出土の装具の検討を行ったものであり、それらの分類に含まないものについてはその他の装具として記した。

引用・参考文献

- 池田保信・石田大輔・石田由紀子・太田三喜・岡田憲一・木村理恵・桑原久男・小泉翔太・中窪辰夫・松本洋明・溝口優樹・三好裕太郎・森嶋郎・山本 亮 2020「大和布留遺跡における歴史的景観の復元」『研究紀要』由良大和古代文化研究協会
- 岩本 崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』90-4 日本考古学会：pp.1-35
- 魚津知克 2023「福井県」『令和4年度 環日本海交流史調査研究集会資料「古墳時代の水のマツリ」』公益財団法人石川県埋蔵文化財センター：pp.36-49
- 置田雅昭 1985a「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報』36-3 天理大学学術研究会：pp.39-63
- 置田雅昭 1985b「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』71-1 日本考古学会：pp.23-36
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2:pp.1-70
- 川畑 純 2016『甲冑編年に基づくモノの履歴と扱いの研究』平成24～27年度科学研究費（学術研究助成金（若手研究（B））研究成果報告書（課題番号：24720368）奈良文化財研究所
- 菊池芳朗 2021「古墳時代鹿角製遺物の生産と流通にかんする予察」『磯間岩陰遺跡の研究（考察編）』：pp.175-194
- 木立雅朗 1991「加賀・能登における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会：pp.47-54
- 齋藤大輔 2018「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究』volume14 古代武器研究会：pp.53-72
- 齋藤大輔 2022「布留遺跡刀剣装具研究の余波」『ここまで判った布留遺跡』発表資料集：pp.199-202
- 阪口英毅 2008「いわゆる「鋌留導入期」の評価」『古代武器研究』volume 9 古代武器研究会：pp.39-51
- 阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』（株）同成社
- 白井克也 2003「馬具と短甲による日韓交差編年—日韓古墳編年の並行関係と歴年代—」『土曜考古』第27号 土曜考古研究会：pp.85-114
- 塚本敏夫 2003「古代の日韓鉄器製作技術の交流」『海峡を越える技術の交流』大手前大学史学研究所：pp.61-77
- 土肥富士夫・木立雅朗・津田耕吉 1986『矢田遺跡 万行地区転作定着化推進単園場整備事業に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』七尾市教育委員会
- 豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
- 豊島直博 2022『古代刀剣と国家形成』同成社
- 中久保辰夫 2018「物部氏の権力基盤—近年における布留遺跡の研究結果—」『ここまで判った物部氏—考古学の調査研究成果から—』天理市観光協会：pp.67-80
- 中久保辰夫 2021「須恵器生産と地域社会の展開」『古代学研究』第227号：pp.20-24
- 橋本達也 2015「古墳時代中期の武器・武具生産」『季刊・考古学別冊22 中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』雄山閣：pp.99-110
- 橋本達也 2018「四 木製の武器・武具・馬具」『モノと技術の古代史』吉川弘文館：pp.127-134
- 林 大智 2013「鉄器」『季刊考古学・別冊19 狭と越の古墳時代』雄山閣：pp.127-134
- （財）浜松市文化協会 1998『山ノ花遺跡 木器編』
- 菱田哲郎 1996『須恵器の系譜』歴史発掘10（株）講談社
- 菱田哲郎 2007『古代日本 国家形成の考古学』（株）太洋社
- 福井市文化財保護センター 2011『河合寄安遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会
- 穂積裕昌 2002『一般国道23号中勢道路（ST区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告書（木器編）』三重県埋蔵文化財センター
- 山内花緒・新美祥人夢 2022「矢田遺跡」『石川県文化財情報』第47号：pp.55-66
- 山内紀嗣 1995「出土木製刀剣装具について」『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教訓査団：pp.394-398
- 山内紀嗣 2003「木製装具からみた大刀生産」『鉄器研究の方向性を探る—刀剣研究をケーススタディとして—』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.165-176

新崎式と船元式の関係について

久田正弘

1. はじめに

能美市宮竹庄が屋敷C遺跡で新崎式と船元式が遺構で共存しており、船元・里木式土器様式第2様式～第3様式b（泉1988）に比定された（布尾ほか1999）。今年度、遺物再整理中に庄が屋敷C遺跡の土器に船元Ⅰ・Ⅱ式のメモや未報告資料を確認したので再検討を行う。

2. 調査概要

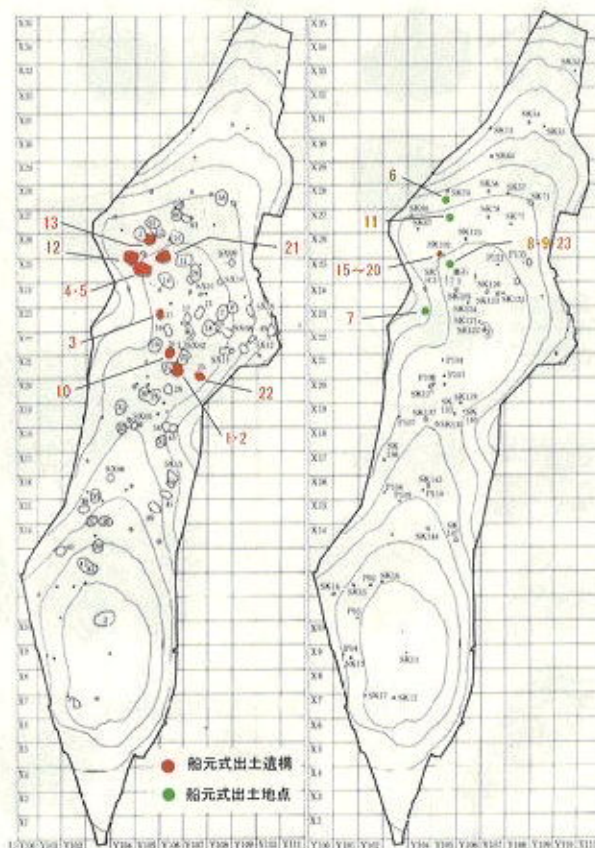
遺跡は、石川県南加賀地方の能美市（旧辰口町）宮竹地内（第1・2図）の丘陵部に立地し、旧石器時代～平安時代（10世紀代）の遺跡であり、縄文時代中期前半期が中心である。船元式土器は北地区・中央地区で遺構を中心に包含層でも出土している（第3図）。



第1図 能美市の位置



第2図 庄が屋敷C遺跡の位置(1/5万)

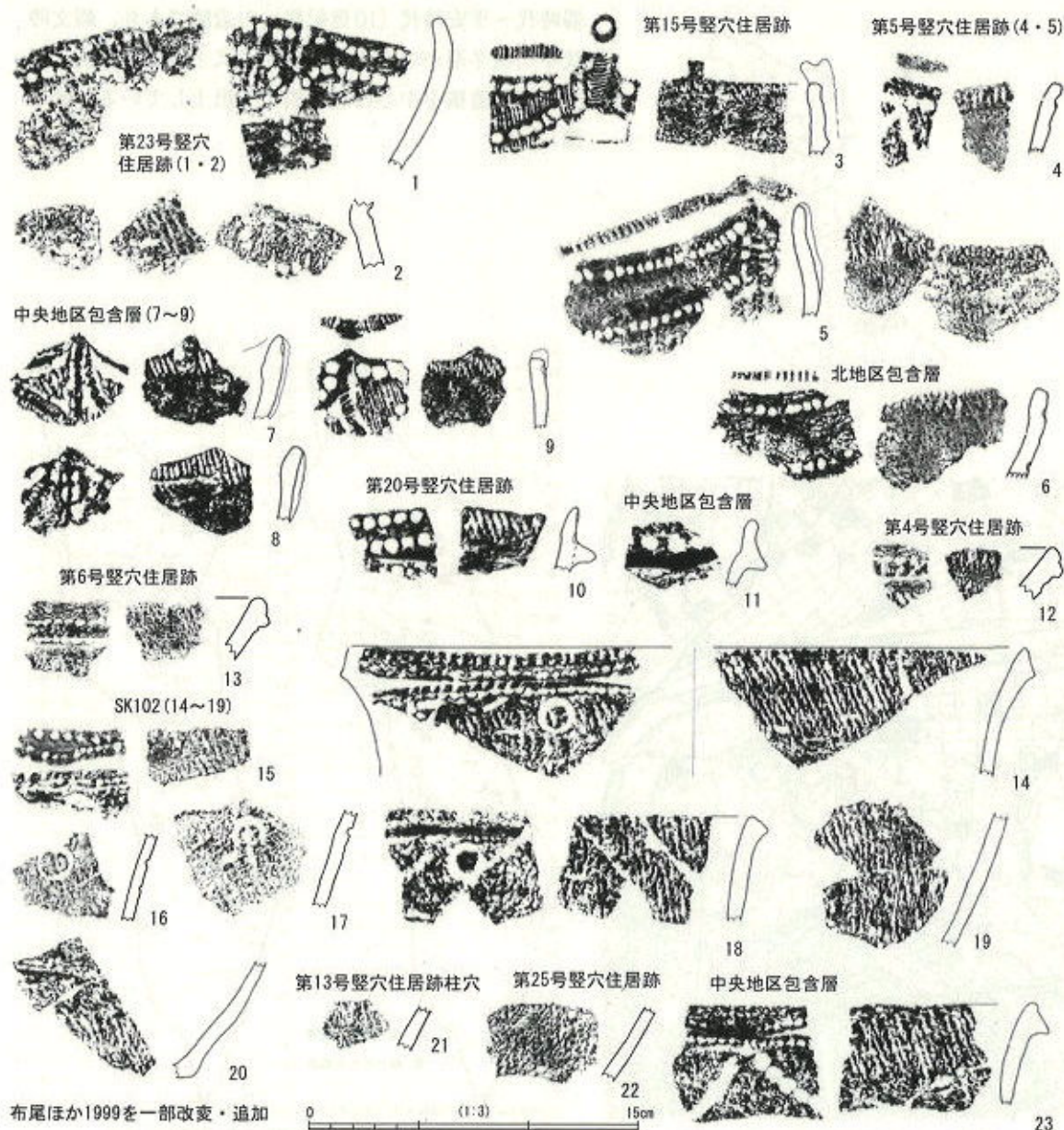


第3図 庄が屋敷C遺跡の船元式出土地点

3. 庄が屋敷C遺跡の船元式について

第4図1～23は、布尾ほか1999の一部修正と追加実測した船元式であり、SK102には未実測の胴部破片が存在する。1～23は石英基調で、大粒の石英・長石を含んでおり、在地の流紋岩基調の土器群とは異なるので、他地域からの搬入土器と思われる。

1・2は第23号竪穴住居跡出土の同一個体と思われる、表面がやや荒れている。1の拓本右側にある縦方向の割れに沿って、低い隆起線が縦にある。円形刺突文が施され、1の下端と2の上半には、頸部の屈強があり、キャリパー器形である。2は撚糸に円形刺突文を持つようである。3は第15号竪穴住居跡出土で口縁部に沿って低い隆起線と円形刺突文が巡る。口縁部突起には巻き貝の先端を回転させたような円形刺突文が入り、他の円形刺突文も同じような回転痕と段が確認された。隆起線と口唇部と口縁部突起には半截竹管による刻みを入れる。口縁部突起には下側から上に施文する。外面には撚糸文、内面上半には半截竹管文を施文するようである。4～6は同一個体であり、外面は剥離が目立つ。



第4図 庄が屋敷C遺跡の船元式土器

4・5は第5号竪穴住居跡出土で、6は包含層出土である。円形刺突文は左回りで施文され、5の下側の隆線は不明であるが、波頂部の縦隆線は半截竹管で下側から刻みを施文する。4下側の沈線内にも円形刺突文が施されている。口唇部には半截竹管で刻み、内面には燃糸文を施すようである。7～9は中央地区包含層出土であり、7・8は同一個体と思われる。7・8の低い縦の隆線には上から下に半截竹管の刻みが施され、円形刺突文は半截竹管の背を左回りに押し引きしているようである。内面上半には面を持たせ、燃糸文を施文する。9は低い隆線に上から下に半截竹管の刻みを入れ、円形刺突文は（巻き貝の先端による）回転痕と段が確認される。口唇部には、半截竹管の左回りの刻みを持ち、内面上半には燃糸文を持つ。10は第20号竪穴住居跡出土であり、少し口縁が波状になる。円形刺突文は左回りに施文され、口縁部下の隆線は左側から右側に高くなっていく。内面には燃糸文が施文される。11は中央地区包含層出土で表面の剥離が多く、円形刺突文しか確認されない。隆線は左右が低くて中央部が高い。

12～23は出土遺構が異なるが、同一個体と思われる。12は第4号竪穴住居跡、13は第6号竪穴住居跡、14～20はSK102出土、21は第13号竪穴住居跡、22は第25号竪穴住居跡、23は包含層出土であり、SK102には胴部破片が他に存在する。口縁部に粘土紐で隆線を作り出し、左回りに半截竹管で、隆線の上下を作り出す。口唇部は半截竹管を左回りに施文する。14・16・17には大きな円形文を持ち、14・15・23は口縁部外面の一部が少し厚く飛び出る。14・18・23は内面の燃糸文は、3～10よりも下側にまで施文される。円形押し引き文は14の左下と23の三角形状文に施文される。20の上側はケズリである。

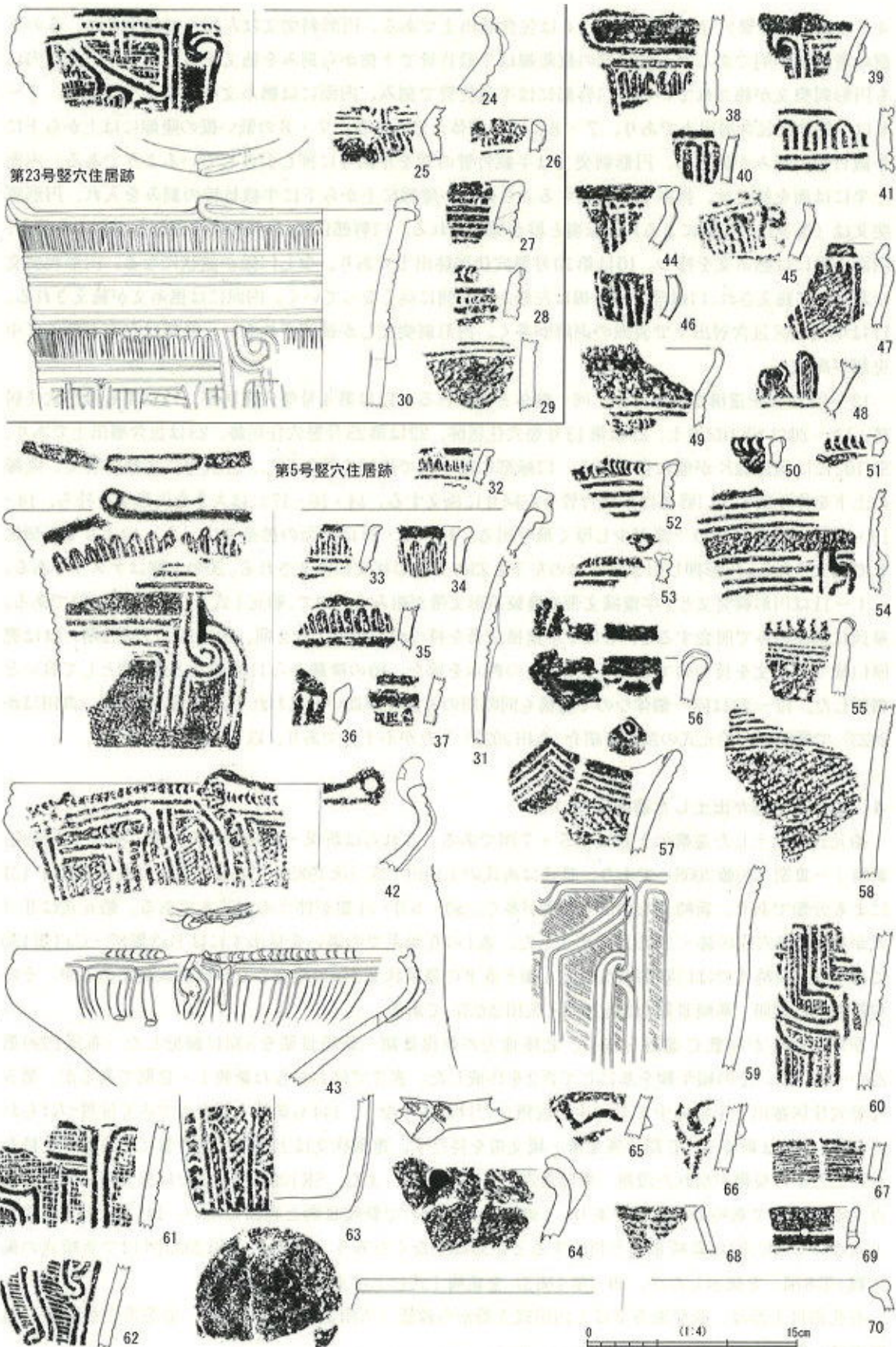
1～11は円形刺突文とI字篋描文帯や連続爪形文帯が組み合うので、船元I式2・3期（泉2008）である。泉氏に図面のみで照会すると、3はI字篋描文帯を持つので船元I式2期、10は船元I式3期、14は肥厚口縁で円形文を持つので船元II式1期との教示を得た。10の隆線から11も船元I式3期として良いと判断した。12～23は同一個体なので遺構も同時期の可能性が高いと思われる。『真脇遺跡Ⅲ』（高田ほか2023）で新崎式と船元式の関係を紹介（久田2023）したが不十分であり、以下で検討したい。

4. 船元式土器が出土した遺構について

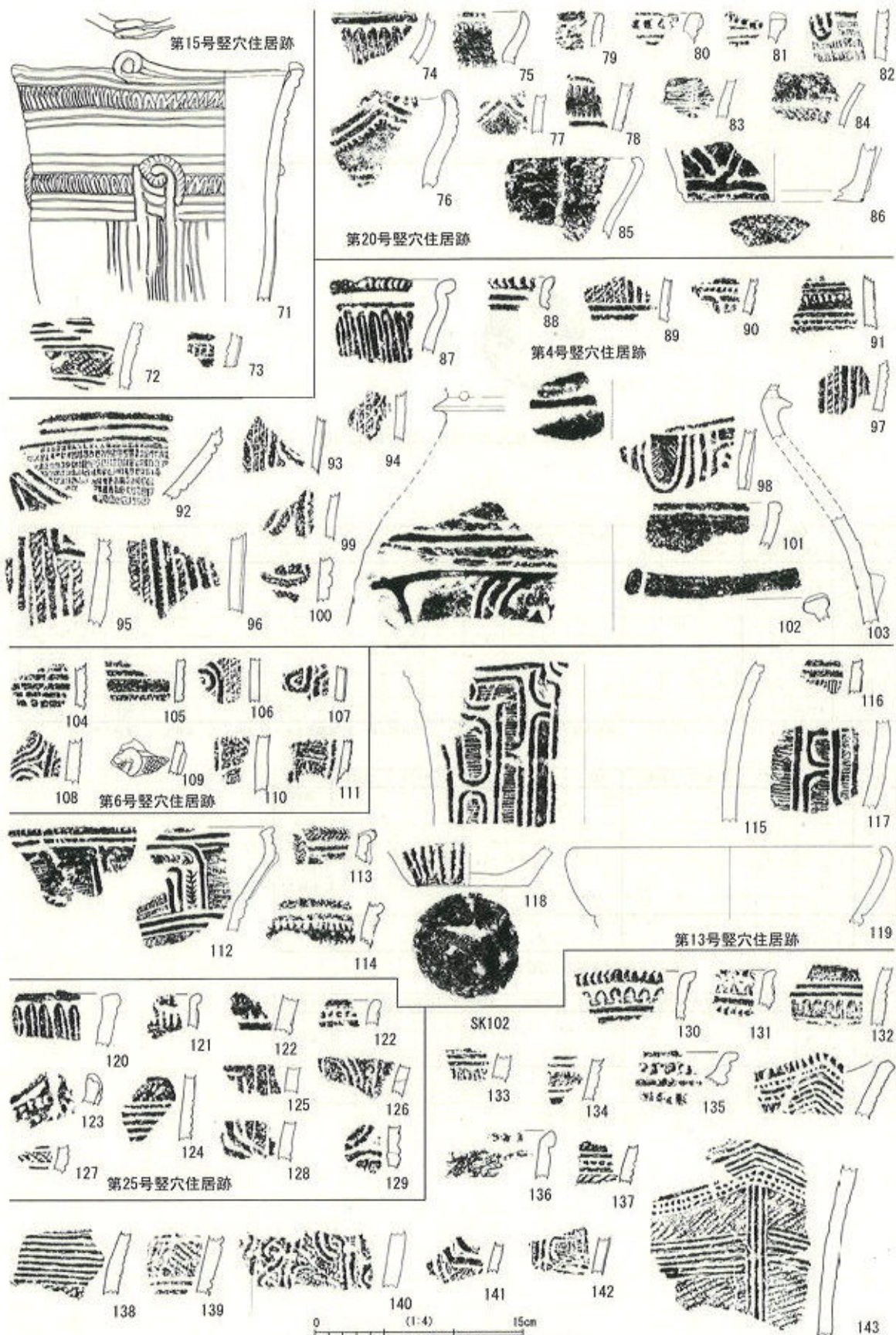
船元式が出土した遺構の土器は第5～7図である。これらは新保・新崎様式の後半：第5～7様式（新崎I～III期（加藤2008）であり、III式は南氏の上山田I式（南1985）である。表1は久田2023 P 131による分類であり、新崎式なのでb3類が多く、a0・b0・a1類が伴うのが基本である。船元式はII-1式が第4号竪穴住居跡～SK102で出土した。表1の在地系での違いを見出すにはBa3類87・Ca3類130であろう。新崎式では口唇部の爪形文a類と直下の蓮華状文3類は組合わないのが規範であるが、その規範崩れた段階：新崎III期（加藤2008・久田2023）である。

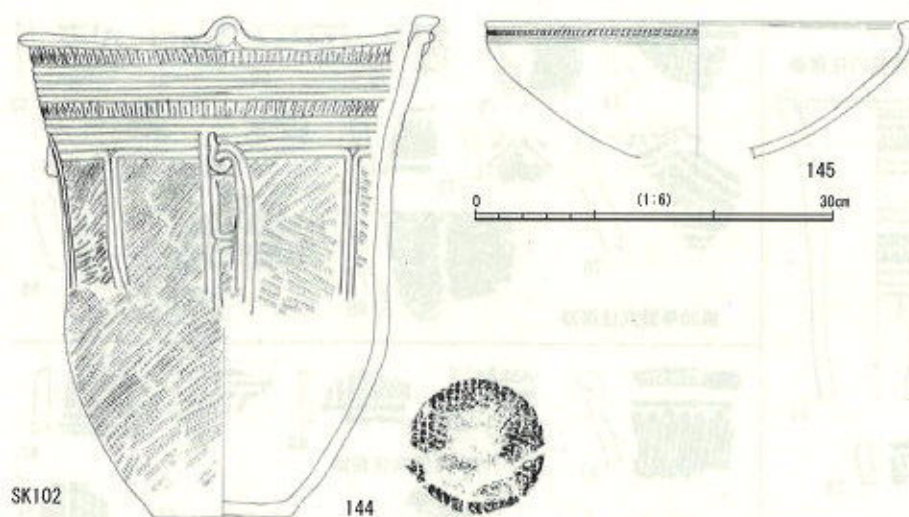
布尾氏は庄が屋敷C遺跡を基に、北陸地方の新保III期～新崎III期を5期に細分した（布尾1999第276～281図）。その編年観を基にして表2を作成した。表2ではおおむね新崎I～III期であるが、第5号竪穴住居跡出土土器の中で42（中平段階）だけが古くなり、144も新崎I期なので古く位置づけられている。144は新崎I・II期の無文帯・縄文帯を持たず、蓮華状文は上側の半截竹管による刻みを持たないことから規範が崩れた段階（新崎III期）と判断した。また、SK102出土の132は無文帯に刻み目列点文があるので新崎II・III期であり、130はCa3類なので新崎III期と判断したい。144などは船元II-1式なのでSK102は新崎III期と判断すると矛盾は少なくなろう（表3）。久田2023図12で新崎式の編年観（第8図）を提示したが、29（第4図3）を新崎I式に上げるべきであった。

有孔罌付土器は、能登地方では上山田式土器から確認（久田2023）されるが、能美市庄が屋敷C遺跡では、新崎II式以降に確認される。



第5図 船元式が出土した遺構の土器1





第7図 船元式が出土した遺構の土器3

遺構名	船元式		B類キャリバー								C類バケツ								有孔銅	新崎
	番号	時期	a0	a1	a2	a3	b0	b1	b2	b3	a0	a1	a2	a3	b0	b1	b2	b3		
23号壁穴	1・2	I-2・3					24					28			27			30		I・II
5号壁穴	4・5	I-2・3	42・43					44			53	50~52			57			31~34	69	I・II
15号壁穴	3	I-2																71		II・III
20号壁穴	10	I-3		76						74	80・81								86	II・III
4号壁穴	12	II-1				87					88								103	III
13号壁穴	21	II-1?	112								113									III
25号壁穴	22	II-1?	123												122			120 121		II・III
SK102	14~20	II-1						135				143		130				131 144		III

凡例 器形=B:キャリバー形・C:バケツ形 口唇部文様=a:爪形文・b:無文 口縁部文様=0:直線文のみ・1:爪形文・2:軌軸文・3:蓮華状文

時期	23壁穴	5壁穴	15壁穴	20壁穴	4壁穴	6壁穴	13壁穴	25壁穴	SK102	時期
I										徳前
2a										中平
2b		42								
3a		7								
3b	30	31・57	72						144	新崎I
4	24			76						新崎II
5							112・113			新崎III
船元式	1・2 I-2・3	4・5 I-2・3	3 I-2	10 I-3	12 II-1	13 II-1	21 II-1?	22 II-1?	14~20 II-1	

表2 布尾1999の編年観

時期	23壁穴	5壁穴	15壁穴	20壁穴	4壁穴	6壁穴	13壁穴	25壁穴	SK102	有孔銅
新崎I	30	31								
新崎II	24	39	71	76						69・86
新崎III				74?	87		112・113	120・122	130・144	103
船元式	1・2 I-2・3	4・5 I-2・3	3 I-2	10 I-3	12 II-1	13 II-1	21 II-1?	22 II-1?	14~20 II-1	

表3 編年観

5. 修正図面の紹介

第9図1は能美市宮竹庄が屋敷B遺跡（西野ほか1993P138）付図680であり、接合した痕跡があり、胴部上半以上の同一個体を確認したので、1を復元した。1は上半部をループ状文、下半部はナデによる無文地に逆C字状の爪形刺突文を多段に施し、尖底（681）と思われる。文様から、布目式・新谷式土器の新2段階（小熊2016）と判断したい。

第9図2・3は能登町真脇遺跡出土であり、史跡整備に伴う発掘調査報告書を刊行した（高田ほか2022・2023）。筆者は『真脇遺跡Ⅱ』では概要報告書の実測図を一部修正したが不十分であった。『真脇遺跡Ⅲ』では14の平縁口縁を波状口縁と文字のみで修正し、ここで修正図面を提示する。15は頸部の半隆起線文が斜めになっていたが、頸部の半隆起線が平行であり、ここで修正図面を提示する。

6. まとめ

真脇遺跡の総括編作成中に、庄が屋敷C遺跡の船元式土器を再確認し、それを久田2023図12（第8図）には生かしきれなかった。また、鷹島式～船元式と新保式～新崎式との関係を明らかにする課題は残ったままである。今回、当センターの再整理を庄が屋敷C遺跡で行った際に船元式だけに注目し、未報告資料を確認したので再検討を行った。また、修正した縄文土器の図面を紹介した。荒木智子、岡田憲一、泉 拓良、高田秀樹、千葉 豊、山崎嘉久氏の協力を得た。

参考文献

- 泉 拓良 1988 「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観3 中期2』小学館
- 泉 拓良 2008 「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 小熊博史 2008 「布目式・新谷式」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 加藤三千雄 2008 「新保式・新崎式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 高田秀樹ほか 2022『真脇遺跡Ⅱ』能登町教育委員会・真脇遺跡調査団
- 高田秀樹ほか 2023『真脇遺跡Ⅲ』能登町教育委員会・真脇遺跡調査団
- 西野秀和ほか 1993 「能美丘陵東遺跡群Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和ほか 1998 「能美丘陵東遺跡群Ⅲ」石川県立埋蔵文化財センター
- 布尾和史 1999 「縄文中期庄が屋敷C遺跡平行期土器群の概観」『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 布尾和史ほか 1999 「能美丘陵東遺跡群Ⅳ」（財）石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2023 「第1～19群土器」『真脇遺跡Ⅲ』能登町教育委員会・真脇遺跡調査団
- 南 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の編年 他9編」転計書房

弥生時代中期前半の北陸と長野の関係

久田正弘

1. はじめに

筆者は、1991年6月7日長野県大町市で開催された「弥生土器を語る会」で未報告資料の中に北陸系土器を確認し、1999年2月13・14日に開催された『長野県の弥生土器編年シンポジウム』で「大町市来見原遺跡に北陸からの搬入土器がある」こと話した。その際に原稿を依頼されて、文字のみで紹介した（久田1999）。今年4月に星野宙也氏から「松本盆地の中期前半土器検討会」の開催を知って参加し、その際の観察結果を紹介する。

2. 大町市来見原遺跡の北陸系土器

第1図1は、久田1999で文字だけで紹介した北陸から搬入された土器である。器形は緩く張る胴部に頸部も緩くしまる。内傾接合で内面は丁寧なヨコナデだが、接合痕を一部残す。外面は胴部下半に条痕のような太いハケを少し残すが、全体的にナデが入る。ナデ後に口縁部から波状文+直線文を3段配し、無文帯のヨコナデの下に直線文+波状文を2段配す。波状文は左回りで、口縁部内面には1本の波状文が一部見える。櫛描文は深くて断面の底は丸い。中期中葉の櫛描文とは異なり、胴部下半の条痕のようなハケと同一工具の可能性があろう。胎土には、長石主体で石英、シャームット、茶色砂粒、海綿骨針を含む。1cの細長い白いものが海綿骨針である。

3. 大町市来見原遺跡の弥生土器

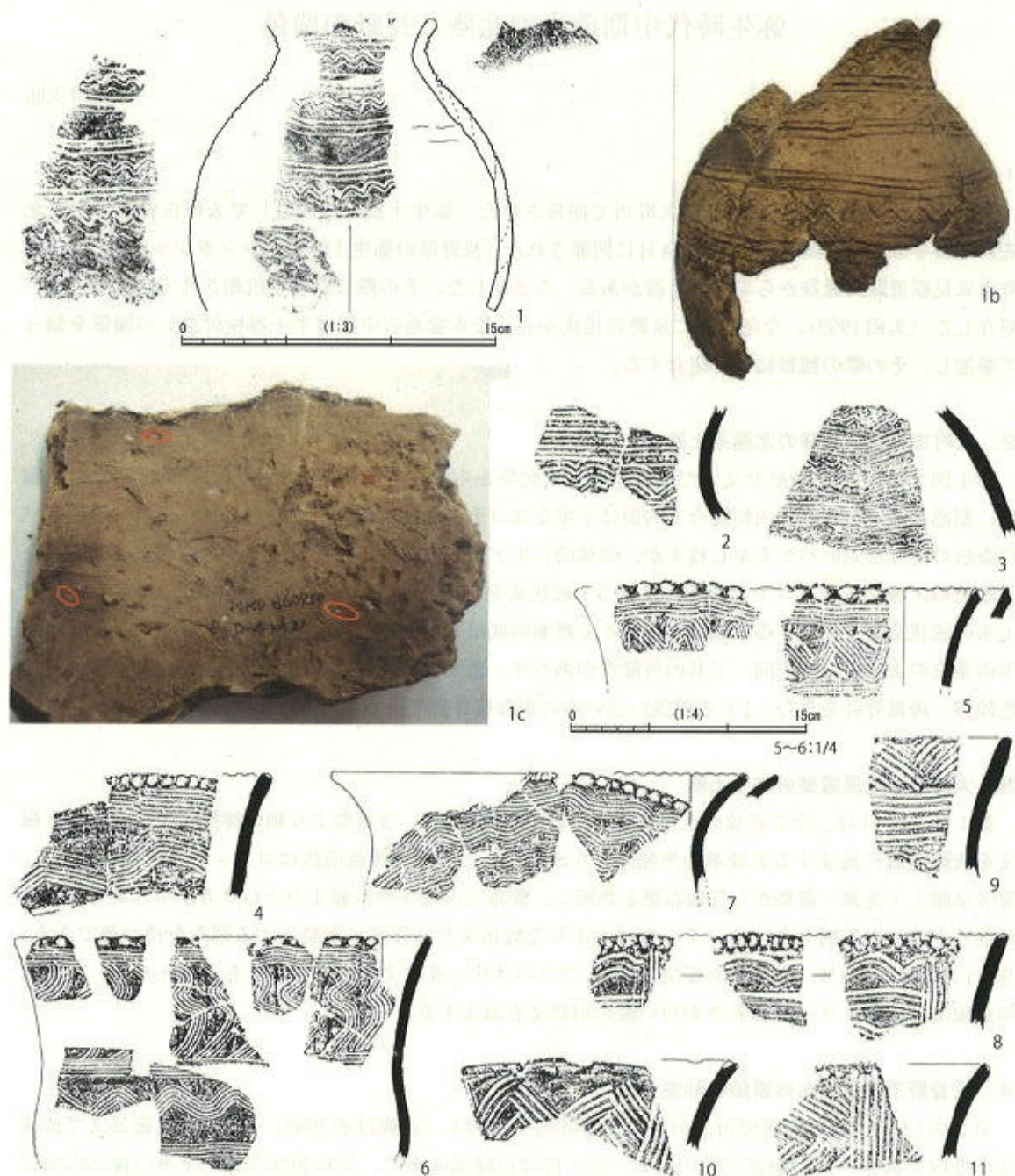
第1図2～11は、全て在地の土器である（島田ほか1988）。3は他より細い櫛描文で波状文+直線文を複帯構成に施文する北陸系の無頸壺（在地製作）と当日赤澤徳明氏はコメントされた。しかし、筆者は胎土・色調・調整から在地の甕と判断し、櫛描文の細さや直線文の合わせ方からも栗林式甕の可能性が高いと判断した。5～7・9は大ぶりの波状文と口唇部に指頭による刻みを持つ甕である。9は口縁部に縦羽状、以下に直線文2段、（コンパス状）波状文を持つようである。8・9・11は縦の直線文を持ち、9・11は長さが短い縦の羽状文を施文する。

4. 安曇野市黒沢川右岸遺跡の弥生土器

第2図12～17は、安曇野市黒沢川右岸遺跡出土である（百瀬ほか1988）。12～14は櫛描文で波状文を多段に描き、12は胴部文様の上に、13・17は口縁部内面に、15は頸部文様上下と口縁部内面に櫛描文の工具で刺突を左周りに施す。16は条痕の甕で、口縁部から胴部上半には縦条痕、胴部には斜条痕を施し、胴部下半にアワ・キビの種子圧痕と思われる穴（16b）を確認できた。

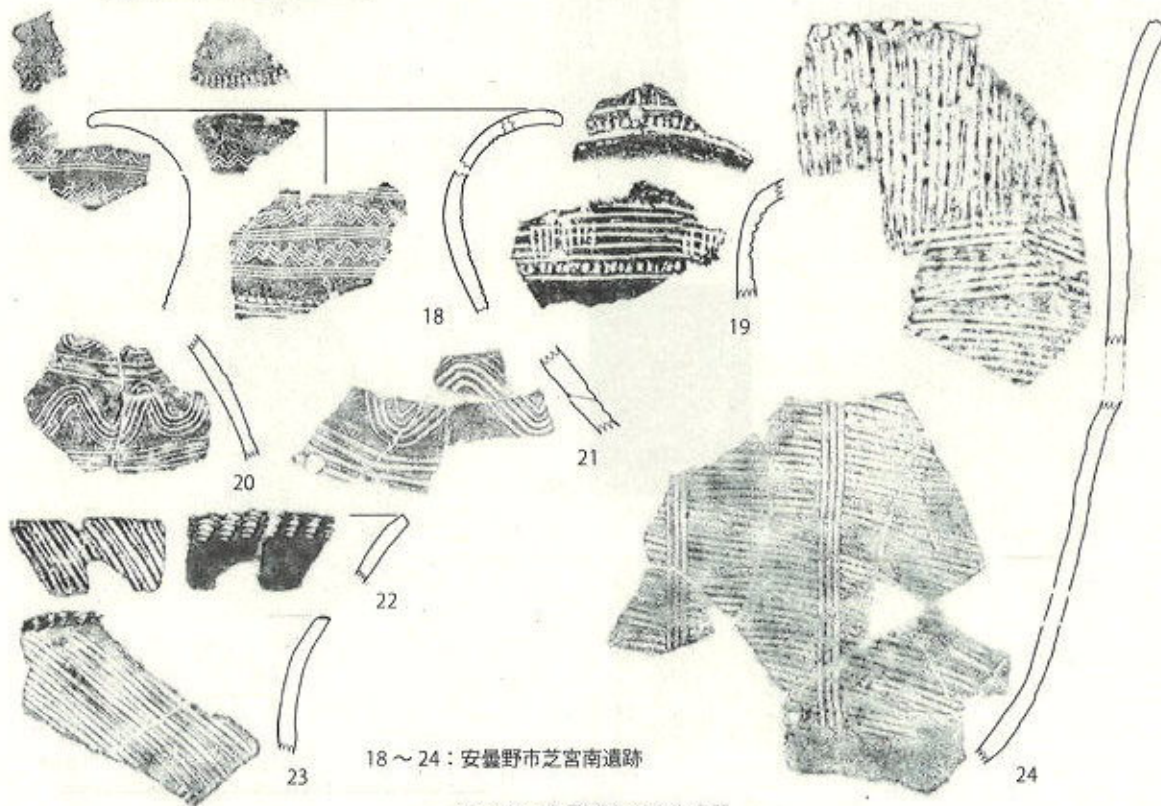
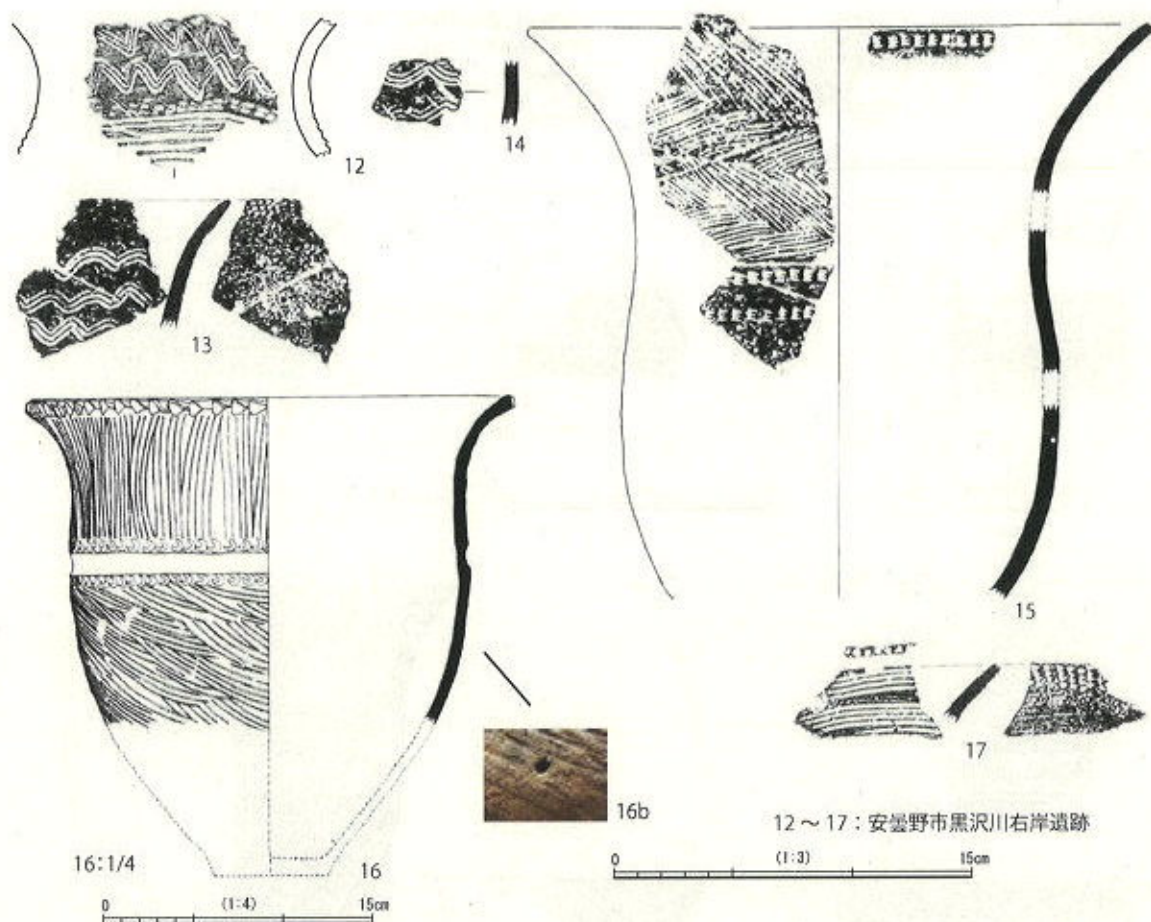
5. 安曇野市芝宮南遺跡の弥生土器

第2図18～24は、安曇野市芝山南遺跡出土である（土屋ほか2016）。18は土屋ほか2016第12図21～23を基に筆者が作図した。口縁が大きく開く壺であり、外面はナデ調整のち櫛描文が施文される。波状文+直線文を4段施文し、無文帯を置いて刺突文と直線文を引くようである。しかし、口縁部には薄く、頸部以下には厚い煤が付着しており、甕として通常に使用されていたようである。18の砂粒は微量で目立つ砂粒は無いが白色砂粒はある。文様・胎土から北陸系の搬入土器（馬場2022）とさ

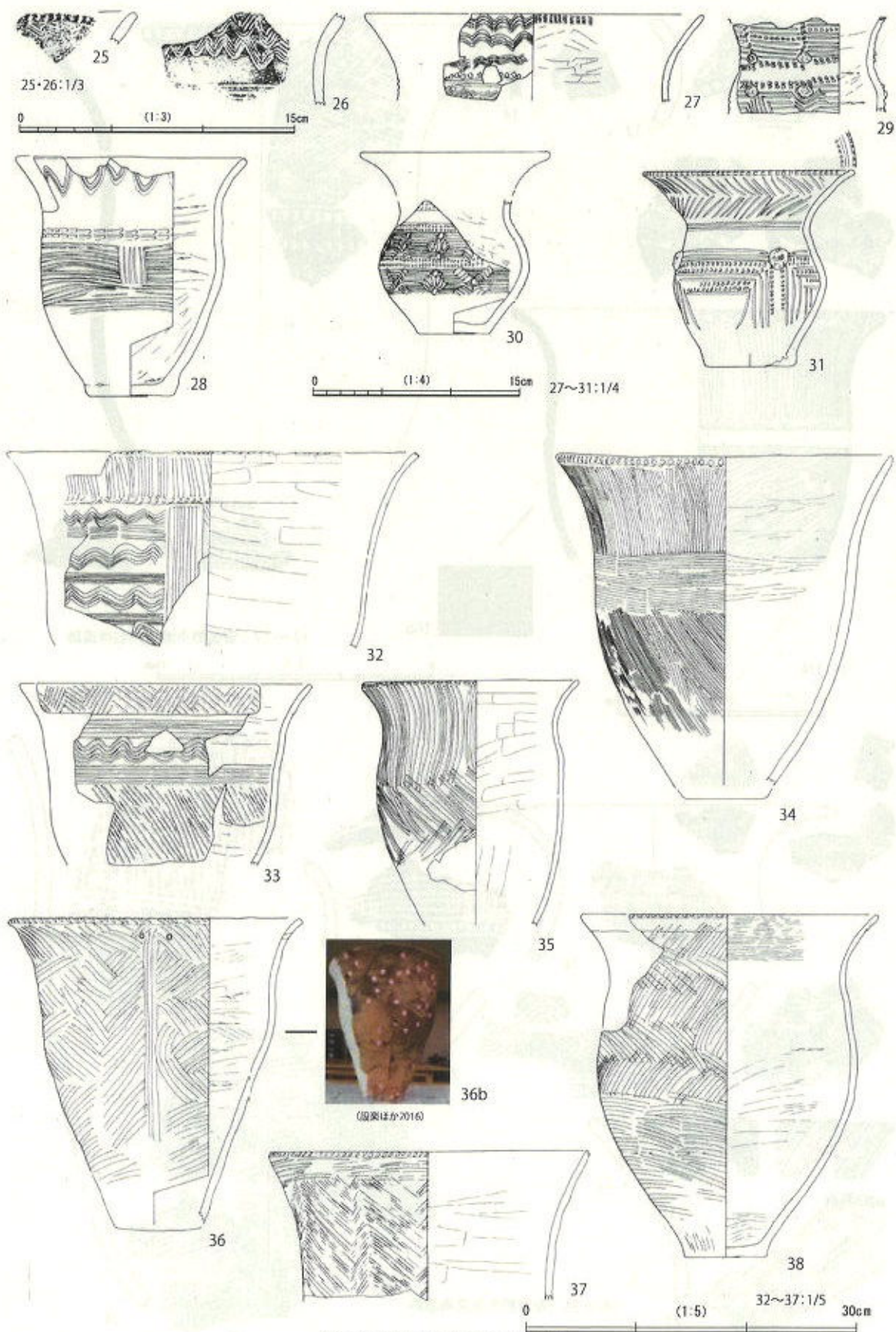


第1図 大町市来見原遺跡の弥生土器

れるが、口縁部内刺突や胴部上半の刺突文や胴部の沈線文から北陸系ではない。19は頸部に直線文を引き、最下段に刺突文を施す沈線文系壺で、刺突は中空の工具であり、中空の工具は栗林式にもみられる(徳永1996)。20・21は直線文と大振りの波状文を持つ壺であり、21の下の直線文は沈線であり、左側に挟りを持つ。同一個体で、砂粒は少ないが白色砂粒が主体で茶色・角閃石・シャモットを含む。22・23は横羽状の甕と思われ、22は口縁部内面には横羽状の工具による刺突文を施す。24は口縁部から頸部にかけて縦条痕を施し、胴部は斜条痕後に縦の条痕を間隔開けて施文する。



第2図 安曇野市の弥生土器



第3図 松本市境窪遺跡の弥生土器

6. 松本市境窪遺跡の弥生土器

第3図25～38は、松本市境窪遺跡出土である（直井ほか1988）。25～28は、緩い頸部を持ち、ナデ調整後に口縁部に波状文を施す甕で、27以外は中・小型である。29～31は沈線文系壺で、ボタン状突起と刺突文を多用する。29・30の胴部文様は4単位より多く、逆に31の胴部文様は3単位で少なく、時間的な変化などがみられる。31の胴部文様は縦位の重コの字状の文を持ち、口縁部文様は横羽状文である。永井宏幸氏は、沈線文系壺の中に木曾川流域から搬入された土器があるとコメントされた。32・33は口縁部を少し厚くして羽状文や縦の直線文を施し、頸部以下を直線文+波状文を複帯構成で施す。32は縦の直線文で文様帯を区切る。34・35は口縁部から縦の条痕を施すが、頸部の屈曲は共に弱い。34は横の条痕で区切り、胴部下半は斜条痕を施す。35は胴部下半には横羽状条痕を施す。36は縦・横の羽状文を施し、縦の条痕を入れる。36bには種子圧痕が多く確認され、アワ・キビが卓越し、コメも確認されている（設楽ほか2016）。37は口縁部に横位の直線状、以下に縦の羽状文を施す。38は頸部の屈曲は他の甕と同様に緩いが、胴部中央に最大径があるので胴部が少し張る器形である。境窪遺跡の甕の条痕は上から下に施されているので、条痕調整ではなく文様である。

7. まとめ

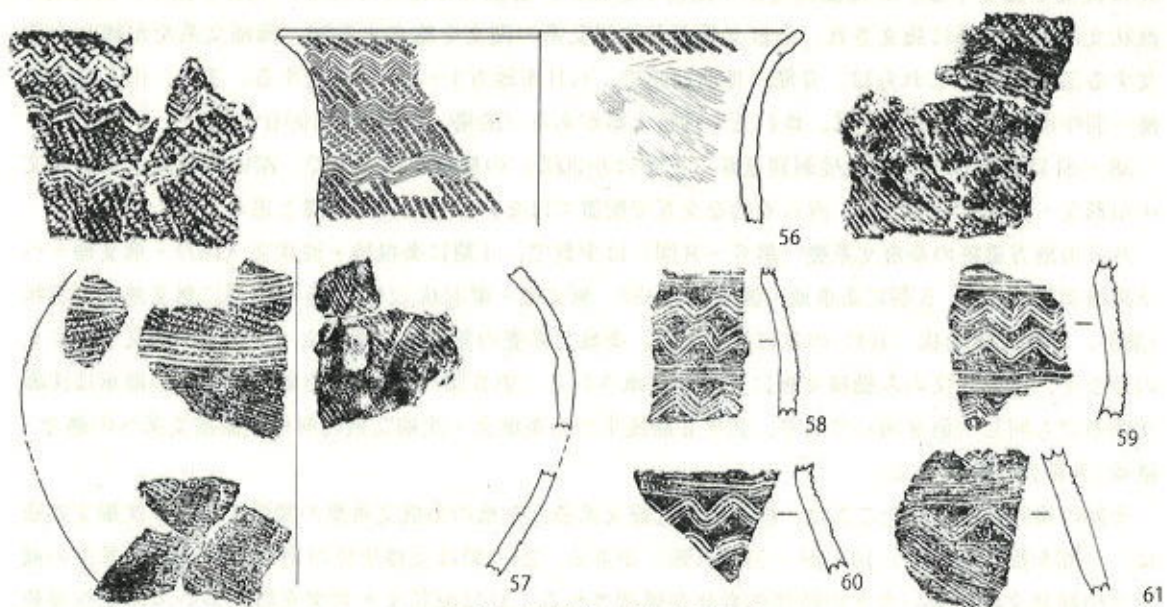
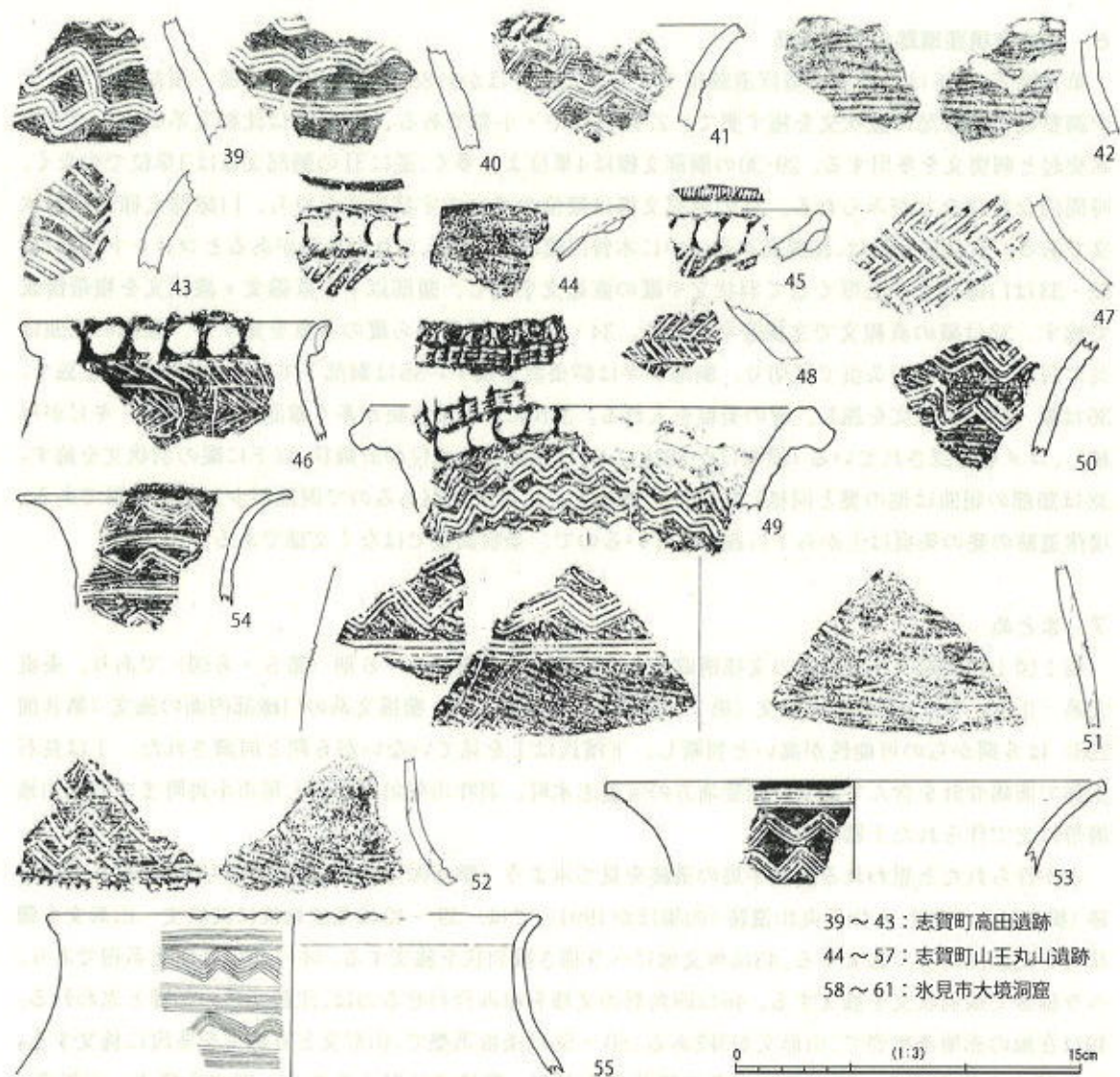
第1図1の直線文+波状文の文様構成から、八日市地方遺跡4～6期（第5・8図）であり、条痕文系（Ⅱ系）では5期に内面施文（第7・8図236）があるが、櫛描文系の口縁部内面の施文（第8図298）は6期からの可能性が高いと判断し、下濱氏は1を見ていないが6期と同調された。1は長石主体で海綿骨針を含んでおり、能登地方の宝達志水町、羽咋市柴垣町から七尾市小島町までの邑知地溝帯以北で作られた土器である。

1が作られたと思われる能登半島の遺跡を見てみよう（第4図）。石川県志賀町（旧富来町）高田遺跡（橋本ほか1999）と山王丸山遺跡（的場ほか1994）では、39～42は条痕地紋に波状文・山形文を櫛状具と指頭沈線文で施文する。43は無文地にヘラ描き縦羽状を施文する。44～48は条痕文系壺であり、ヘラ描きで横羽状文を施文する。46は四角形の文様を組み合わせるのは、沈線文系の影響と思われる。49は在地の赤塗条痕壺で、山形文が3段ある。50～56は条痕系甕で、山形文と直線文を多段に施文する。56は縄文を施文する。57は櫛描文系中期前半壺だが、櫛描文は深く丸く、縄文を施す。山形文・波状文は条痕文系に施文され、条痕文系だが沈線文系の縄文を施文する56、櫛描文系だが縄文を施文する57がある。これらは、Ⅱ期～Ⅲ期初頭で、八日市地方4～6期に併行する。また、山王丸山遺跡～羽咋市柴垣須田遺跡では、鉄石英を含む土器がある（的場・久田ほか1994P123）。

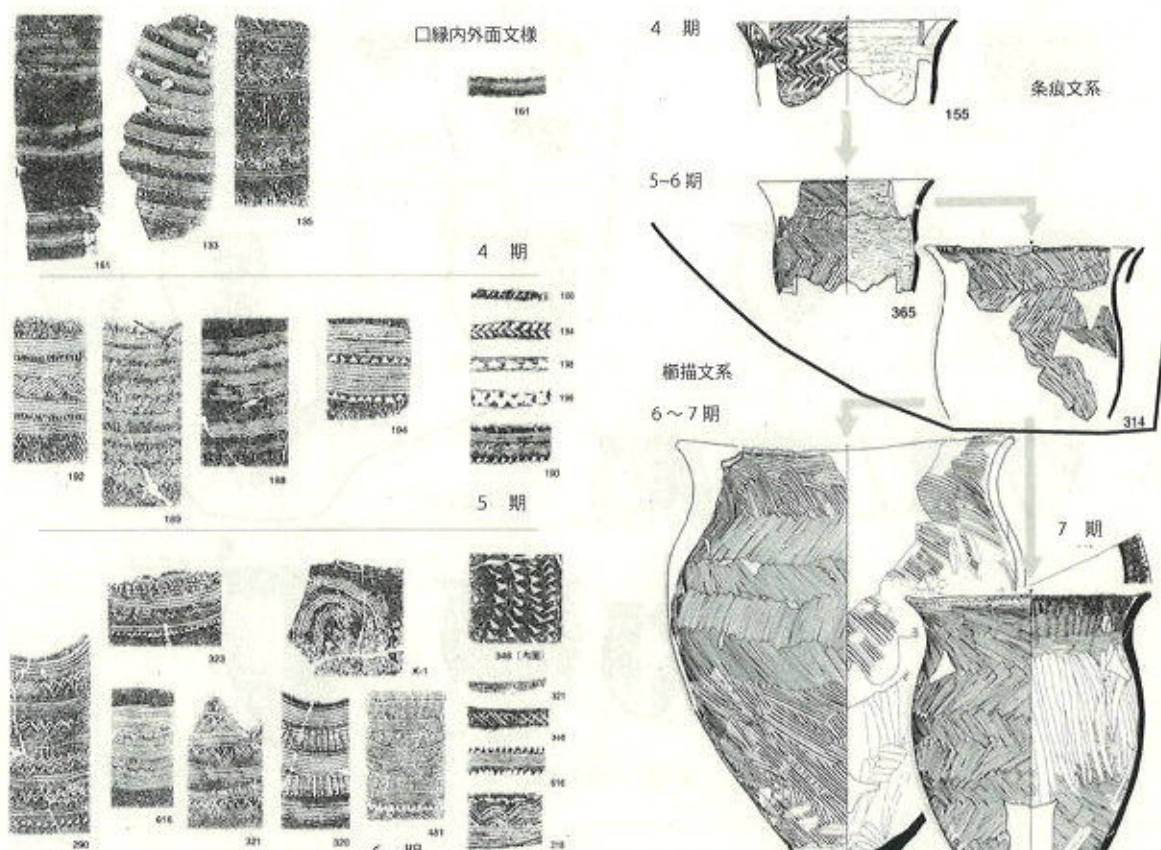
58～61は富山県氷見市大境洞窟遺跡（上野ほか2002）の櫛描文系の甕で、深い工具による直線文+山形文・波状文を施すが、西日本的な交互で配置ではない。Ⅲ期初頭以降と思われる。

八日市地方遺跡の条痕文系甕（第6～8図）は少数で、4期に条痕地+波状文（167）・無文地+ヘラ描横羽状（155）、5期に条痕地+波状文（245）、無文地+縦羽状（247）、5～6期に無文地+横羽状（305）、6期に横羽状（314）のみに減少する。条痕文系甕の無文地に直線文+波状文や縄文を施すものではなく、横羽状文のみ櫛描文系に文様が継承される（第8図）。この量的変化と文様の継承は沈線文系壺でも同じ（第9図）であり、弥生Ⅱ期後半での条痕文・沈線文系の解体、櫛描文系への融合・継承（久田2003）である。

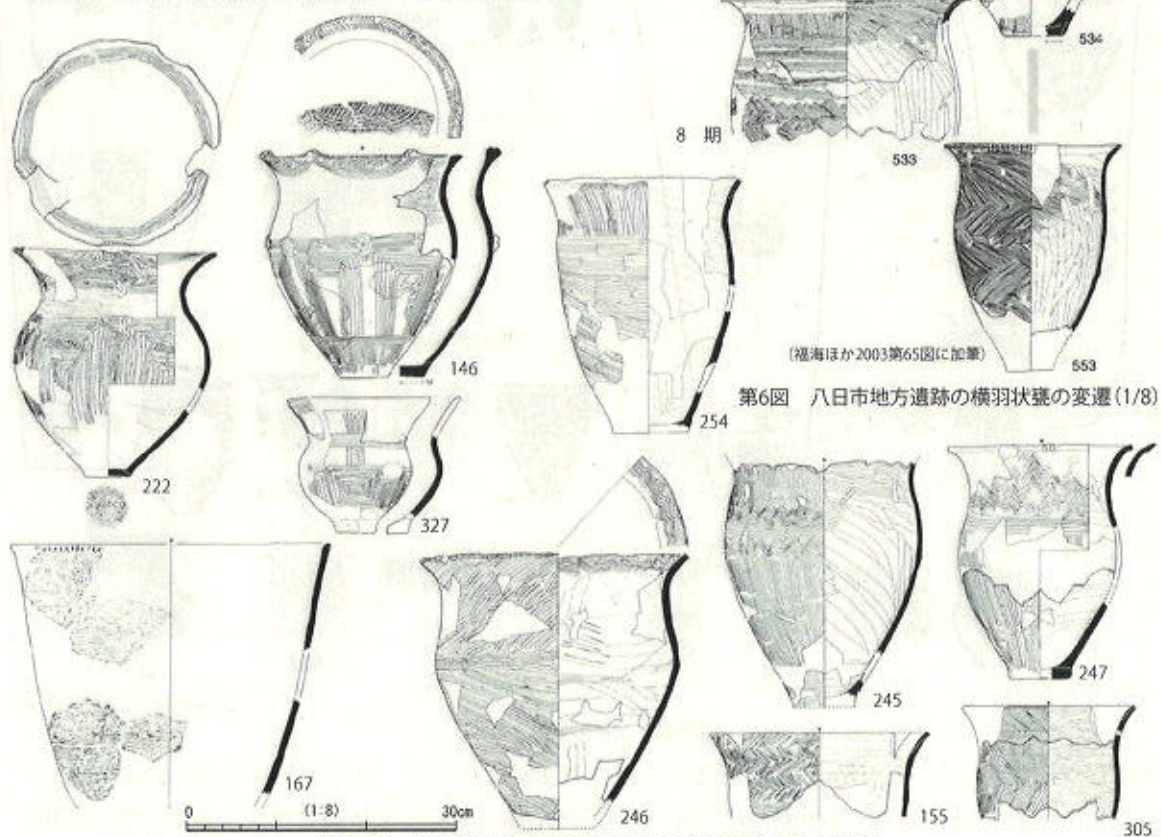
今回の検討会で感じたことは、松本平の沈線文系壺と在地の条痕文系甕の関係である。沈線文系壺は、一部を提示したが、19・29～31（A類）がある。29・30は文様単位の増加、31は文様単位の減少と口縁部文様の違いなどの時間的な変化が確認される。31は羽状文と刺突充填が多いのは文様規範



第4図 能登半島の弥生土器(1/3)

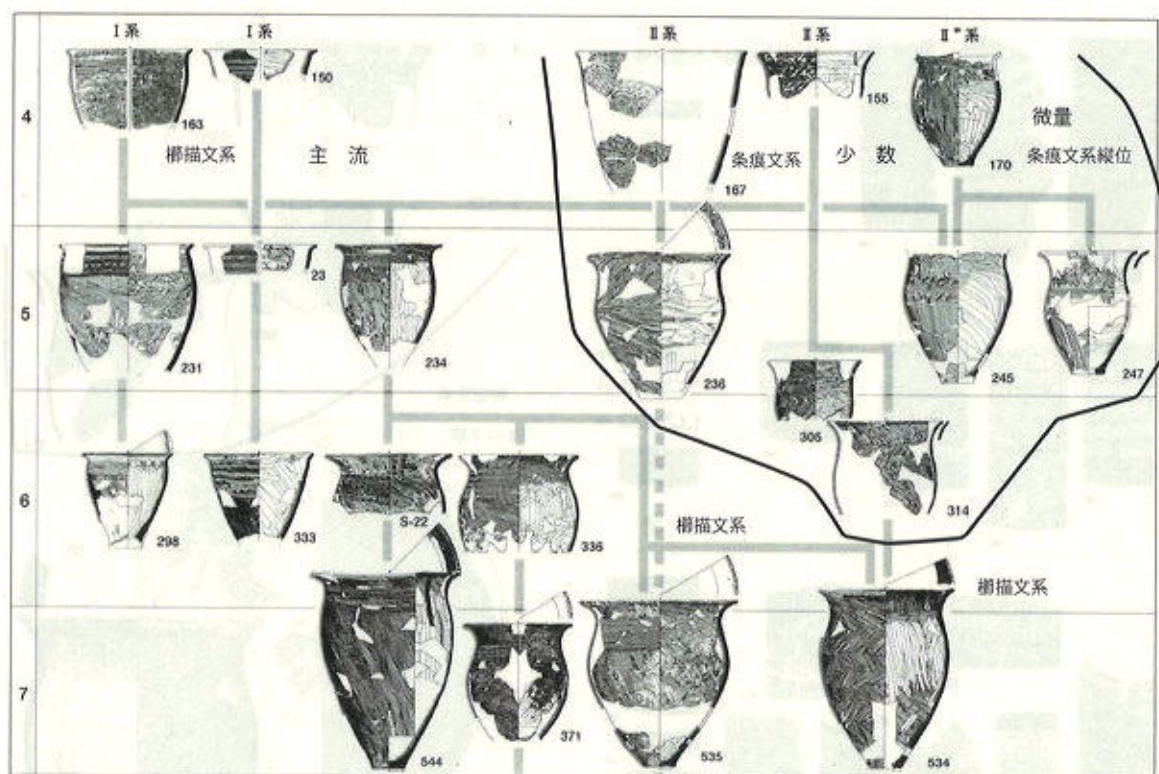


第5図 八日市地方遺跡の文様の変遷 (福海ほか2003第61図)



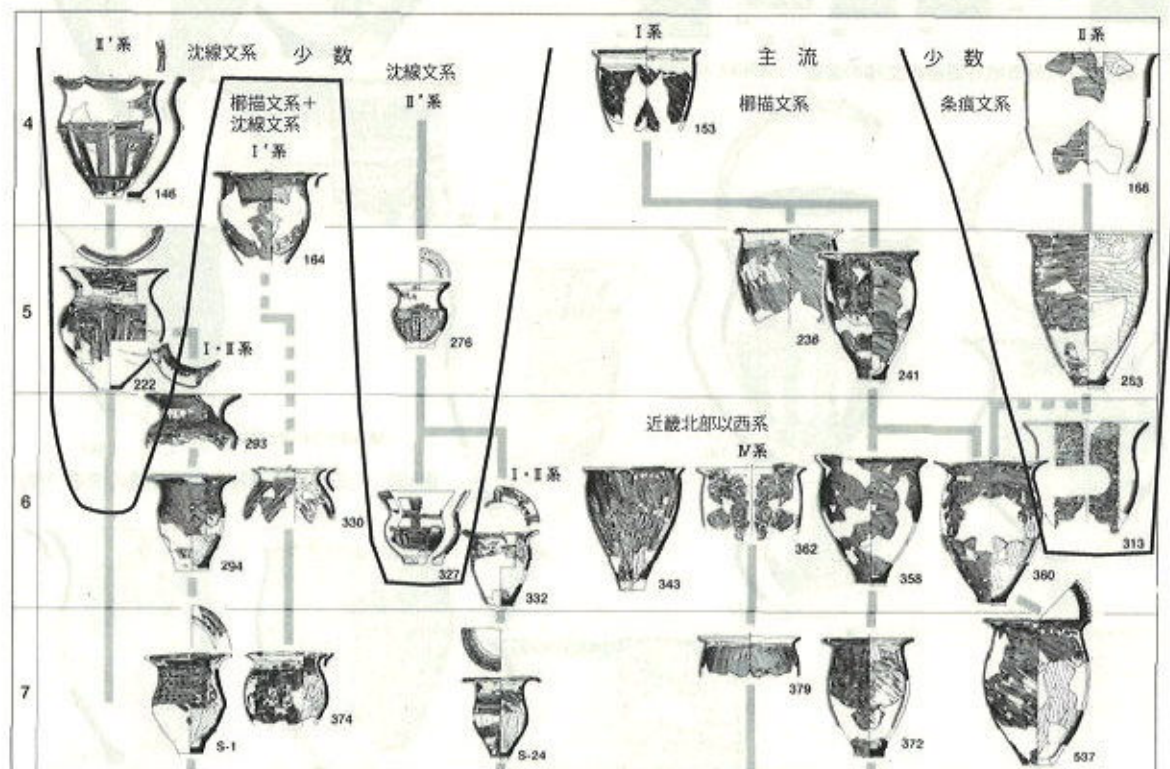
第6図 八日市地方遺跡の横羽状襷の変遷 (1/8)

第7図 八日市地方遺跡の沈線文系・条痕文系土器 (1/8)



第8図 土器の変遷1(1/15)

(福海ほか2003第82図に加筆)



第9図 土器の変遷2(1/15)

(福海ほか2003第84図に加筆)

の崩れが指摘されている(馬場2022)。また、29の刺突文は15・17・18などと同じ工具と思われる。

12～14・18・25～28は口縁部から頸部にかけて無文地に波状文を多条に施文する壺・甕(B類)

であり、口縁部内面に櫛状具の刺突文を施すものもある。12・18・25・26は小型壺と思われ、A類との関係が想定されよう。13・27は大型の甕であるが、27の刺突文と縄文はA類との関係が想定される。条痕文系甕（C類）は頸部・胴部の屈曲が弱く、縦位（a類）、縦羽状（b類）、横羽状（c類）、波状文など（d類）がある。15の胴部文様はA類の刺突文（29・30）、d類はB類との関係が想定される。C類の甕は緩く外反する器形であるが、栗林式甕になると、頸部の屈曲が強くなり、a類は消滅するが32・36の縦の区切り文様とb～d類の文様は継承される。また、沈線文系壺の文様（重コの字状・重四角形文とボタン状浮文）も栗林式甕に引き繋がれる。条痕は24・34などの幅の太いものから、条間が少し空いて幅が狭い8～11などになり、3の栗林式のように条が細くなる傾向が窺える。これは、工具の変化・交代である。

在地の土器は、先端が円い櫛状具で施文され、櫛状具の先端で刺突文を施文している。1も同じような工具の可能性があり、これは北陸地方の中期中葉の櫛描文の断面底（断面方形）とは異なる。条痕系39～41・50～57などと櫛描文系58～61も同様な工具の可能性がある。下濱氏によると1の櫛描文は八日市地方遺跡でも古い様相と同じであり、中期中葉以降の櫛描文とは工具が違うとの教示を得た。

松本平の中期前葉後半においては、細い条痕系甕と沈線文系壺は同じ工具で、同じ文様を施し、中間的なB類も生まれている。B類の18は文様・胎土の違いから北陸からの搬入土器（馬場2022）とされたが、口縁部内面の刺突文、胴部上半の刺突文と沈線文が異なる。境窪遺跡の沈線文系土器には永井氏から木曽川中流域からの搬入土器があるとコメントされた。その視点で考えると18・20・21は在地や北陸系とは砂粒が異なるので同意できる。馬場氏の指摘された土器は、木曽川中流域からの搬入土器の可能性が高いが、白色砂粒から富山県の上流部（飛騨地方）の可能性も残したい。

能登地方での条痕・沈線文・櫛描文系土器の融合は、櫛描文主体分布圏の周辺で起こった現象であり、B類の成立も同様な流れと思われる。この櫛描文主体分布圏の周辺での変化が多方面から流入し、松本平にも影響を与えたものと思われる。

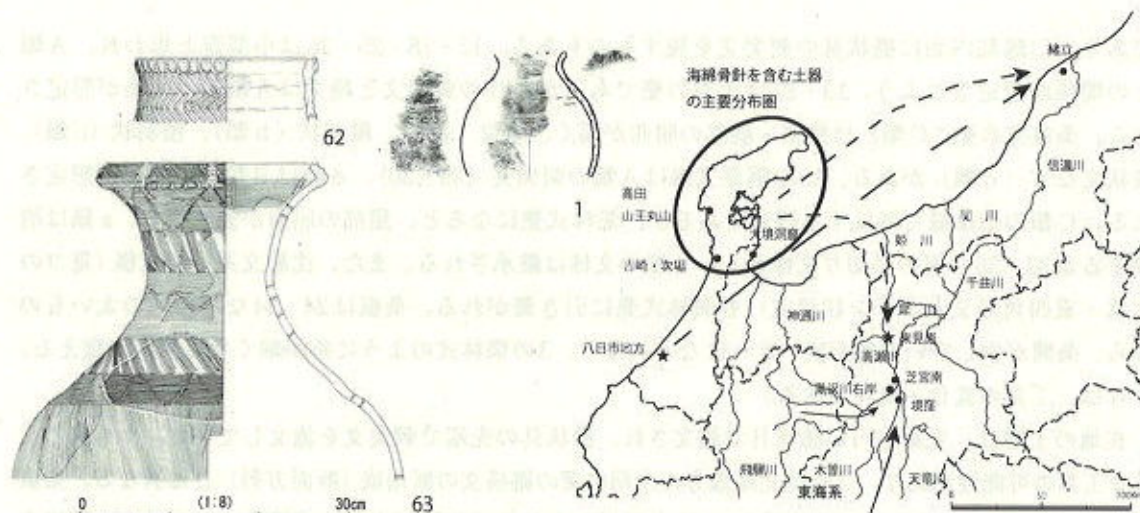
北陸系土器の東への動き（第10図）は、八日市地方5期に緒立遺跡（荒川ほか1998）に能登地方の条痕文系土器62と南加賀地方の条痕文系土器63が搬入された（久田2016）。八日市地方6期に長野県大町市来見原遺跡第10図1が能登地方から搬入された。八日市地方7期には上越市吹上遺跡（笹沢2006）に南加賀地方・能登地方・富山県からの櫛描文土器の搬入、八日市地方8期以降に新潟市西郷遺跡（荒川1998）でも南加賀地方からの櫛描文土器の搬入が確認された（久田2016）。土器の観察会などでは、文様・調整・色調などの特徴で土器の出自を確認することが一般的であり、混和材での確認は難しい。しかし、大地域を超える土器の移動を確認するには、混和材の確認も有効である。

8. おわりに

31年振りに来見原遺跡の土器を見た際に、昔の記憶が蘇らなかった。当時のメモと土器を観察し直して、本稿を書かないといけないと決断した。それは、長野県の弥生研究を推進されてきた笹沢浩氏が今年1月に亡くなられたことへの追悼の意と、筆者の32年間の怠慢を反省する為である。

レプリカ法が採用されて久しいが、松本平の中期前半の種子圧痕研究ではアワ・キビが圧倒的に多く、後半にはイネが増加するという（馬場2022）。安曇野市ほうろく屋敷遺跡第70図5・6では種子の脱落痕の文字記載と図化（大沢ほか1991）と第2図16bにもアワ・キビの種子圧痕と思われるものがある。

今回も、多くの方々の協力を得たが、間違いなどは筆者の責任である。安曇野市文化財資料センター、大町市文化財センター、松本市考古博物館、赤澤徳明、石川日出志、石黒立人、植木雅博、上野 章、白居直之、小野大輔、岡 智康、勝野 実、佐々木由香、島田哲男、下濱貴子、白川美冬、鈴木とよ



第10図 弥生中期前半の北陸系土器の動き

子、関本景香、森 直行、鳥居貴庸、直井雅尚、永井宏幸、中島庄一、平林大樹、北條芳隆、星野宙也、堀 久士、室 正一、山下康永の協力を得た。

参考文献

- 荒川隆史ほか 1998 『黒埼町史資料編一 原始・古代・中世』黒埼町
- 大沢 哲ほか 1991 『ほうろく屋敷遺跡』明科町教育委員会
- 上野 章・大野 究ほか 2002 『水見市史7考古資料編五』水見市
- 笹沢正史ほか 2006 『吹上遺跡』上越市教育委員会
- 設楽博己ほか 2016 『SEEDS CONTACT 3』設楽科研事務所
- 島田哲男ほか 1988 『来見原遺跡Ⅱ』大町市教育委員会
- 土屋和章・山下泰永ほか 2016 『芝宮南遺跡』安曇野市教育委員会
- 徳永哲秀 1996 『松原遺跡の櫛描文土器—その施文具のあり方を追う(その1)』『長野県埋蔵文化財センター紀要5』長野県埋蔵文化財センター
- 直井雅尚・竹原 学ほか 1998 『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市教育委員会
- 橋本澄夫ほか 1999 『高田遺跡』富来町教育委員会
- 馬場伸一郎 2022 『水稻農耕導入期の中央高地東部』『南関東の弥生文化』吉川弘文館
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92号』長野県考古学会
- 久田正弘 2003 「弥生時代の影響関係について」『石川県埋蔵文化財情報第9号』(財団)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2016 「弥生時代における土器の移動について」『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 福海貴子 2003 『八日市地方遺跡出土土器の検討』『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
- 百瀬新治ほか 1988 『黒沢川右岸遺跡』三郷村教育委員会
- 的場俊勝・久田正弘ほか 1994 『山王丸山遺跡』富来町教育委員会

石川県埋蔵文化財情報 第 49 号

発行日 2023（令和 5）年11月30日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <https://www.ishikawa-maibun.or.jp>
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 ㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター

